

ジャン・クリストフ

JEAN CHRISTOPHE

第一卷 曙

青空文庫

いずれの国の人たるを問わず、

苦しみ、闘い、ついには勝つべき、

あらゆる自由なる魂に、捧ぐ。^{こた}

ロマン・ローラン

昼告ぐる曙あけぼのの色ほのかにて、
汝なが魂は身内に眠れる時……

—— 神曲、煉獄の巻、第九章 ——

うち湿りたる濃き霏もやの

薄らぎそめて、日の光

おぼろに透し来るごとくに……

——神曲、煉獄の巻、第十七章——

河の水音は家の後ろに高まつている。雨は朝から一日窓に降り注いでいる。窓ガラスの亀裂ひびのはいった片隅には、水の滴したたりが流れている。昼間の黄ばんだ明るみが消えていって、室内はなま温くどんよりとしている。

赤児あかごは揺籃ゆりかごの中でうごめいている。老人は戸口に木靴を脱ぎすててはいって来たが、歩く拍子すかに床板ゆかいたが軋きしつたので、赤児はむずかり出す。母親は寝台の外に身をのり出して、それを賺すかそうとする。祖父は赤児が夜の暗がりを恐こわがると思けないと思って、手探りでラ

ンプをつける。その光で、祖父ジャン・ミシエル老人の赤ら顔や、硬い白髭しろひげや、気むずかしい様子や、鋭い眼付などが、照らし出される。老人は揺籃ゆらんのそばに寄ってゆく。その外套がいとうは雨にぬれた匂いがしている。彼は大きな青い上靴うわぐつを引きずるようにして足を運ぶ。ルイザは近寄ってはいけないと彼に手真似まねをする。彼女は白いといつてもいいほどの金髪で、顔立はやつれていて、羊のようなやさしい顔には赤痣あかあざがあり、唇くちびるは蒼ざめて厚ぼったく、めつたにあわさらず、浮べる微笑もおおずおおずとしている。彼女は赤児を見守っている——ごく青いぼんやりした眼で、その瞳ひとみはきわめて小さいがいたって物優しい。

赤児は眼を覚して泣く。その定かならぬ目差まなざしは乱される。なんという恐ろしさだろう！ 深い闇やみ、ランプの荒々しい光、渾沌こんとんのなかから出てきたばかりの頭脳の幻覚、周囲にたちこめている息苦しいざわめく夜、底知れぬ影、その影の中からは、まぶしい光線のように強く浮かび出してくる、強烈な感覚が、苦悩が、幻影が、こちらをのぞきこんでる。それらの巨大な顔が、自分を貫き自分のうちにはいり込む意味の分らないそれらの眼が！ ……赤児は声をたてる力もない。彼は身動きもせず、眼を見開き、口を開け、喉のどの奥で息をしながら、恐怖のために釘付くぎつけにされる。その膨れた大きな顔には皺しわが寄って、痛ましい奇怪な渋面じゆうめんになる。顔と両手との皮膚は、栗色で紫がかっており、黄っぽい斑点が

ついている……。

「いやはや、なんて醜い奴だ！」と老人は思い込んだ調子で言った。

彼はランプをテーブルの上に置きに行った。

ルイザは叱しかられた小娘のように口をとがらした。ジャン・ミシエルは横目で彼女を眺ながめて、そして笑った。

「きれいな奴だと言ってもらおうとは、お前も望んでやすまい。お前にだつてきれいだとは思えまい。だがいいさ、お前のせいじゃない。赤ん坊でものはみんなこんなものだ。」

子供はランプの炎と老人の目差まなざしとに驚き、ただ惘ぼう然ぜんとして身動きもしなかったが、やがて声をたて始めた。おそらく彼は母親の眼の中に、苦情を言うがいと勧めるような愛撫あいぶを、本能的に感じたのであろう。彼女は彼の方へ両腕を差出して言った。

「私にかしてください。」

老人はいつもの癖で、まず理屈を並べた。

「泣くからといって子供の言うままになつてはいけない。勝手に泣かせることだ。」
しかし彼は子供のところへ来て、それを抱き上げ、そしてつぶやいた。

「こんな醜い奴は見たことがない。」

ルイザはわなわなしてる手で子供を受取り、胸深く抱いた。彼女はきまり悪げなまた喜びにたえないような微笑を浮べて、子供を見守った。

「おう、かわいいそうに、」と彼女はたいそう恥ずかしそうにして言った、「坊やはなんて醜いでしょう、なんて醜いでしょう、ほんとにかわいいこと！」

ジャン・ミシエルは暖炉のそばにもどった。彼は不機嫌な様子で、火をかきたて始めた。しかしその顔に装つてる陰鬱なしかつめらしさは、軽い微笑の影で裏切られていた。

「お前、」と彼は言った、「ねえ、苦にしちやいけない。まだまだこれから顔付は変わるものだ。それに、醜いったつてそれがなんだ？ この子に求むることはただ一つきりだ、りっぱな者になってくれということだ。」

子供は母親の温かい身体に触^{さわ}つて心が和らいでいた。息を押^{むさ}えて食^ほるように乳を吸つてる音が聞えていた。ジャン・ミシエルは椅子^{いす}の上で軽く身をそらして、おごそかにくり返した。

「正直な男ほどりっぱなものはない。」

彼はちよつと黙つて、その思想を敷衍^{ふえん}したものでどうか考えた。しかしそれ以上言うべきことを見出さなかつた。そしてしばらく黙つた後、激した調子で言い出した。

「夫がいなとは、どうしたことだ？」

「芝居に行つてるのでしよう。」とルイザはおずおず言った。「下稽古したげいこがありますから」

「芝居小屋は閉まつている。わしは今その前を通つて来たんだ。それもまた彼奴あいつの嘘うそだ。」

「いいえ、あの人がかりをいつもおとがめなすつてはいけません。私の思い違いかもしれ
ませんから。では出稽古に手間取つてるのでしよう。」

「もう帰つて来られるはずだ。」と老人は満足しないで言った。

彼はちよつと躊躇ちゆうちよして、それから少し気恥しげに声を低めて尋ねた。

「彼奴あいつは……また……？」

「いいえ、お父様とう、いいえ。」とルイザは急せぎ込んで言った。

老人は彼女を眺めた。彼女はその前に顔をそらした。

「ほんとうじゃない、お前は嘘をついてるな。」

彼女は黙つて涙を流した。

「ああ！」と老人は大声を出しながら、暖炉を一つ蹴けった。火搔棒ひかきが落ちて大きな音をた
てた。

母親と子供とはふるえあがった。

「お父様、どうぞ、」とルイザは言った、「坊やが泣き出しますから。」

子供は泣声をたてたものかそれともやはり静かにしていようかと、しばらく躊躇し
た。しかし両方を同時にすることができないので、やはり静かにしていた。

ジャン・ミシエルは腹立ちまぎれにいっそう太い声で言いつづけた。

「わしはどんなことをした報いで、あんな酔漢を息子に持ったのか！ わしのような生活をし、万事に不自由な目を忍んだのも、むだな骨折りだったのか！……だがお前は、お前は彼奴を制することができないというのか。なぜかって、そりやお前の役目じゃないか。お前が彼奴を家に引留めさえしたら……。」

ルイザはなお激しく涙を流していた。

「このうえ私を叱ってくださいますな、私もうたいへん不仕合せですもの。私はできるだけのことはしました。ああ一人でいるとどんなに恐ろしい思いをしていますか、それを察してくださいましたら！ いつでも階段にあの人の足音が聞えるような気がします。すると私は扉が開くのを待ちます。まああの人はどんな様子で出てくるかしらと考えます。……それを思ってみるだけでも気がふさいでできます。」

彼女はすすり泣きに身をふるわしていた。老人は気をもんだ。彼は彼女のそばにやって来、その震えてる両肩に乱れた蒲団ふとんをかけてやり、大きな手でその頭をなでてやった。

「さあ、さあ、心配することはない。わしがついてる。」

彼女は子供のことを思つてむりに気を鎮めしずめ、そして微笑ほほえもうとした。

「あんなことを申しましたのは、私が悪うございました。」

老人は頭をうち振りながら彼女を眺めた。

「かわいそうに、わしがお前にやった贈物はりっぱなものではなかった。」

「私の方が悪いんです。」と彼女は言つた。「あの人は私みたいな者と結婚なさるのではありませんでした。自分のしたことを後悔なすつています。」

「何を後悔しているつて？」

「それはあなたがよく御存じでございましょう。私があの人の妻になりましたのを、あなた御自身でも気を悪くしていらつしやいました。」

「もうそんな話をするもんじやない。なるほどわしは多少不満だった。あのような青年——こう言つたつて何もお前の気にさわりはすまい——わしが注意して育て上げた青年、すぐれた音楽家で、ほんとうの芸術家で——まったく彼は、お前のように貧乏で、身分が違

い、なんの技能もない者より、もつとほかの女を選ぶこともできたはずだ。クラフト家の者が音楽家でもない娘と結婚するなんてことは、もう百年あまりこの方例ためしがないんだ！——それでも、お前もよく知っているとおり、わしはお前を恨んだこともないし、お前と知り合つてからはいつも好意をもっていた。それに、一度こうときまつてしまえば、もう後もどりはできない。あとはただ義務を尽すことばかりだ、正直に。」

彼は元の席へもどつて腰掛け、ちよつと間をおいて、それから、いつも自分の格言を口にする時のような厳いかめしさで言った。

「人生で第一のことは、おのれの義務を尽くすことだ。」

彼は抗議を待ち受け、火の上に唾つばをした。それから、母親も子供もなんら異論をもち出さなかつたので、なお言葉をつづけたく思った——が、口をつぐんだ。

彼らはもう一言も口をきかなかつた。ジャン・ミシエルは暖炉のそばで、ルイザは寢床にすわつて、二人とも悲しげに夢想していた。老人はああは言ったものの、息子の結婚のことを苦にが々しげに考えていた。ルイザの方も同じくそのことを考えていた、そしてみずから非難すべき点は何もなかつたけれど、それでも気がとがめていた。

ジャン・ミシエルの子メルキオル・クラフトと結婚した時、彼女は女中であった。でその結婚にはだれも驚いたが、とくに彼女自身が驚いた。クラフト家には財産はなかったが、約半世紀前に老人が居を定めたそのライン河畔の小さな町では、かなり尊敬されていた。彼らは父子代々の音楽家で、その地方、ケルンとマンハイム間では、音楽家仲間にながれわたっていた。メルキオルは宮廷劇場のヴァイオリニストであった。ジャン・ミシエルは近頃まで大公爵の演奏会を指揮していた。でこの老人はメルキオルの結婚に深い屈辱を感じた。彼は息子に大きな希望をかけていて、自分自身ではなれなかったけれども、息子の方は高名な人物になしたいと思っていた。ところがこの無謀な結婚は、その望みを打ち壊してしまった。それで最初のうちは盛んに怒鳴りたて、メルキオルとルイザとをのりちらした。しかし根が正直な人だけに、嫁の気心をよく知つてくると、すぐに彼女を許してやった。そして父親としての愛情をさえ心にいだくようになった。がその愛情はたいてい冷たい素振りとなつて現われていた。

メルキオルが何に駆られてそういう結婚をしたのか、だれも了解することができなかつた——だれよりもメルキオル自身に訳が分らなかつた。確かにルイザの美貌のせいではなかつた。彼女は少しも人を惑わすような点をもつてはいなかつた。背が低く、蒼ざめて、

虚弱だった。ところがメルキオルとジャン・ミシエルとは二人とも、背が高く、でっぷりして、赤ら顔の、たくましい拳こぶしをし、よく食い、よく飲み、笑い事の好きな、騒ぎやの大男だったので、彼女とおかしな対照をなしていた。彼女はまるで彼らに圧倒されてるかと思われた。だれも彼女へはほとんど注意を向けなかったが、それでも彼女はなおいつそう隅すみつこに引込んでばかりいようとしていた。もしメルキオルがやさしい心をもつてゐるのだつたら、彼は他のあらゆる利益をうち捨ててルイザの純良な気質を選んだのだとも、考えられないことはなかった。しかし彼は最も浮薄な男だった。で結局、かなりの好男子で、自分でもそれを知らないではなく、またごく見栄坊みえぼうで、そのうえ多少の才能もあり、金持ちの娘に眼をつけることもでき、また彼がみずから自慢してたように、中流市民の女弟子のどれかを夢中にならせることさえもできる——たれかいずくんぞ知らんやではあるが——という、彼のような一個の青年が、財産も教育も容色もない賤いやしい娘を、しかも向うからもちかけても来なかつた娘を、突然妻に選ぼうとは、まったく賭事かけごとみたいな沙汰さたらしく見えるのであつた。

しかしメルキオルは、他人が期待してることやまた自分みずからが期待してることとは、常に反対のを行なうような類たぐいの男であつた。かかる人たちは目先のきかないわけでは

ない——目先のきく者は二人前の分別があるそうだが……。彼らは何事にも欺あざむかれることがないと高言し、一定の目的の方へ自分の舟を確実に操あやつつてゆけると高言している。しかし彼らは自分自身を勘定に入れていない、なぜなら自分自身を知らないから。いつも彼らにありがちなその空虚な瞬間には、彼らは舵かじを打ち捨てておく。そして物事は勝手に放任されると、主人の意に反することに意地悪い楽しみを見出すものである。自由に解き放された舟は、まっすぐに暗礁を目がけて進んでゆく。かくて野心家のメルキオルは女中風情ふぜいと結婚した。とは言え、彼女と生涯の約を結んだ時、彼は酔っ払ってもいなければぼんやりしてもいなかった。また彼は情熱いざなの誘いをも感じてはいなかった。そんなものは非常に欠けていた。しかしわれわれのうちには、情意以外の他の力が、感覚よりも他の力が、——普通の力が皆眠っている虚無の瞬間に主権を握るある神秘的力が、おそらく存在しているのかもしれない。ある夕方、ライン河畔で、メルキオルがこの若い娘に近づき、葦あしの中で彼女のそばにすわり——みずから理由も知らないで——彼女に婚約を与えた時、おずおずと彼を眺めてる彼女の沈んだ瞳ひとみの底で、彼はこの神秘的な力に遭遇したのであろう。

結婚するとすぐに、彼は自分のしたことに落胆したような様子をした。彼はそのことをあわれなルイザにもさらに隠さなかった。ルイザはいかにもつつましましやかに、彼に許しを

求めた。彼は悪い男ではなかった、そして快く彼女を許してやった。しかしすぐその後で、友人らの間に交わったり、または金持ちの女弟子の家に行ったりすると、ふたたび悔恨の念にとらえられた。女弟子らはもう軽侮の様子を見せていて、彼が鍵盤キ盤キの指の置き方を正してやろうとして手でさわっても、もはや身を震わすようなことはなかった。すると彼は陰鬱いんうつな顔付をしてもどつて来た。ルイザはそれを一目見て、またいつもの非難をよみとつて、つらい思いをした。あるいはまた彼は、居酒屋に立ち寄つて遅くなることもあった。彼はそこで、自分自身にたいする満足と他人に対する寛容とを汲みとつた。そういう晩には、からから笑いながらもどつて来た。しかしそういう笑いは、いつもの口には出さない考えや胸に蓄えてる怨恨えんこんよりも、ルイザにはいつそう悲しく思われた。彼女は夫のそうしたふしだらにたいして、自分にも多少責任があるように感じていた。そのふしだらのためごとに、家の金がなくなるとともに、夫の心に残つてゐるわずかな真面目まじめさもしいに消えていった。メルキオルは身をもちくずしていった。たえず勉つとめて自分の平凡な才をみがくべき年ごろに、彼はずるずると坂を滑り落ちて顧かえりみなかった。そして他人に地位を奪われていった。

しかしながら、麻のような髪の毛の一女中に彼を結びつけた不可知なる力にとっては、

それがなんの関係があらうぞ。彼はただ自分の役目を演じたのである。そして今や小さなジャン・クリストフが、運命の手に導かれて、この地上に足を踏み出していた。

すっかり夜になっていた。ジャン・ミシエル老人は暖炉の前で、昔や今の悲しいことどもを考えながらぼんやりしていたが、ルイザの声ではつと我にかえった。

「お父様、あの人はきつと遅くなるでしょう。」と若い妻はやさしく言っていた。「もうお帰りなさいませ、道が遠うございますから。」

「メルキオルが帰るまで待つていよう。」と老人は答えた。

「いいえ、どうぞ、いてくださらない方がよろしゅうございます。」

「なぜ？」

老人は顔をあげて、じつと彼女を眺めた。

彼女は答えなかった。

彼は言った。

「お前は恐がつているね。彼奴あいつにわしを会わせたくないんだね。」

「ええ、そうでございます。お会いになれば事がめんどうになるばかりでしょう。あなた

はきつとお怒りなさいます。いやです。お願いですから！」

老人は溜息ためいきをつき、立ち上がり、そして言った。

「よしよし。」

彼は彼女のそばに行き、ざらざらした髻ひげで彼女の額をなでた。そして何か用はないかと尋ね、ランプの火をねじ下げ、暗い室の中を椅子いすにぶつつかりながら出ていった。しかし階段を降り始めないうちに、息子が酔っ払ってもどつてくることを頭に浮べた。彼は一段ごとに立止った。息子が一人で帰って来たらどんなことになるだろうかと、いろいろ危険な場合を想像してみた。

寝床の中では、母親のそばで、子供がまた動きだしていた。未知の苦悩が、おのれの存在の奥底から湧わき上がってきていた。彼は母親に身を堅く押しつけた。身体をねじまげ、拳こぶしを握りしめ、眉まゆをひそめた。苦悩は力強く平然と、大きくなるばかりであった。その苦悩がどういふものであるか、またどこまで募つてゆくものか、彼には分らなかつた。ただ非常に広大なものであり、決して終ることのないものであるように思われた。そして彼は悲しげに声をたてて泣き出した。母親はやさしい手で彼をなでてやった。苦悩はもうずっと和らいでいた。しかし彼は泣きつづけていた。自分の近くに、自分のうちに、その苦悩

がいつもあるように感じていたからである。——大人が苦しむ時には、その苦しみの出処を知れば、それを減ずることができる。彼は思想の力によって、その苦しみを身体の一部に封じ込める。そしてその部分はやがて回復されることもできれば、必要に応じては切り離されることもできる。彼はその部分の範囲を定め、自分自身から隔離しておく。しかし子供の方は、そういうごまかしの手段をもたない。彼と苦しみとの最初の邂逅は、大人の場合よりもより悲壮でありより真正直である。自分自身の存在と同じように、苦しみも限りないもののように思われる。苦しみは自分の胸の中に棲み、自分の心の中に腰を据え、自分の肉体を支配してのように感ぜられる。そしてまた実際そのとおりである。苦しみは彼の肉体を啄んだ後でなければ肉体から去らないだろう。

母親は子供を抱きしめながら、かわいい言葉をかけている。

「さあ済んだよ、済んだよ、もう泣くんじやありません。ねえ、いい子だからね……。」

子供はなお途切れ途切れに、訴えるように泣きつづける。その無意識な不格好なあわれな肉の塊は、自分に定められてる労苦の一生を予感してるかのようである。そして何物も彼を静めることはできない……。

サン・マルタンの鐘の音が、夜のうちに響きわたった。その音は荘重でゆるやかで

あつた。雨に濡れた空気の中を、苔の上の足音のように伝わっていった。子供はすすり泣いていたが、ぴたりと声を止めた。豊かな乳が流れ込むように、美妙的な音楽が静かに彼のうちに流れ込んできた。夜は輝きわたり、空気は和やかで温かだった。子供の苦悩は消えてゆき、その心が笑い始めた。そして彼は我を忘れた大きい息を一つして、そのまま夢の中におちこんでいった。

三つの鐘が静かに鳴りつづけて、明日の祭りを告げていた。ルイザも鐘の音に耳を傾けながら、過去の惨めなこともを思い浮かべ、またそばに眠ってるかわいい赤子の行末などをぼんやり考え耽った。彼女はもう数時間前から、けだるいがっかりした身を、寝床に横たえていたのである。手先や身体がほてつていて、重い羽根蒲団に押し潰される思いをし、暗闇のために悩まされ圧迫されるような気がしていた。しかし強いて身を動かさそうともしなかった。彼女は子供の顔を眺めていた。暗い夜ではあつたが、年寄りみたく子供の顔立を見分けることができた。眠気が襲つてきて、頭の中にはいらだたしい幻が通りすぎた。メルキオルが扉を開ける音を耳にしたように思つて、胸がどきりとした。時々河の音が、獣の吼え声のように、寂寥たる中に高く響いてきた。ガラス窓は雨に打たれて、なお二、三度音をたてた。鐘の音はしだいにゆるやかになつてゆき、ついに消えてしまった。そし

てルイザは子供のそばで眠りに入った。

そういう間、ジャン・ミシエル老人は、雨の中に、霧に髻ひげを濡らして、家の前で待っていた。惨みじめな息子の帰宅を待っていた。頭がたえず働いて、泥でいすい酔いから起こるいろんな悲しい出来事をあれこれと想像してやまなかったのである。実際そういう事が起ころうとは信じなかったけれども、もし息子もどつて来るのを見ないで帰ったら、その晩一睡もできなかもしれないなかった。鐘の音を聞いて彼の心は非常に悲しくなっていた。空くうに終わった昔の希望を思い起こしたからである。こんな時刻に、この往来の中で、自分は今何をしているか、それを彼は心に浮べていた。そして恥はずかしさのあまり涙を流していた。

月日の広漠たる波は徐々に展開してゆく。限りなき海の潮の干満のように、昼と夜とは永遠に変わることなく去来する。週と月とは流れ去つてはまた始まる。そして日々の連続は同じ一日に似ている。

極きわみなき黙々たる日、それを印しるしづけるものは、影と光との相等的な律動、また揺籃ようらんの底に夢みる遅鈍な存在の生命の律動——あるいは悲しいあるいは楽しいやむにやまれぬその欲望、それは昼と夜ともたらされながら、かえつてみずから昼と夜とを招き出すかと思

われるまでに、規則正しく波動する。

生命の振子は重々しく動いている。全存在はそのゆるやかな波動のうちにのみ込まれる。その他は皆夢にすぎない、うごめく奇形な夢の断片、偶然に舞い立つ原子の埃ほこり、人を笑わせあるいは恐れさせつつ過ぎてゆく眩めまぐるしい旋風にすぎない。喧騒けんそう、揺らめく影、奇怪な形、苦悩、恐怖、哄笑こうしょう、夢、種々の夢……。——すべて皆夢にすぎない……。——そしてその混沌こんとんの中には、彼に微笑ほほえみかくる親しい眼の光、母の身体から、乳に脹はれた乳房から、彼の身体のうち伝わりわたる喜悦の波、彼のうちにあつて自然に積り太つてゆく力、その小さな子供の体内に閉じこめられて轟とどろき出す湧きたった大洋。かかる幼児の内部を読み分けうる者は、影の中に埋もれたる幾多の世界を、しだいに形を具えゆく幾多の星雲を、形成中の全宇宙を……。そこに見出すであろう。幼児の存在には限界がない。彼は存在するすべてのものである……。

月は過ぎてゆく……。記憶の島が、一生の河の流れから現われ始める。最初は、眼にもとまらぬ狭い小島で、水面とすれすれになつて巖いわである。それらのものの周囲には、夜が明けゆく薄ら明りの中に、静かに大きい水脈がずっとひろがってゆく。それからこんど

は、金色の日の光を浴びた新しい小島が現われる。

魂の深淵しんえんから、不思議に明確な種々の形が湧き出てくる。単調な力強い波動をなしながら、永遠に同じ姿でくり返される無辺際の日の中に、あるいは歓びよろこの顔をしあるいは悲しみの顔をして、たがいに手をつなぎ合はして幾多の日の丸い群が、浮び出して来る。しかしその鎖の環かんはたえず切れて、思い出は週や月……をまたぎ越してたがいにつながり合う。

河……鐘……。思い出の届くかぎり遠くに——時の遠い曠野こうやの中に、生涯のいかなる時代にもせよ——それらの奥深い親しい声は、常に歌っている……。

夜——うとうとと彼が眠る夜……。蒼あおざめた明るみが窓ガラスをほの白く染めている……。河は音をたてている。その声は、寂寞の中に力強く高まってくる。あらゆる存在の上に働きかける。あるいはそれらのものの眠りを和らげ、また河波の響きのままにみずからもうとうとしてるかと思われる。あるいは噛かみつこうとて狂い回ってる野獸やじゅうのように、いらだち咆哮ほうこうする。その怒号が静まると、こんどは限りなくやさしい囁ささやき、銀の音色、澄み切った鈴の音のようなもの、子供の笑い声のようなもの、やさしい歌声、踊り舞う音楽。決して眠ることのない大いなる母性の声！ その声は子供を揺ゆする、彼より以前に存在し

たあらゆる時代の人々を、その生から死に至るまで、幾世紀の間も揺すつてやったがように。そして子供の思想の中にはいり込み、その夢の中に沁み込み、澱みなき諧調のマントで彼をくるんでやる。やがて彼がラインの河水に浴する水のほとりの小さな墓地に横たわる時も、そのマントはなお彼をくるんでくれるであろう……。

鐘の音……。もはや曙！ 鐘の音は、憂わしげに、多少悲しげに、親しく、静かに、た

がいに響き合う。そのゆるやかな声音につれて浮かび上がってくる、夢の群が、過去の様々の夢が、消え失せた人々の欲望や希望や悔恨が。子供はそれらの人々を少しも知らなかつたけれども、それでもなお昔は彼らにほかならなかつた、なぜなら、彼は彼らのうちに存在していたから、また彼らは彼のうちに甦つてきているから。幾世紀もの思い出が、今鐘の奏する音楽の中に震えている。数多の悲しみと数多の歡び！——そして、室の奥からでも、その鐘の音を聞いていると、軽い空気の中を流れゆく美しい音波や、自由な鳥や、風の温かい息吹きなどが、すぐ眼の前を通りすぎるがように思われる。青い空の一部が窓に微笑みかけている。一条の日の光が、窓掛から滑り込んで寢床の上に落ちてゐる。子供が見慣れた小さな世界、毎朝眼を覚しながら寢床から眺めるすべてのもの、自分のものにして、多くの努力を払つて、それと知り始め名づけ始めたすべてのもの——彼の

王国が輝き出す。皆が食事をするテーブル、彼が隠れて遊ぶ戸棚、彼がはい回る菱形の床かかし石、おかしな話や恐ろしい話を彼にしてくれる種々な皺しわのある壁紙、彼だけにしか分らない片言かたことをしゃべる掛時計。なんとたくさんのものが室の中にあることだろう！ 彼はそれらのすべてを知りつくしてはいない。毎日彼は、自分に属してその宇宙に探険に出かける——すべてが彼のものである。——一つとしてつまらないものはない。一人の間も一匹の蠅はえも、すべてが同じ価値をもっている。猫ねこ、火、テーブル、一筋の光の中に舞い立ってる細かな埃ほこり、皆同じ価に生きている。室は一つの国である。一日は一つの生涯である。そういう広漠たる中において、どうしておのれを認められよう？ 世界はかくも大きい！ 自分の姿が見分けられない。そして周囲にたえず渦巻うずいている。それらの顔、身振り、運動、音響……。子供は疲れてくる。眼は閉じて、彼は眠ってゆく。快い眠り、深い眠り、身を置くに好ましいところなら、母親の膝ひざの上でもテーブルの下でも、どこであろうとまたいつであろうと、彼は突然それにとらえられる……。あたりは快い、自分自身も快い……。

それら最初の日にちにち々は、大きな雲の移りゆく影を宿して風に吹かるる麦畑のように、子供この頭の中に騒々しい音をたてる……。

影は逃げ去って、太陽がのぼってくる。クリストフは一日の迷宮の中に、自分の道を見出し始める。

朝……。両親は眠っている。彼は自分の小さな寢床に仰向あおもむけに寝ている。彼は天井に踊る光の線を眺める。それは尽くることなき楽しみである。にわかには彼は声高く笑う。聞く者の心を喜ばせる子供の善良な笑い。母親は彼の方に身をかがめて言う、「まあどうしたの、坊や。」すると、見る人がいるのでなお努めて笑うのもあろうか、彼はますます晴やかに笑う。母親はしかつめらしい様子をして、父親を覚まさないようにと、彼の口に指を一本あてる。けれども彼女の疲れてる眼は、我知らず笑っている。二人はいっしょにささやき合う……。と突然、父親は激しく怒鳴りつける。二人とも震え上がる。母親は罪を犯した小娘のように、急いで寝返りをして、眠ったふりをする。クリストフは寢床に深く身を埋めて、じつと息をこらす……。死のような沈黙。

しばらくすると、毛布の下にかがまっていた子供は、そつと顔を覗のぞき出す。屋根の上には風見かざみが軋きしっている。樋とからは点滴しずくがたれている。御告みつけの袴いのりの鐘が鳴る。風が東から吹く時には、対岸の村々の鐘が、ごく遠くからそれに響ききを合わせる。木蔭きつたのからだ壁に群

がつてる雀すずめが、騒さわがしく鳴きたてる。その中には、一群の子供の遊びに見られるように、他のよりもずつと疝かん高いいつも同じような三、四の声こゑが、ひときわ高く響ひびいている。一羽の鳩はとが、煙突の頂上のぼで喉のどを鳴らしている。子供はそれらの音ねに身を任せる。彼は歌い出す、ごく低く、それから少し高く、それからごく高く、次には非常に大きな声で。するとついに、父親は声をとがらしてまた怒鳴る、「この驢馬ろばめ、まだ黙らないのか！ 待つてろ、耳を引張つてやるぞ！」そこで子供はまた毛布の中にもぐり込む。笑つていいか泣いていいか分らない。恐怖と屈辱くじくとを感ずる。それと同時に、自分がたとえられた驢馬ろばのことを頭に浮べると、思おもわず放笑ふきだしてしまふ。寢床ねこの奥から、驢馬ろばの鳴声なまを真似まねる。とこんどは打たれる。彼は身体じゅうの涙をしばつて泣く。自分は何をしたというのだろうか？ 彼は笑わらいたくてたまらない、動き出したくてたまらない！ それなのに身を動かすことは禁ぜられてる。どうして皆みんなはいつまでも眠れるのだろうか！ いつ起き上がったらいいかしら？……

ある日、彼はもう我慢がしきれなくなつた。猫か犬か、なんだか珍しい音が、往来に聞きえたのである。彼は寢床ねこの外そとに忍しのび出る。小さな素足すそで無器用むきように床ゆかいし石いしをたどりながら、階段かたを降りて見みに行きたくなる。しかし扉しは閉しまつている。それを開ひらくために椅子いすの上に

のる。とたんに何もかも引っくり返る。身体を痛めて彼は泣き声をたてる。おまけにまた打たれる。いつでも打たれるのだ！……

彼は祖父といっしょに教会堂にいる。退屈してくる。たいへん気づまりである。身動きすることも許されない。会衆は彼に分らない言葉をいっしょに言い、それからまたいっしょに黙ってしまふ。皆おごそかな陰気な顔をしている。平素の顔付とは違っている。彼はおずおずと人々を眺める。隣家のリナ婆ばあさんは、彼の横にすわって、意地悪そうな様子をしている。時とすると、祖父までが見違えるような様子になる。なんだか薄気味が悪い。けれどそのうちには慣れてくる。できるだけのことをして退屈をまぎらそうとする。身体を揺つたり、首をまげて天井を眺めたり、顔をしかめたり、祖父の上着を引っ張つたり、椅子いすにつまっている藁わらを調べたり、指先でそれに穴を開けようとしたり、鳥の声に耳を傾けたり、また頤あごがはずれるような大欠伸あくびをする。

突然どつと音響がする。オルガンがひかれてるのである。彼は背筋にぞつと戦慄せんりつを感じる。ふり向いて椅子の背に頤をのせる、そしてごくおとなしくしている。彼にはその音響がさつぱり腑ふに落ちない。それが何を意味するのか少しも知らない。それはただ輝き渦

巻いて、何にも見分けられない。けれども快いものである。もう一時間も前から、退屈な古い家の中で、ぎごちない椅子にすわっていること、その気持がどこかへ行つてしまふ。

鳥のように空中に浮かんでる気がする。そして音響の大河が、いくつもの丸天井を満たし、壁にはね返されて、会堂の隅すみから隅へ流れわたる時には、自分の身体もそれに運ばれ、翼を搏うつてあちらこちらと飛び回り、その誘いに身をうち任せるのほかはない。自由であり、幸福であり、日が輝いている……。彼はうつらうつらと居眠りをする。

祖父は彼にたいして不満である。彼はミサに列して行儀が悪い。

彼は家において、両手で足をかかえ床ゆかにすわっている。靴くつ拭ふ蓆むしろを舟ときめ床ゆかいし石いしを川ときめたところである。蓆むしろから出ると溺おぼれてしまうと考かんえてるらしい。他の人たちが無む頓とん着ちやくに室内を通るのに、彼は驚おどきまた多少気を悪くしている。彼は裳しょう衣いの襞ひだをつかまえて母親を引き止める。「このとおり水だよ！ 橋を通らねばいけないよ。」——橋というのは、菱形の赤い床石の間につづいてる小溝こみぞである。——母親は彼の言葉ことばを耳にもかけないで通つてゆく。ちようど戯曲作家が自作の開演中に勝手な話をしてる観客を見る時のように、彼はじれている。

次の瞬間には、彼はもうそんなことは考えていない。床石はもう海ではない。彼は長々と床石の上にねそべって、石の上に頤をつけ、自分で作り出した音楽を口ずさみ、涎よだれを垂らしながら真面目まじめくさつて親指を舐ねぶっている。床石の間にある割目に見入っている。菱形のその列が人の顔のようにしかめる。眼にもつかないような小さな穴が、大きくなつて谷になる。そのまわりにはいくつも山がある。一匹の草鞋虫わらしむしがはっている。それが象のように大きい。雷が落ちても子供の耳にははいらぬだろう。

だれも彼にかまってくれない。彼はだれにも用はない。靴拭くつふきむしろ席の舟、奇怪な獣のいる床石ゆかいしの洞窟どうくつ、そんなものさえもうなくてすむ。自分の身体だけでたくさんだ。身体はなんとという興味の泉だろう！ 彼は自分の爪つめを眺めて大笑いしながら、いく時間も過す。爪はそれぞれ違った顔付をしていて、知つてる人たちに似かよっている。彼はそれらを、いつしよに話さしたり、踊らしたり、殴り合なぐわしたりする。——それからこんどは身体他の部分！……彼は自分に属するものを残らず検査しつづける。なんとたくさん驚くべきものがあることだろう！ 不思議なものが実にたくさんある。彼は珍らしそうにそれらのものに見とれる。

時々、そういうところを人に見つけられて、彼は手荒く抱きとられた。

時おり彼は、母親が向うを向いてる隙すきに乗じて、家から外にぬけ出す。初めのうちは、後から追いかけてつかまつてしまう。後になると、あまり遠くへさえ行かなければ、一人で出かけるままに放つておかれる。彼の家は町はずれにある。すぐそばから野原がつづいている。彼は窓が見える間は、時々片足で飛びながら、ちよこちよこ足をふみしめて、ちつとも立止まらなで歩いてゆく。けれども、道の曲り角を通りすぎると、藪やぶに隠されてだけれども見られなくなると、にわかの様子を変える。まず立止まつては指を口にくわえて、今日はどういう話をみずから語ろうかと考える。頭の中にいっぱい話をもつてるのである。もとよりその話は何れも皆似寄つたもので、また三、四行で書き終えられるくらいのものである。彼はそのどれかを選ぶ。たいていはいつも同じ話をとり上げて、それを前日話し残したところからやりだすか、または違った趣向をたてて初めからやりだす。新しい話の筋道を考え出すには、ごく些細さいさいなことで十分である、ふと耳にした一言で十分である。

偶然の事柄からいつもたくさんの思い付が出てきた。垣根のほとりに落ちてるような（落ちていなければ折り取つてしまうのだが）、ちよつとした木片や折枝などから、どん

なものが引き出されるかは、人の想像にも及ぶまい。それらのものは妖精の杖であった。長いまつすぐなものは、鎗やりになったり剣になったりした。それを打振りさえすれば、多くの軍隊が湧き出した。クリストフはその大将で、先頭に立って進み、模範を垂れ、斜面を進撃して上つていった。枝がしなやかな時には、鞭むちになった。クリストフは馬に乗つて、断崖だんがいを飛び越えた。時とすると馬が足を滑らした。すると馬上の騎士は、溝の底に落ち込んで、よごれた手や擦りむいた膝頭をきまり悪げに眺めた。杖が小さい時には、クリストフは管弦楽団の長となつた。彼は指揮者でありまた楽員であつた。指揮し、また歌つた。それから彼は、小さな緑の頭が風に動いてる藪に向かつてお辞儀をした。

彼はまた魔法使であつた。よく空を眺めながら大手を振つて、大腿おおもたに野の中を歩いた。彼は雲に命令を下した。——「右へ行け。」——しかし雲は左へ動いていた。すると彼は雲をののしつて、命令を繰返した。自分の命令に従う小さなものでもありはすまいかと思つて、胸を躍おどらせながら横目で窺うかがつた。しかし雲は平然と左の方へ飛びつづけた。彼は足をふみ鳴らし、杖を振り上げて雲をおどかし、左へ行けと怒つて命令をかけた。するとこんどは、雲はまつたくその命令に服した。彼は自分の力に喜んで得意になつた。お伽とぎばなし噺で聞いたように、金色の馬車になれと命じながら花にさわつた。そして実際にはそういう

ことは起こらなかつたけれど、少し辛抱していればきつと起こるだろうと思ひ込んでいた。彼は一匹の蟋蟀こおろぎを捜し出して、それを馬にしようとした。蟋蟀の背中にそつと杖をあてて、一定の呪文じゆもんを唱えた。虫は逃げ出した。彼はその行く手をさえぎつた。しばらくすると、彼は虫のそばにはらばいに寝転んで、じつと眺めた。もう魔法使の役目を忘れてしまつて、そのあわれな虫を仰向あおむけにひっくり返しては、それがもがき苦しむのに笑い興じた。

彼は自分の魔法杖に古糸を付けることを考えだした。彼は真面目まじめくさつてそれを河の中に投げ込み、魚が食いに來るのを待つた。魚というものは普通餌えさも鈎かぎもない糸を食うものではないといふことは、彼もよく知つていたけれど、しかし一度くらいは、自分のために、魚が例外なことをするかもしれないと思つていた。そしてすつかり自惚うぬぼれのあまり、ついに溝板みぞいたの割目から杖を差入れて、往來の中で釣つりをするまでになつた。心を躍らせて時々その杖を引上げながら、こんどは糸が前より重いと考へたり、祖父から聞いた話にあつたように、何かの宝を引き上げるのではないかと想像したりした……。

そういうことをして遊んでる最中に、不思議な夢心地とまつたくの忘却とに陥る瞬間があつた。周囲のすべてのものは消え失せてしまつて、もう自分が何をしているかをも知ら

ず、自分自身をも忘れはてた。よくそんなことが不意に彼を襲った。歩いてる時、階段を上りかけてる時、突然空虚が開けてきた。彼はもう何にも考えていないようだった。そして我に返つてみると、前と同じ場所に、薄暗い階段の中ほどに、自分を見出して呆然ぼうぜんとしてしまった。それはあたかも、一つの生涯を過してしまったようなものだった——階段の二、三段ばかりの場所だ。

祖父はしばしば夕方の散歩に彼を連れていった。子供は祖父に手を引かれて、小股こまたに足を早めながら並んで歩いた。彼らはいつも、快い強い匂いのする耕作地を横ぎつて、小道を通つていった。蟋蟀こわろぎが鳴いていた。道にはだかつて横顔を見せてる大型からすの鳥が、遠くから二人の来るのを眺めていたが、間近になると重々しく飛び去った。

祖父はよく咳せき払いをした。クリストフはその意味をよく知っていた。老人は何か話を聞かせたくてたまらなかつたが、まず子供の方からせがんでもらいたかつたのである。するとクリストフはきつと話をせがんだ。二人の気持はたがいによく通じ合つていた。老人は孫にたいして深い愛情をいだいていた。そして孫のうちに熱心な聴衆を見出すことは、彼の喜びであつた。自分の生涯中の出来事や、古今の偉人の話を、彼は好んで語つてきかし

た。そういう時彼の声は、調子づいてきて情に激していた。押えきれぬ子供らしい喜びに震えていた。彼は夢中になってみずから自分の言葉に聞きとれてるらしかった。語ろうとする時にあいにく言葉が見つからないこともあった。しかし彼はその失望に慣れていた。雄弁の発作と同じくらいに何度もうり返されたからである。そして話し始むればいつもその失望を忘れてしまったから、いつまでもそれを諦めることができなかった。

彼がよく話すのは、レギュリユスのことや、アルミニユスのことや、リユーツオフの軽騎兵のことや、ケルネルのことや、皇帝ナポレオンを殺そうとしたフレデリック・スターブスのことであつた。異常な武勇談を口にのぼせると、彼の顔は輝いてきた。莊重な言葉をやたらに嚴しい調子でしゃべるので、まったく聞き分けられなくなるほどだつた。そして彼は、聴手が胸を躍らせる時分に少しじらしてやることを、上手なやり方と信じていた。彼は言葉を途切らし、息苦しうなふうを装い、騒々しく鼻をかんだ。そして子供が、待遠しさのあまり息詰つた声で、「それから、お祖父さん、」と尋ねると、彼の心は有頂天になつた。

その後、クリストフはだんだん大きくなって、ついに祖父の手段を見破るようになった。すると彼はもう意地悪くも、話の続きにたいして冷淡なふうを装うことを努めた。あわれ

な老人はそれに困らされた。——しかしまだ今のところでは、彼はまったく話手の自由になつていた。そして彼の血は、劇的な部分を聞くときくに躍りたつた。もうなんという人のことやら、またそれらの手柄がどこでいつなされたのやら、あるいは祖父が果してアルミニウスを知つていたかどうか、レギュリウスというのはこの前の日曜に教会堂で見かけた人——その訳は神のみぞ知る——ではないかどうか、そんなことは彼には分らなくなつた。彼の心は、また老人の心は、勇ましい手柄話になると、あたかもそれをしたのは自分たちであるかのように、自慢の念にふくれ上がった。なぜなら、老人も子供もともに等しく赤ん坊だつたから。

祖父が勇壮な話の中途に、心に大切にしまつてゐる議論の一つをはさむ時には、クリストフはあまり嬉しくなかつた。それはおもに道徳上の意見であつて、正しくはあるがやや陳腐な一つの思想にたいいていつづめられるようなものだつた、たとえば、「温和は過激に優る、」——「名誉は生命よりも貴し、」——「邪悪なるは善良なるに如かず、」などと。——そしてただ、それよりもずっと錯雜してゐるだけだつた。祖父は自分の幼い聴手の批評を恐れてはいなかつた。そしていつも心ゆくかぎりおおげさな調子で口をきいた。少しもはばからずに、同じ文句をくり返したり、途中で言葉を途切らしたり、また議論の途中で

まごつく時には、思想の破綻はたんをふさぎごうとして、なんでも頭に浮かぶことをでたらめに言ったりした。そして言葉をいつそう力強くなすためには、その意味と矛盾する身振りをさえ添えた。子供はごくかしこまって耳を傾けていた。そして、祖父は非常に雄弁だが多少退屈だと、彼は考えていた。

二人とも好んで、ヨーロッパを征服したあのコルシカの偉人に関する伝説的な物語に、何度も立ちもどつていった。祖父は彼を知っていた。かつてはも少しで彼と矛ほこを交ゆるところだった。しかし祖父は敵の偉さをも認めることができた。幾度となくそれを口にした。あれほどの人物がラインのこちらに生まれるなら、片腕くらいくれてやっても惜しまなかつたろう。しかし運命はそうは許さなかつた。祖父は彼を賛美していたが、彼と戦つた——言い換えれば、まさに彼と戦おうとしたのだった。けれども、ナポレオンがすでに十里ばかりの距離に迫つてき、それと会戦を期して進軍していた時、その小軍勢は突然狼狽ろうばいし出して、森の中に潰走かいそうしてしまつた。「謀叛むほんだ！」と叫びながらだれも皆逃げ出してしまうた。逃走者を引きとめようとしたが駄目だめだった、と祖父は話してきかした。祖父は彼らの前に身を投げ出して、おどかしたり涙を流して説いたりした。けれども逃走者の人波に巻き込まれて、翌日になると、戦場——と祖父は潰走の場所を呼んでいた——から驚

くほど遠くに来てしまつていたのである。それでも、クリストフはいつも急き込んで、その英雄の勳功談に祖父を引きもどした。そして世界じゅうを馬蹄ばていにふみにじつた驚くべき話に魅せられてしまつた。眼の前に浮かび出すその英雄は、無数の人民を後ろに従えていた。人民らは敬愛の叫びを発して、彼の合図一つで群がりたつて敵に飛びかかつてゆき、敵はいつも敗走した。それはまつたくお伽とぎばなし噺と同じだった。祖父は話を面白くするために、余計なものまで少しつけ加えた。その英雄はスペインを征服していた。許すことのできないイギリスをもほとんど征服していた。

時とすると老クラフトは、その熱烈な物語の中で、この英雄にたいする憤慨の語を交えることもあつた。愛国の精神が彼のうちに目覚めていた。そしておそらく、イエナの戦いくさの話よりも、皇帝の敗北の条くたりにおいていつそうそうであつたらう。彼は言葉を途切らして、ライン河に拳固げんこをさしつけ、軽侮の様子で唾つばを吐き、上品な罵言ばげん——他の下等な罵言を吐くほど彼は自分を卑しくしなかつた——を発した。悪人、猛獸、不徳漢、などとその英雄を呼んだ。そしてかかる言葉がもし、子供の精神の中に正義の觀念をうち立てるのを目的としていたのなら、それは的はずれのものであつたといふべきである。なぜなら、子供の論理は次のように結論しやすかつたから。「もしあんな偉い人が徳義をもつていなかつた

とするならば、徳義などということは大したものではない、最も大事なものは、偉い人になるということだ。」しかし老人は、自分のそばにようやく一人立ちをしかけてる幼い思想については、露ほどの察しもなかった。

二人はそれらの素敵な話をめいめい自己流に考え耽^{ふけ}りながら、いずれも黙っていた。――ただ途中で祖父が、自分を鼻^{ひいき}尻^きにしてしてくれてる上流のだれかが散歩してるのに出会うと、そうはいかなかった。祖父はいつまでも立止って、低くお辞儀をし、やたらに追^{ついで}従^{よう}的^{てき}なお世辞を並べたてた。子供はそれを見て、なぜともなく顔を赤くした。しかし祖父は、既成権力と「成上り者」とにたいしては、心の底に尊敬の念をいだいていた。話の主人公たる英雄らを彼があれほど好きだったのは、よく成上りえた人物を、他の者より高い地位に達しえた人物を、彼らのうちに見出していたせいかもしれないなかった。

ごく暑い時には、老クラフトはよく木蔭にすわった。そして間もなく仮睡することが多かった。するとクリストフは祖父のそばで、ぐらぐらする石積の横の方や、標石や、またどんなに不安定で変なものであるかと何か高いものがあれば、その上に腰を下した。そして小さな足をぶらぶら動かしながら、小声で歌ったりぼんやり考え耽^{ふけ}ったりした。あるいはまた仰^{あおむけ}向^{むけ}に寝転んで、雲の飛ぶのを眺めた。雲は、牛や、巨人や、帽子や、婆さんや、

広々とした景色など、いろんな形に見えた。彼はそれらの雲とひそかに話をした。小さな雲が大きいのにのみ込まれようとするのを見ては、あわれみの念を起こした。またほとんど青いとさえ言えるほど真つ黒なのや、非常に速く走るのを見ては、恐ろしいように思った。それらの雲が人生にも大きな場所を占めてるように思われた。そして祖父や母がそれに少しも注意を払わないのが、不思議でたまらなかった。もし悪を働く意志をもつてたら、恐ろしい者となるに違いなかった。が幸いにもそれらは、人のよい多少おどけたふりをして通りすぎて、少しも止まらなかった。子供はあまり見つめていたので、しまいには眩暈めまいがしてきた。そして空の深みへ落ち込みかかっているかのように、手足をわなわな震わした。眼瞼まぶたがまたたいて、眠気がさしてきた……。静寂……。木の葉が日に照らされて、静かにそよぎ震えている。軽い靄もやが空中を過ぎてゆく。どこともなく蠅はえの群が、オルガンのような音をたてて飛び交わしている。夏に酔った蝗いなごどもが、激しい歓びに羽音をたてている。あたりがしいんとなる……。丸くこんもりとした木立の葉影に、啄木鳥きつつきが怪しい鳴声をたてている。遠く野の中には、農夫の声が牛に呼びかけている。馬の蹄ひづめが白い道路の上に響いている。クリストフの眼は閉じてくる。彼のそばでは、畝溝うねみぞに橋をかけてる枯枝の上に響く一匹の蟻ありがはっている。彼はうつとりと知覚を失う……。幾世紀も過ぎ去った。彼は眼

を覚ます。蟻はまだ小枝を渡りきつていなかった。

祖父は時々あまり長く眠りすぎることがあった。顔がこわばり、長い鼻が伸び、口が横長く開いていた。クリストフは不安げにそれを眺め、その頭が奇怪な形に見えてくるのを気づかった。彼はその眠りを覚まそうとして、いつそう高い声で歌ったり、大きい音をたてて石積の斜面を滑り降りたりした。またある時ふと考え出して、祖父の顔に松葉を少し投げつけておいて、木から落ちたのだと言つてやった。祖父はそれをほんとうにした。クリストフはおかしくてたまらなかつた。しかし彼は不運にもまたやってみようと考えた。そして手をふり上げたちようどその時に、見ると、祖父の眼がじつと自分を眺めていた。まったく困つたことになつた。老人は厳格であつて、自分が当然受くべき尊敬になんらの悪戯いたずらをも加えることを許さなかつた。二人は一週間以上もたがい冷かな態度をとつた。道が悪ければ悪いほど、クリストフにはいつそう面白く思われた。どの石の在処ありかも彼にとつては何かの意味となつた。彼はその在処を皆知つていた。轍わだちの跡の凹凸おうつも、彼にとつては地理的大変化であつて、タウヌス連山などとほとんど匹敵するものだつた。彼は自分の家のまわり二キロメートルばかりの地域にあるあらゆる凹凸の地図を、頭の中に入れていた。それで畝溝うねみぞの間にできてる秩序を少し変えるような時には、自分は一隊の工

夫を引連れた技師などに劣らぬ働きをするのだと思った。一塊の土の乾いた頂を踵でふみつぶして、その下の方に掘られてる谷間を埋める時には、一日を無駄には暮さなかつたのだと考えた。

時には、小馬車に乗った百姓に大道で出会うことがあつた。向うは祖父をよく知つていた。二人は彼の横に乗った。それはこの世の楽園だつた。馬は早く駆けた。クリストフはここにこして喜んでいた。ただ、散歩してる他の人たちとすれちがう時だけは、真面目なゆつたりした様子をして、いつも馬車に乗りつけてる人のようなふりをした。しかし心は自慢の念でいっぱいになつていた。祖父と百姓とは、彼をよそにして話をし合つた。彼は二人の膝の間にかがまり、二人の腿に両方から押しつぶされる思いをし、やつと腰をかけ、またしばしばまったく腰をかけないでいることもあつたが、それでも、嬉しくてたまらなかつた。返辞をされようとされまいとお構いなしに、声高く話をしかけた。馬の耳の動くのを眺めた。馬の耳つて実に不思議な奴だ！ 右へも左へも四方へ行き、前方へつつ立ち、横へ倒れ、後ろをふり向き、しかも放笑さずにはおれないほどへんてこなふうするのであつた。彼は祖父をつねって、その耳に注意させようとした。しかし祖父にはそれが少しも面白くなかつた。うるさいと言いながらクリストフに取り合わなかつた。クリストフは

考え込んだ。大人おとなというものは、どんなものにも驚かず、しつかりしていて、なんでも知ってるものだ。彼は考えた。そして自分もまた大人らしい様子を、好奇心を隠し、平気なふうをしようと努めた。

彼は黙っていた。馬車が走るにつれて彼はうとうとした。馬の鈴が踊っていた。リ、リ、ドン、リン。楽がくの音ねが空中に起こって、銀のような鈴の音のまわりに、蜂はちの群みたい
に飛び回っていた。そして規則的な馬車の響きの上に楽しく揺ゆめいていた。それは尽くる
ことなき歌の泉だった。歌は次から次へとつづいて現われてきた。どれもこれもクリスト
フには素敵なものと思われた。中にも、祖父の注意を促してやりたいほど美しく思われる
のが一つあった。彼は少し声を高めてそれを歌った。しかしだれも気にも止めなかった。
彼はふたたびその歌をくり返した、さらに高い調子で——それから一度、あらんかぎりの
声で——するとついにジャン・ミシエル老人は、腹をたてて彼に言った、「いい加減に
黙らないか！ ラツパのようにわめきたてて、たまらない奴だ！」——その声に彼ははつ
と息をつめた。鼻の頭まで真赤になり、がっかりして口をつぐんだ。そして今の歌が実に
りっぱなものであることを、天空を開き示すほどの歌であることを、少しも了解しない愚
鈍な二人に向かつて、軽侮の念を浴せかけた。よく見ると、二人とも一週間も髯ひげを伸ばし

たままでたいへん見苦しかった。二人とも臭い匂いがしていた。

彼は馬の影法師を眺めながらみずから慰めた。それもまた実に面白い看物みものだった。その真黒な獣は、横に寝たまま道を駆けていった。夕方、帰る時には、牧場の中までずつと広がっていた。積草に出会うと、頭がその上にかけて上って、通りすぎるとまた元のところにもどっていった。その顔は破けた風船玉のようにだらりとしていた。その耳は大きくて、ろうそく蠟燭のようにとがっていた。ほんとうに影なのかしら、それとも生物かしら？ 一人だつたらクリストフも、こんなものに出会いたくなかつたろう。祖父の影法師ならそれを追っかけて、頭の上を歩いたり足にふみつけたりしていたが、こんなものにたいしてはそれもなし得なかつたろう。——太陽が傾くと、木立の影もまた瞑想めいそうの種だった。それは横ざまに道をさえぎっていた。陰気な奇怪な化物のようになって、「これから先へ行くな、」と言っていた。そして軋きしつてる車の心棒と馬の蹄ひづめとがくり返した、「先へ行くな！」

祖父と馬車の主人とは、際限もなくしゃべりつづけて飽かなかつた。彼らはしばしば声を高めた。とくにその地方の事柄や損害の話の時そうだった。子供は夢想するのをやめて、心配そうに彼らを眺めた。たがいに腹をたてるように思われたし、おしまいには殴り合いいになりはすまいかと気遣きづかわれた。しかし実際はそれとまったく反対で、共通の憤懣ふんまんの

うちに最もよく話が合つてゐる時だつた。けれどもたいていは、少しの憤懣も熱情ももつていないことが多かつた。彼らは自分たちに關係もない事柄を話題にして、下層の者らが喜びとするところと同じように、ただわめきたてる快樂のために喉のどいっぱいの大声を出してゐた。しかしクリストフは彼らの会話の意味が分らないので、ただその激しい声ばかりを耳にし、ひきつつてゐる顔立を眺めて、心を痛めながら考えた。「こいつは人が悪そうな様子をしてゐる。二人は仲が悪いに違ひない。こいつはあんなに眼をぎよろつかしてゐる、あんなに大きく口を開いてゐる。疔かんしゃく癩やくまぎれに私の顔まで唾つばを飛ばした。ああ、お祖父じいさんを殺すかもしれない……。」

馬車は止まつた。百姓は言つた、「さあ着きましたよ。」二人の仇敵は握手をした。まづ祖父が車から下りた。百姓は彼に子供を差出した。馬に一鞭むちあてると、馬車は遠ざかつていった。二人はライン河のそばの小さな凹路くぼみちの入口にもどつて来た。太陽は野に没していった。小道は河水とほとんどすれすれに通じていた。生おい茂むつた軟やわらかい草叢くさむらが、かすかな音をたてて足の下になつていった。榛はんのきの立木が半ば水に浸つて、河の上に枝を垂れていた。蠅はえが雲のように群れて飛び回つてゐた。一艘そうの小舟が、ゆったりとした平安な流れのままに、音もなく通つていった。河波はひたひたと柳の枝に口づけをしてゐた。光は

細やかで茫^{ぼう}として、空気はさわやかに、河は銀鼠^{ぎんねず}の色をしていた。彼らは住居に帰ってきた。蟋蟀^{こおろぎ}が歌っていた。そしてもう戸口には、母親のなつかしい顔が微笑^{ほほえ}んでいた……。

おう、楽しい思い出、慈愛深い面影、それは一生の間、美しい諧調をたてる羽音のように響くであろう……。後年に試みる旅行、大きな都会、逆巻く海、夢のような景色、愛する人々の顔なども、子供のおりのかかる散歩や、または、他になすこともなくて小さな唇^{くちびる}を窓ガラスにつけ、そこにできる息の曇り越しに、毎日透し見た庭の片隅、そういうものほど正確には心の中に刻み込まれない……。

もはや、閉め切った家の中の晩である。家……あらゆる恐ろしいもの、影、夜、恐怖、見知らぬもの、などにたいする隠れ場所。いかなる敵もその敷居をまたぐことはできないだろう……。火が燃えている。黄色い鷺^{がちょう}鳥の肉が、串^{くし}にささってゆっくり回っている。脂肪と齒^はごたえのある肉との甘い匂いが、室の中にたちこめている。飲食の喜び、類^{たぐ}いな幸福、敬^{けい}虔^{けん}な感激、喜悅の小躍^{こおど}り！ 快い温かさ、その日の疲れと、親しい声の響きとに、身体はうつとりと筋がゆるんでくる。消化は身体を恍^{こう}惚^{こつ}のうち^{おほ}に溺^{おぼ}らして、そ

こでは物の形も、影も、ランプの笠かさも、真黒な暖炉の中で火の粉を散らして踊ってる炎の舌も、皆よろこ歡ばしい不可思議な様子になる。クリストフは皿さらに頬ほおを寄せて、その幸福をいっそうよく味わおうとする……。

彼は温かい寢床の中にいる。どうして彼はそこまでやって来たのだろうか？ 快い疲労に彼はぐったりしている。室の中の人声の響きと、一日のありさまとが、頭の中に立ち乱れる。父親はヴァイオリンを取上げる。鋭い美しい音が夜のうちに訴えるように響く。けれども最上の幸福は、母親が自分のそばにやって来る時、うとうとしてる自分の手をとってくれる時、自分の方に身をかがめて、求めるとおりに、意味もない言葉を連ねた古い唄うたを小声で歌ってくれる時である。父親はその音楽を馬鹿げたものだと言うけれど、クリストフはいくら聞いても聞きあきない。彼は息をこらす。笑ったり泣いたりしたくなる。心は酔わされる。自分がどこにいるかも分らない。やさしい感情で胸がいっぱいになる。彼は小さな両腕を母親の首にまきつけて、力の限り抱きしめる。彼女は笑いながら言う。

「まあ、私を絞め殺すつもりなのかい。」

彼はいつそう強く抱きしめる。いかほど母親を愛してることだろう！ いかほどすべてを愛してることだろう！ あらゆる人を、あらゆる物を！ すべてがよい、すべてが美し

い……。彼は眠つてゆく。蟋蟀こおろぎが竈かまどの中で鳴いている。祖父の話が、英雄の面影が、楽しい夜の中に浮んでくる。……彼らのように英雄になる！……そうだ、自分は英雄になるだろう……いやもう英雄になっている……。ああ、生きてることはなんといいことだろう！……

いかにおびただしい力と喜びと誇りとが、この小さな存在のうちにあることぞ！ いかにもちあふれた精力ぞ！ 彼の身体と精神とは、息も止まるばかりに回転する輪舞のままに、常に動いている。一匹の小さな火蛇かじやのように、彼は昼も夜も炎の中に踊っている。何物にも疲らされず、あらゆる物から養われる、一の熱誠。物狂おしい夢、ほとぼしる泉、無尽蔵な希望の宝、笑、歌、不断の陶醉。人生はまだ彼を捉とらえない。彼はいつも人生から脱して、無限のうちに泳いでいる。いかに幸福であることぞ！ 幸福であるようにできてるのだ！ 彼のうちには、幸福を信ぜないものは何もなく、その小さな熱中した全力を尽して幸福を目指さないものは、何もない……。

人生はやがて、彼を理性に従わしむることにみずから任ずるであろう。

二

あけぼの
曙の前に小暗き時は

逃げ去りて、遠方おちかたに、

海のおののき見えたりき……

——神曲、煉獄の巻、第一章——

クラフト家はアンヴェルスの出であつた。ところが老ジャン・ミシエルは、かつて若気の過ちと激しい喧嘩けんかとのすえ、その土地を去つてしまった。彼はたびたび喧嘩をしたことがあつた——ひどく喧嘩好きだつたから——そしてこの最後の喧嘩がいやな結果に終わったのである。で彼は、およそ五十年ばかり前に、今の大公領の小都会に移住してきた。なだらかな丘の斜面につき重なつてゐる頂のどがった赤い屋根と木影深い庭園とは、父なるラインの薄緑をした河の眼に映つていた。すぐれた音楽家である彼は、だれも皆音楽家ばかり

であるその地方に、すぐにもてはやされるようになった。そして四十歳を過ぎてから、クララ・ザルトリウスと結婚して、その地に根をすえてしまった。彼女は大公に仕えてる楽長の娘であつて、彼はその楽長の職を譲り受けた。クララは沈着なドイツ婦人で、料理に音楽という二つの熱情をもつていた。そして夫にたいしては、父親にたいするのにも劣らない深い尊敬をいだいていた。ジャン・ミシエルの方でも、妻に深く感心していた。二人は琴瑟相和して十五年間を過し、四人の子供をもうけた。それからクララが死んだ。ジャン・ミシエルはその死をいたく嘆き悲しんだが、五か月たつてからオテーリーエ・シュツツと結婚した。顔が真赤で、頑丈がんじょうで、いつも上機嫌きげんな、二十歳の娘だった。彼女はクララと同じくらいに美点をそなえていたし、ジャン・ミシエルもクララにたいしたのと同じくらいに愛してやった。ところが結婚後八年にして、彼女もまた死んだ。がそれだけの間に、七人の子供を生んでいた。合せて十一人の子供であるが、そのうち生き残つたのはただ一人きりだった。ジャン・ミシエルは非常に子煩悩ぼんのうではあつたが、その幾度もの不幸も、彼の堅固な楽天的氣質を変えはしなかつた。最もひどい打撃は、オテーリーエの死であつた。それは今から三年前のことで、彼はもう、生活を立て直し新しい家庭を作るには困難な年齢に達していた。しかし一時途方にくれた後に、彼はまた精神の平衡を回

復した。いかなる不幸も、このジャン・ミシエル老人から、精神の平衡を失わしめることはできなかつた。

彼は愛情深い男であつた。しかし彼のうちでは、何物よりも健康が最も力を振つていた。悲哀にたいする生理的な嫌悪けんおの情、フラマン人風の粗野な快活にたいする嗜好しこう、子供らしい大笑い、などを彼はそなえていた。どんな悲痛なことがあるうとも、杯の数を一つ減らしたこともなく、御馳走ごちそうを一口ひかえたこともなかつた。かつて音楽を休んだことがなかつた。宮廷の管弦樂は彼の指揮のもとに、ライン地方でかなりの名声を得た。そしてジャン・ミシエルは、その格闘者めいた体格と激しい疝かんしゃく癩いとで、広く人の噂うわさになつていた。彼はいかに努めても、おのれを制することができなかつた。彼は元来小心で、危い破目に陥ることを恐れていたし、また礼儀を好み評判を気にしていたので、非常に努力をした。しかしいつも血氣の情に負かされた。眼の前が真赤になつた。突然狂猛な苛立いらだちにとらえられた。管弦樂の下稽古したげいこの時ばかりではなく、公おおやけの演奏の最中にもそうだつた。大公の面前で、怒りたつて指揮棒を投げすて、激しい急せき込んだ声で樂員のだれかを詰問しながら、氣でも狂つたように足を踏み鳴らした。大公はそれを面白がっていた。しかし矢面に立つた樂員らは、彼にたいして恨みを含んだ。ジャン・ミシエルは自分の狂氣沙汰ざたを恥じ、

すぐその後で、おおげさなお世辞をつかつて忘れてもらおうとつとめたが、徒勞であった。ふたたび何かの機会がありさえすれば、ますますひどく瘡癩かんしやくを破裂させた。その極端な癩癬かんべきは、年とともについついてきて、ついに彼の地位を困難ならしめた。彼はみずからそれに気付いた。そしてある日、例のとおりひどく怒りたつたために、全樂員の罷業ひぎようが起ころうとした時、彼は辭職を申出た。けれども多年の功勞の後なので、辭職聽許はむずかしかりうし、居据りいすわを懇願せられることだろうと、ひそかに期待していた。ところがそうではなかつた。そして申出を取消すには自尊心が許さなかつたので、彼は人々の亡恩をのしりながら、悲痛な思いで職を去つた。

それ以来彼は、毎日何をして暮していいか分らなかつた。もう七十歳を越していたが、まだいたつて元気だつた。それで、出稽古をしたり、議論をしたり、無駄口むだをたたいたり、あらゆることに立交じつて、相変わらず働きつづけ、朝から晩まで町中を駆け回つた。彼はいたつて器用で、さまざまの仕事を搜し出していた。樂器の修繕もやり出した。種々くふうをしたり、試みにやつてみたり、時には改良の方法をも発見した。また作曲もし、そのために勉強もした。かつて壯嚴ミサ曲というのを書いたことがあつた。彼はそれをしばしば口にのぼせ、それは一家の名誉となつていた。書いてるうちに脳溢血のういっけつを起こしかけ

たほど苦心を重ねたものだった。それを彼は天才的な作品だと無理に思い込もうとしていた。しかしかにかに空虚な思想で書かれたものであるかは、みずからよく知っていた。そしてもはやその原稿を読み返すこともしかなかった。なぜなら、自分の独創になったものだと信じてる楽句の中に、他の作曲家らの手になった断片が、むりやりにどうかこうか綴り合つづわせられてるのを、読み直すたびごとに見出したからである。それは彼にとって非常な悲しみの種だった。時とすると、実に素敵なものだと思えるような思想が彼にも浮かんできた。すると身を震わしながらテーブルに駆け寄った。こんどこそはついに インスピレーション 靈 感 をとらえたのであろうか？——しかしペンを手にするや否や、彼は静寂のうちにただ一人ぼつねんとして自分を見出した。そして消え失せた声を呼びもどそうといくら努力しても、結局は、メンデルスゾーンやブラームスなどの耳慣れた メロデー 旋律 が聞えてくるにすぎなかった。

「世には不幸な天才がある。」とジョルジュ・サンドが言った。「彼らには表現の方法が欠けていて、人知れぬ自分の めいそう 瞑想を墳墓のうちに持つてゆく。著名なる唾者や吃者どもりの仲間の一人たる、ジオフロア・サン・ティレルが言ったとおりである。」——ジャン・ミシエルもそういう仲間に属していた。彼はもはや、言語においてと同じように、音楽にお

いてもおのれを発表することができなかつた。そしていつも幻をえがいていた。話すこと、書くこと、大音楽家になること、雄弁家になること、それをどんなにか望んだであろう！そこに彼の秘密な傷口があつた。彼はそれをだれにも語らず、自分自身にも押し隠し、考えもすまいとつとめた。しかしいつも我知らずその方へ考が向いていった。そして心の中に死の種が下されていた。

あわれなる老人！ 何事においても、彼は完全に自分自身であることを得なかつた。彼のうちにはいかにも多くの美しい力強い芽が存していたけれども、一つとして生長するに至らなかつた。芸術の威厳と人生の精神的価値とにたいする感動すべき深い信念、しかしその信念は、往々にして誇大滑稽こっけいな様子で外に現われていた。いかにも多くの貴い自尊心、しかも実生活においては、長上にたいするほとんど奴隸的な賞賛。独立不羈ふきを欲するいかにも高い願望、しかも事実においては、絶対の従順。自由精神を有してるとの自負、しかも、あらゆる迷信。勇壮にたいする熱愛、実地の勇氣、しかも、多くの無氣力。——中途にして立止る性格であつた。

ジャン・ミシエルは自分の大望を息子の上に投げかけていた。そしてメルキオルには初

めのうち、それらをやがて実現するかもしれない望みがあった。彼はすでに幼年時代から、音楽にたいする稀まれな天賦の才を見せていた。きわめてやすやすと音楽を習得したし、また早くからヴァイオリニストとしてりっぱな技ぎ倆りょうを修めえた。そのために彼は長い間、宮廷音楽会の寵ちようじ児じとなり、ほとんど偶像のように尊ばれた。なおピアノや他の楽器をも、いたって上じようず手に演奏することができた。またごく話し上手で、多少鈍重ではあるが様子がよく、ドイツにおいて古典的な美男子とさるる型たいづに属していた。落着いた広い額、道具の大きな正しい顔立、縮れた髻ひげ、まったくライン河畔のジュピテルであった。ジャン・ミシエル老人はこの息子の成功を楽しみにしていた。彼はみずからいかなる楽器をもうまく演奏することができなかつたので、達人の技芸に接するとそれに聞き惚ほれるのだった。確かにメルキオルは、自分の考えを表現するのに困難を覚ゆるような男ではなかつた。不幸なことといえ、何にも考えないことだった。そして彼自身はそんなことを気にもしなかつた。彼はまさしく凡ほんよう庸な役者と同じ魂をもっていた。凡庸な役者は、台詞せりふの意味には気もかけず、ただ台詞回しにばかり注意し、聴衆に及ぼすその効果を、得々として細心に見守っているものである。

最もおかしなことには、ジャン・ミシエルもそうであつたが、彼は舞台上の自分の態度

にたえず気を配っていたし、また社会的因襲を恐れ尊んでいたけれども、それにもかかわらずなお、調子はずれな突飛な軽率な様子をいつももっていた。そのために世間からは、クラフト家の者は皆多少狂人じみたところがあると言われた。そしてそんな噂も、初めのうちには別に彼を傷つけはしなかった。そういう風変りの性質こそかえって、彼が天才であることを証するものであると思われた。芸術家には何か独特な点があるものだということは、識者の間に認められてることだから。しかし人々はやがて、かかる突飛な行動の性質に注意を向けてきた。その原因はたいい酒にあつた。バツカスは音楽の神である、とニ―チエは言った。メルキオルの本能もそれと同意見であつた。しかしこの場合には、彼の神は恩知らずだつた。彼に欠けてる思想を与えてくれるどころか、彼がもつてるわずかな思想をも奪つてしまつた。馬鹿な結婚（世間の者にも馬鹿らしく見えたし、その結果彼にも馬鹿らしく見えた）をしてしまつた後、彼はますます自制がなくなつた。彼は技能をないがしろにした——わずかの間に自己の優越を失つてしまつたほど自惚うぬぼれていたのである。他の名人らがにわかにな現われてきて、彼に次いで世間の好評を博した。彼にとつては苦にがに々がしいことだつた。しかし彼は失敗のあげく、元気を振り起こすどころか、すっかり落胆だんしきつてしまつた。そして酒場の仲間らとともに競争者の悪口を言いながら、せめても

の意趣晴しをしていた。彼は馬鹿げた高慢心のあまり、父の後を継いで楽長になれることと期待していた。ところが他人がそれに任命された。彼は迫害をこうむったような気がして、埋もれた天才らしい様子をした。老クラフトが受けていた尊敬のおかげで、管弦樂團オーケストラのヴァイオリニストの地位は保ちえたが、しだいに、町の家庭教授の口をたいてい失ってしまった。そしてこの打撃は、彼の自尊心にとって最も痛切なものだったし、また彼の財布にとつてはさらに痛切なものだった。数年来、種々な不幸の後を受けて、生活の方が非常に切りつまっていた。豊かな生活を知った彼に、困窮が見舞って来て、日に日に大きくなっていった。メルキオルはその方面のことは知らん顔をして、服装みなりや快樂のための出費を一銭も減じなかった。

彼は悪い男ではなかった。否それよりいっそう始末におえないことかもしれないが、半ば善良な男で、弱者で、なんの策略もたず、意気地もなく、そのうえ、善良な父であり、善良な息子であり、善良な夫であり、善良な人間であると、自信していた。もしそういうものでありうるためには、容易に動かされやすい軽率な親切心と、自己の一部分として家族の者らを愛する動物的情愛とで十分であるとするならば、彼はおそらく実際にそういう善良な者であつたらう。また彼はひどい個人主義者であるともいえなかった。個人主義者

たるには十分の性格をそなえていなかった。彼は実になんでもない男であった。そしてかかるなんでもない男こそ、人生においては恐るべきものである。彼らは空中に放置された重体のように、ただ下に落ちようとする。どうしても落ちざるをえない。そして自分ともにいるものをみな、いつしよに引きずって落ちてゆく。

小さなクリストフが周囲の出来事を了解し始めたのは、家庭の状態が最も困難になる時にであった。

彼はもう一人息子ではなかった。メルキオルは行末どうなるか気にもかけずに、毎年妻に子供を産ました。二人の子供は幼くて死んだ。他の二人は三歳と四歳とになっていた。メルキオルはいっさい子供のことをかまわなかった。でルイザは、やむをえない用で出かける時には、もう六歳になつてゐるクリストフに二人の子供を頼んだ。

クリストフにはそれがつらかった。なぜならその務めのために、野原の楽しい午後散歩をやめなければならなかった。しかしまた彼は、一人前に取扱われるのが得意になって、りっぱにその仕事をやってのけた。子供に種々なことをしてみせて、できるかぎり面白がらせた。母親がするのを聞いたとおりに真似て、子供たちに話しかけようとした。あるい

はまた母親のを見たとおりに真似て、子供を代わる代わる腕に抱いてやった。小さな弟を胸から落とすまいとして、力いっぱい抱きしめ、歯をくいしばりながらも、重いので腰がよく伸びなかった。子供たちはいつも抱かれたがって、決してあきることがなかった。そしてクリストフにもうできなくなると、いきなり泣き出してとめどがなかった。また彼は子供たちにひどく痛い目に会わされて、しばしば途方にくれた。子供たちはよごれていて、母親らしい世話もしてやらなければならなかった。クリストフはどうしていいか分らなかった。子供たちは彼にたいして勝手なまねをした。彼も時とするとその頬^{ほお}辺^{べた}を打ちたくなった。けれどもまた考え直した、「小さいんだ、分らないんだ。」そしてつねられたり打たれたり苦しめられたりするのに、寛大に身を任していた。エルンストはつまらないことにもわめきたてた。じだんだふんだり、怒って転がり回ったりした。神経質な子供だった。でルイザは、彼の氣^きに障^{さわ}ることをしてはいけなないと、クリストフに言いつけておいた。ロドルフの方は猿^{さる}知恵のたちだった。クリストフがエルンストを抱いてる際^{すき}につけこんでは、いつもその後ろに回ってあらんかぎりの悪^{いた}戯^{ずら}をした。玩具^{おもちゃ}を壊^{こわ}し、水をひっくり返し、着物をよごし、また戸棚の中をかき回しては皿を落したりした。

そういうふうだったから、ルイザは家にもどつてくると、クリストフをねぎらいもしな

いで、乱雑なありさまを見ながら、叱りつけはしなないが顔を曇らして、彼に言った。

「困った子だね、お守りが下手で。」

クリストフは面目を失つて、しみじみと心悲しかった。

ルイザはわずかな金の儲け口も見逃さなかつたので、婚礼の御馳走だの洗礼の御馳走だのという特別の場合には、やはりつづけて料理女として雇われていった。メルキオルはそれを少しも知らないようなふりを装っていた。なぜなら自尊心を傷つけられることだつたから。しかし彼女が自分に内密でやつてゐることについては、別に気を悪くしてはいなかつた。小さなクリストフの方はまだ、生活の困難ということが少しも分らなかつた。自分の意志の拘束となるようにはつきり感ぜられるものは、ただ両親の意志のみであつた。しかもそれとて、彼はほとんど思いどおりに放任されていたので、さほど厄介なものではなかつた。彼はなんでも思いどおりのことができるためには、ただ大人になることをしか望んではいなかつた。人が一步ごとにぶつつかるあらゆる障害を、彼は想像だもしてはいなかつた。とくに大人である自分の両親さえ万事が思いどおりにやれるものではないということ、彼はかつて考えもしなかつた。人間のうちには命令する者と命令される者がある

ということをし、そしてまた、家の人たちも自分もともに前者に属するのではないということをし、彼が初めて瞥見した日、彼の心身は激しく猛りたった。それこそ彼の生涯の最初の危機であつた。

その日、母は彼にいちばん綺麗な服を着せてくれた。もらい物の古着ではあつたが、ルイザが丹念に手ぎわよく仕立直したものだつた。彼は言われたとおり、母をその働いてる家へ尋ねていった。ただ一人ではいつてゆくことを考えると氣後れがした。一人の給仕が玄関にぶらぶらしていた。彼は子供を引止めて、何しに来たかといたわるような調子で尋ねた。クリストフは顔を赤くして、「クラフト夫人」——言いつけられたとおりの言葉を使つて——に会いに来たのだと口籠りながら答えた。

「クラフト夫人だつて？ なんの用だい、クラフト夫人に？」と給仕は夫人という言葉に皮肉な力をこめて言いつづけた。「お前のお母さんなのかい。そこを上つておいで。廊下の奥の料理場へ行けば、ルイザに会えるよ。」

彼はますます顔を赤らめながら歩いて行つた。母がなれなれしくルイザと呼ばれたのを聞いてきまりが悪かつた。一種の屈辱を感じた。もうそこを逃げ出して、親しい河岸に駆けてゆき、いつもみずからいろんな話を考えるあの藪の後ろに、はいり込んでしまいたい

ような気もした。

料理場へ行くと、彼は他の多くの召使どもの中にはいり込んだ。皆は騒々しく囃したてて彼を迎えた。奥の方の竈かまどのそばで、母はやさしいまた多少困ったような様子で、彼に微笑ほえみかけていた。彼はそこへ駆け寄って、母の膝ひざにすがりついた。母は白い胸掛をつけて、木の匙さしをもっていた。そしてまず、顔を上げて皆に見せるがいいとか、そこにいる人たちに一々今日はと言つて握手を求めなさいと言つて、ますます彼を困惑させた。彼はそれを承知しなかつた。壁の方を向いて、顔を腕の中に隠してしまつた。しかしだんだん勇気が出て来て、笑いを含んだ輝いた眼でちよつと覗のぞいては、人に見られるたびにまた首を縮めた。そういうふうにして彼はひそかに人々の様子を窺うかがつた。母は彼がこれまで見かけたこともないほど、忙しそうなたたかたな様子をしていた。鍋なべから鍋へと往いつたり来たりして、味をみ、意見を述べ、確信ある調子で料理の法を説明していた。普通なみの料理女はそれかしこを畏こつて聞いていた。母がどんなに人々から尊敬されてるかを見て、また、光り輝いてる金や銅のりつぱな器具で飾られたこの美しい室の中で、母がどんな役目を演じてるかを見て、子供の心は得意の情にみちあふれた。

突然、すべての話し声がやんだ。扉とびらが開いた。一人のりつぱな夫人が、硬かたい衣摺きぬずれの音

をたててはいって来た。彼女は疑り深い眼付であたりを見回した。もう若くはなかったが、まだ袖そでの広い派手な長衣を着ていた。そして物にさわらないように片手で裳裾もすそを引上げていた。それでもやはり寵かまじのそばにやって来て、皿さらの中を覗のぞき込んだり、また味をみまですた。少し手を上げると、袖がまくれ落ちて、肱ひじの上まで素肌すはだだった。クリストフはそれを見て、見苦しいようなまた猥みだらなような気がした。いかに冷やかなぞんざいな調子で彼女はルイザに口をきいたか、そしてルイザはいかにへり下った調子で彼女に答えたか！ クリストフはそれに驚かされた。彼は見つからないように片隅に身を潜めたが、なんの役にもたたなかつた。その小さな児こはだれかと夫人は尋ねた。ルイザはやって来て、彼をとらえて、御覽に入れようとした。顔を隠させまいとして両手を押えた。彼は身をもがいて逃げ出したかったが、こんどはどうしても逆らえないように本能的に感じた。夫人は子供のあわてた顔付を眺めた。そしてすでに母親としての彼女の最初の素振りには、彼にやさしく微笑ほほえみかけることだった。しかし彼女はまたすぐに目上らしい様子をして、行状だの信仰だのについて種々な問いをかけた。彼は少しも返辞をしなかった。彼女はまた彼の着物がよく似合うかどうかを眺めた。ルイザは急いで着物がりっぱになったのをお目にかけた。そして襷ひだを伸すために上着をやたらに引張った。クリストフは非常に窮屈になって声をた

てたいほどだった。なぜ母親がお札を言ってるのか、彼には少しも分らなかつた。

夫人は彼の手を取って、自分の子供たちのところに連れて行きたいと言ひ出した。クリストフは困り切つた眼付で母をちらと眺めた。しかし母はいかにも慇懃いんぎんな様子で御主人に笑顔を見せていたので、もうなんの希望もないことを彼は見てとつた。そして彼は屠所とじよに牽ひかるる羊のように、夫人の案内に従つていつた。

二人は庭にやつて行つた。そこには無愛相な二人の子供がいた。クリストフとほぼ同じ年ごろの男の子と女の子とだったが、何かたがいに氣を悪くしてゐるらしかつた。ところがクリストフが来たのでそれがまぎれた。彼らは近寄つて来て新參者をじろじろ眺めた。クリストフは夫人から置きざりにされて、徑みちにつつ立つたまま、眼を挙げることもしかねた。二人の子供は数歩のところじつと立つて、彼を頭から足先まで見回し、肱ひじでつつき合つて、嘲あざけつていた。がついに思いきつて、なんという名前か、どこから来たか、父親は何をしているか、などと尋ねだした。クリストフは堅くなつて何にも答へなかつた。彼は涙が出るほど氣圧けおされていた。とくに、金髪を編んで下げ、短い裳衣しよういをつけ、脛すねを露あらわしてゐる少女のために、ひどく氣圧されていた。

彼らは遊び始めた。そしてクリストフが少し安心しだした時、男の子は彼の前に立ち

だかつて、彼の上着に手をふれながら言った。

「やあ、これは僕んだ！」

クリストフには訳が分らなかつた。自分の上着が他人のだというその言葉に憤慨して、彼は強く頭を振つて打消した。

「僕はよく知つてる。」と男の子は言った。「僕の古い紺こんの上着だ。そら汚点しみがある。」そして彼は汚点のところを指でつついた。それからなお検査をつづけて、クリストフの足を調べ、靴くつの先がなんで繕つてあるかと尋ねた。クリストフは真赤になつた。女の子は口をとがらして、貧乏人の子だと兄に——クリストフにも聞えた——ささやいた。クリストフはその言葉にまたむつとした。そして、人を侮辱したその考えをやつつけてやろうと思つて、むちやくちやに声をしぼつて言いたてた、自分はメルキオル・クラフトの子で、母は料理番ルイザであると。——そういう身分は他のどんな身分にも劣らざりつぱだと彼には思えたのであるし、またそれが正当だったのである。——しかし他の二人の子供は、もとよりその報告を面白がつていて、彼を前よりも重んずるようなふうは見えなかつた。かえつて主人らしい調子をとつた。将来何をするつもりか、やはり料理人か御者かになるつもりなのかと、そんなことを彼に尋ねた。クリストフはまた黙り込んだ。胸を氷で貫か

れたような気がした。

彼が黙り込んでるのに力を得て、二人の金持ちの子供は、突然この貧乏な子供にたいして、子供にありがちな無理由の残酷な反感を懐いて、彼をいじめてやる面白い仕方はないかと考えた。女の子の方がとくに熱心だった。クリストフが窮屈な服を着るので楽には走れないことを見てとった。そして障害物を飛び越させるといううまいことを思いついた。そこで、小さな腰掛で柵をこしらえて、クリストフにそれを飛び越せと迫った。かわいそうにも彼は、なぜ飛びにくいかをうち明けて言えなかった。彼は全身の力を集めて、身を躍らしたが、地面に転ってしまった。まわりではどつと笑い声が起こった。彼はまたやり直さなければならなかった。眼に涙を浮べて、自棄になってやってみた。するとこんどはうまく飛べた。いじめる方ではそれを快しとしないで、柵が十分高いのだときめた。そして他の道具を積み添えて、危険なほどにしてしまった。クリストフは反抗しようとした。もう飛ばないと言い切った。すると女の子は彼を卑怯者だと呼びたてて、恐がった。もう飛ばないと言った。クリストフはそれに我慢できなかった。そして転ぶことを覚悟で飛んでみると、はたして転がってしまった。足が障害物に引っかかって、何もかも彼といっしょにひっくり返った。彼は手の皮をすりむき、また危く頭を割るところだった。そしてなお

不幸なことには、服の両膝ひざやその他のところが破けた。彼は恥はぢずかしくてたまらなかった。まわりには二人の子供の喜び踊おどつてるのが聞えた。彼は痛切な苦しみを受けた。そしてはつきり感じた、彼らが自分を軽けい蔑べつしてゐることを、自分をきらつてゐることを。なぜなのか、なぜなのか？ 彼にはむしろ死ぬ方が望のぞましかつた！——他人の悪意を初めて見出した子供の苦しみ、それ以上に残忍な苦しみはない。子供は世界じゅうの者から迫害されてるよ
うに考える、そして自分を支持してくれるものは何ももない。もう何もなし、もう何も
ないのだ！……クリストフは起き上がろうとした。男の子は彼をまた押し倒した。女の子
は彼を足で蹴けつた。彼はも一度起き上がろうとした。彼らは二人いっしょに飛びかかつて
来て、彼の顔を地面に押し伏せながら背中の中のしかかつた。その時彼は怒りの念にとらえ
られた。あまりにひどかつた！ ひりひり痛いたんでる両手、裂ひけたりつぱな服——彼にとつ
ての大災難——、恥辱、苦痛、不正にたいする反抗、一度にふりかかつて来た多くの不幸
が融とけ合あつて、物狂ものぐるましい憤怒ふんぬに変わった。彼は両膝と両手で四つ這ばいになり、犬のよう
に身を揺ゆつて、迫害者らはをそこに転ころがした。そして彼らがふたたび襲おそいかかつて来ると、
彼は頭あたまを下くだげて突き進すすみ、女の子の頬ほおを殴うりつけ、男の子を花壇はなだんの中に一撃で打ち倒した。
激げきしい悲鳴ひめいが起おこつた。二人の子供は疝かん高い泣なき声をたてて家の中に逃げ込んだ。扉しりのが

たつく音がし、怒った叫び声が聞えた。夫人は長衣の裳裾もすその許すかぎり早く駆けつけて来た。クリストフは彼女がやって来るのを見たが、逃げようとはしなかった。彼は自分の仕業に慄然りっぜんとしていた。それはたいへんなことだった、罪であった。しかし彼は少しも後悔はしなかった。彼は待受けた。もう取り返しがつかなかった。それだけに始末もいい！

彼は絶望あるのみだった。

夫人は彼に飛びかかった。彼は打たれるのを感じた。激しい声でやたらに何か言われているのを耳に聞いたが、なんのことだか少しも聞き分けられなかった。二人の敵は彼の恥辱を見物しにもどって来て、声の限り怒鳴りたてていた。召使らも来ていた。がやがや騒ぐばかりだった。最後に大打撃としては、ルイザが人に呼ばれてそこに出て来た。そして彼を庇かばうどころか、彼女もまた訳も分らない先から彼を打ち始め、謝あやまらせようとした。彼は怒って言うことをきかなかった。彼女はますます強く彼を突つき、手をとらえて夫人と子供たちの方へ引きずってゆき、その前にひざまずかせようとした。しかし彼は足をふみ鳴らし、わめきたて、母の手に噛かみついた。そしてしまいには、笑ってる召使らの間に逃げ込んでしまった。

彼は胸がいっぱいになり、憤りと打たれた跡とで顔をほてらせて、立ち去っていった。

何にも考えまいと努めた。往来で泣くのがいやなので足を早めた。涙を流して心を和げるために、どんなにか家に早く帰りたいかった。喉のどがつまり頭が逆上のぼせていた。彼はわっと泣き出した。

ついに家へ着いた。黒い古階段を駆け上って、河に臨んだ窓口のいつもの隠れ場所までやっていった。そこで息を切らして身を投げ出した。涙がどつと出て来た。なぜ泣くのか自分でもよくは分らなかつた。けれど泣かずにはおられなかつた。そして初めの涙がほとんど流れつくしても、なお泣いた。自分とともに他人をも罰せんとするかのよう、自身を苦しめるために、憤りの念に駆られてやたらに泣きたかつたのである。それから彼は考えた、父がやがて帰って来るだろう、母は何もかも言いつけるだろう、災はまだなかなか済みはしないと。どこへでもかまわないから逃げ出してしまつて、もう二度と帰つては来まい、と彼は決心した。

階段を降りかけてるとちようど、もどつてくる父に彼はぶつつかつた。

「何をしてるんだ、悪戯いたずら児め。どこへ行くんだ？」とメルキオルは尋ねた。

彼は答えなかつた。

「何か馬鹿なことをしたんだな。何をしたんだ？」

クリストフは強情に黙っていた。

「何をしたんだ？」とメルキオルはくり返した。「返辞をしないか？」

子供は泣き出した。メルキオルは怒鳴り出した。そしてたがいにますますひどくやっていると、ついにルイザが階段を上ってくる急ぎ足の音が聞えた。彼女はまだすっかりあわてきったままでもどつて来た。そしてまず激しく叱りつけながら、ふたたび彼を打ち始めた。メルキオルも事情が分るや否や——否おそらく分らないうちから——牛でも殴るような調子でいっしょになって平手打を加えた。二人とも怒鳴りたてていた。子供はわめきたてていた。しまいには彼ら二人で、同じ憤りからたがいに喧嘩を始めた。子供を殴りつけながらメルキオルは、子供の方が道理だと言い、金をもつてから何をしてもかまわないと思つてゐる奴らの家に働きに出かけるからこそ、こんなことになるんだと言つた。またルイザは子供を打ちながら、あなたこそ実に乱暴だ、子供に手を触れてはいけない、怪我をさしてしまつたではないか、と夫に向かつて怒鳴つた。実際クリストフは少し鼻血を出していた。しかし彼はみずからそれをほとんど気にかけていなかった。そして母はなお叱りつづけていたので、彼女から濡れた布を手荒く鼻につめてもらつても、別にありがたいとは思わなかつた。しまいに彼は薄暗い片隅に押し込まれて、そこに閉じこめられたまま晩飯

も与えられなかった。

二人がたがいにも怒鳴り合つてゐるのを、彼は聞いた。そしてどちらの方が余計憎いかわからなかつた。母の方であるような氣もした。なぜならそんな意地悪い仕打をかつて母から期待したことがなかつたから。その日のあらゆる災害が一度に彼の上に圧倒してきた、彼が受けたすべてのこと、子供らの不正、夫人の不正、両親の不正、それから——よく理解できないがただ生傷のように感ぜられたことであるが——彼があれほど誇りにしていた両親が意地悪い軽蔑すべき他人の前に頭の上からないこと。彼が初めて漠然と意識したその卑怯さは、いかにも賤しむべきことのように彼には思われた。彼のうちにあるすべては揺り動かされた、家の者らにたいする尊敬も、彼らから鼓吹された宗教上の敬畏の念も、人生にたいする信賴の念も、他人を愛しまた他人から愛せられようという純朴な欲求も、盲目的ではあるが絶対的である道徳上の信念も。それは全部の倒壊であつた。身を護る手段もなく、身をのがれる術もなく、獐猛な力のためにおしつぶされた。彼は息がつかまつた。もう死ぬような氣がした。絶望的な反抗のうちに全身を凝り固めた。壁に向かつて拳固や足や頭でぶつかつてゆき、わめきたて、瘡癩に襲われ、家具に突き当つて怪我しながら下に倒れてしまつた。

両親は駆けつけて来て、彼を腕に抱きとった。そしてこんどは、われ先にと彼にやさしくしてくれた。母は彼に着物をぬがせ、寢床に連れてゆき、その枕頭ちんとうにすわって、彼がいくらか落着くまでそばについていた。しかし彼は少しも心を和らげず、何一つ勘弁してやらず、彼女を抱擁すまいとして眠ったふりをした。母は悪者であり卑怯者であるように思われた。そして、生きるために、また彼を生きさせるために、彼女がどんなに苦しんでいるか、彼と反対の側に立つて彼女がどんなに心を痛めたか、それを彼は夢にも知らなかった。

幼い眼の中に蓄えられて驚くべき涙の量を、最後の一滴まで流しつくした後に、彼は少し気分がやわらいだ。彼は疲れていた。しかし神経があまり緊張してよく眠れなかった。半ばうとうとしていると、先刻の種々な面影が浮かび出てきた。とくによく見えてきたのは、あの女の子であって、その輝いてる眼、人を軽んずるようにびんとはね上がったる小さな鼻、肩に垂れてる髪の毛、露あわな脛すね、子供らしいまた勿も体たいぶった言葉つき、などまではつきり浮かんできた。彼はその声がまた聞えるような気がして身を震わした。彼女にたいしてどんなに自分が馬鹿げていたかを思い起こした。そして荒々しい憎悪を感じた。辱はずしめられたことが許せなかった。そしてこんどは向うを辱はずしめてやろうと、彼女

を泣かしてやろうと、たまらない願望に駆られた。彼はその方法を種々考えたが、一つも思いつかなかつた。彼女がいつか自分に注意を向けようとは、どこから見ても考えられなかつた。しかし心を安めるために、彼は万事が願いどおりになるものと仮定した。で彼は、自分がたいへん強いりっぱな者になつたこととし、同時に、彼女が自分に恋をしてるときめた。そして彼は例の荒唐無稽な話を一つみずから語り始めた。彼はついにそういう話を、現実よりももつと実際なことのよう考へてゐるのだつた。

彼女は恋々々の情にたまらなくなつていた。しかし彼は彼女を軽蔑してゐた。彼がその家の前を通ると、彼女は窓掛の後ろに隠れて彼が通るのを眺めた。彼は見られてゐることを知つていたが、それを気にも止めないふりをして、快活に口をきいてゐた。それからまた彼女の悶えを増させるために、彼は故国を去つて遠くへ旅した。彼は大きな手柄をたてた。——このところで彼は、祖父の武勇譚から取つて来たいくつかの条を自分の話に織り込んだ。——彼女はその間に、悶々々のあまりに病氣になつた。彼女の母親が、あの傲慢な夫人が、彼のところへ来て懇願した。「私のかわいそうな娘は死にかかつています。お願いですから、来てください！」彼は行つてやつた。彼女は寝ついていた。顔は蒼ざめて肉が落ちていた。彼女は彼に両腕を差出した。口をきくことはできなかつたが、彼の手

をとつて、涙を流しながらそれに接吻した。すると彼は、いかにもりっぱな親切とやさしさを籠めて彼女を眺めてやった。病気は癒ると言いきかして、愛せられることを承諾してやった。そこまで話が進んでくると、その面白さを長引かし、その態度や言葉を幾度もくり返しながら、みずから楽しんでいるうちに、眠気がさして来た。そして彼は慰安を得て眠りに入った。

しかし彼がふたたび眼を開いた時は、すっかり夜が明け放たれていた。そしてその日の光はもはや、前日の朝のように気楽に輝いてはいなかった。世の中の何かが変化していた。クリストフは不正というものを知っていた。

家ではひどく生活に困窮することが時々あった。それがしだいに頻繁になつてきた。そういう日はたいへん粗末な食事だった。クリストフほどそれによく気づく者はだれもなかった。父には何も分らなかつた。彼は最初に食物皿から自分の分を取ったし、いつも十分を取っていた。彼は騒々しく話したて、自分の言葉にみずから大笑いをした。そして彼が食物を取つてゐる間、彼の様子を見守りながら強いて笑顔を見せてる妻の眼付も、彼の眼には止まらなかつた。食物皿は、彼が次に回す時には、もう半ば空になつていた。ルイザ

は小さな子供たちに食物をよそつてやった、一人に馬鈴薯ばれいしょ二つずつを。クリストフの番になると、その三つしか皿には残っていないことがしばしばで、しかも母はまだ取っていない。彼はそれを前もつて知っていた。自分に回ってくる前に馬鈴薯を数えておいた。そこで彼は勇気を出して、何気ない様子で言った。

「一つでたくさんだよ、お母さん。」

彼女は少し気をもんでいた。

「二つになさい、皆みんなと同じに。」

「いいえ、ほんとに一つでいいよ。」

「お腹なかがすいていないのかい。」

「ええ、あんまりすいてはいない。」

しかし彼女もまた一つきり取らなかつた。そして彼らは丁寧ていねいに皮をむき、ごく小さく切り、できるだけゆつくり食べようとした。母は彼の方を窺うかがっていた。彼が食べてしまうと言った。

「さあ、それをお取りよ!」

「いいよ、お母さん。」

「では加減でも悪いの？」

「悪かない。でもたくさん食べたよ。」

父はよく彼の気むずかしいのを叱しかつて、残りの馬鈴薯を自分で取ってしまった。しかしクリストフはもうその手に乗らなかつた。彼はそれを自分の皿に入れて、弟のエルンストのために取っておいた。エルンストはいつも貪どんよく欲で、食事の初めからその馬鈴薯を横目で窺うかがい、しまいにはねだり出した。

「食べないの？ そんなら僕におくれよ、ねえ、クリストフ。」

ああいかほどクリストフは、父を憎く思ったことか！ 父が自分たちにたいして少しの思いやりもなく、自分たちの分まで食べて知らないでいるのを、いかほど恨めしく思ったことか！ 彼は非常に腹が空いていたので、父を憎んだし、そう口に出して言つてやりたいほどだった。しかし彼は高慢にも、みずから自活しないうちはその権利をもたないと考へていた。父が奪い取つたそのパンも、父が稼かせぎ出したものだった。彼自身はなんの役にもたつていながつた。彼は皆にとつては厄やっかい介者だつた。口をきく権利はなかつた。やがては彼も口をきけるだろう——もしそれまで生きてたら。しかしああ、それ以前にはたとい空腹で死んでも……。

彼は他の子供よりもいつそう強く、そういう残酷な節食に苦しんでいた。彼の強健な胃袋は拷問にかけられたがようだった。時とすると、そのために身体が震え、頭が痛んできた。胸に穴があいて、それがぐるぐる回り、錐きりをもみ込むように大きくなっていった。しかし彼は我慢した。母から見られてるのを感じて、平気なふうを装った。ルイザは、その小さな子が他の者に多く食べさせるために、みずから食を節しすることに、おぼろげながら気がついて心を痛めた。彼女はその考えをしりぞけたが、しかしいつもまたそこに心をもどってきた。彼女はそれを明らかにすることをなしかねた、ほんとうかどうかとクリスフトに尋ねかねた。なぜなら、もしほんとうにそうだったら、どうしていいか分らなかつたから。彼女自身も子供のおりから、食物の欠乏には慣れていた。別に仕方もない場合には、愚痴をこぼしたとてなんにならう。実際のところ彼女は、自分の弱い体質や小食から推して、子供が自分より多く苦しんでるに違いないとは、夢にも思いつかなかつた。彼女は彼になんとも言わなかつた。しかし一、二度、他の子供たちは往來に、メルキオルは用を手伝わしたことがあつた。クリストフは糸の玉を持ち、彼女はその糸を巻いていた。すると突然、彼女は何もかも投げ出して、夢中に彼を引き寄せた。彼はもうたいへん重く

なつていたけれど、彼女は彼を膝ひざにのせて、抱きしめた。彼は彼女の首に強く抱きついた。そして彼らは、絶望に陥つたがようにたがいに抱擁しながら、二人とも涙を流した。

「かわいそうに！……」

「お母さん、ああお母さん！……」

彼らはそれ以上何も言わなかった。しかしたがいに了解し合っていた。

クリストフはかなり長い間、父が酒飲みであることに気付かなかった。メルキオルの放縦は、少なくとも初めのうちはある限度を越えなかった。それは決してひどいものではなかった。むしろ非常な上機嫌きげんの発作となつて現われていた。彼はテーブルをたたきながら、いく時間もつづけて、愚にもつかぬことを述べたてたり、大声で歌つたりした。時とするど、ルイザや子供たちといつしよにどうしても踊るといつてきかなかつた。クリストフは母が悲しい様子をしてるのをよく見てとつた。彼女はわきに引込んで、俯うつむ向いて仕事をしていた。酔つ払いを見まいとしていた。そして顔が赤くなるほど露骨な戯じやうだん談を言いかけられると、それを黙らせようとして穩かに努めた。しかしクリストフにはその理由が分らなかつた。彼は陽気なことを非常に望んでいたので、父がもどつてきて騒さわぎたてるのを

樂しみとしていた。家の中は陰気だった。そしてそんな馬鹿騒ぎは彼にとつて一種の気安めだった。メルキオルのおどけた身振りや馬鹿げた戯れを、彼は心から笑い興じた。いっしよに歌つたり踊つたりした。母が不機嫌ふきげんな声でそれを止めさせるのは、不都合なことだと思つていた。父がすることだから、どうして悪いことがある？ 彼の小さな観察力は常に覺めていて、見たことは何一つ忘れなかつたので、正理にたいする彼の幼い一徹な本能に合致しない多くのものを、父の行ないのうちに認めてはいたけれども、なお彼はやはり父を贊美していた。それは子供のうちにある強い欲求である。確かに永遠の自愛の一つの形であろう。人はおのれの欲望を實現しおのれの高慢心を満足させるにはあまり自分が弱いことを認める時、それらのものを他に移しすえる、子供はその両親の上に、人生に敗れた大人はその子供らの上に。かく希望をかけられた人々は、夢想されたとおりの者となつており、あるいは夢想されたとおりの者となるであろう、その選手と、その復讐ふくしゅう者と、なつておりあるいはなるであろう。そして、おのれのためにするかかる傲慢ごうまんな隱退のうちには、愛と利己心とが驚くばかりの力とやさしみとをもつて相混和している。でクリストフも、父にたいするあらゆる不満をうち忘れて、父を贊美する理由を見出そうと努めていた。そして父の身体つき、その頑がんじょう丈な腕、その声、その笑い、その快活、など

を彼は賛美した。父の妙技が賛められるのを聞く時、あるいはメルキオル自身で人から受けた賛辞を誇張して述べたてる時、彼は得意の情に顔を輝かした。彼は父のおおげさな自慢話をほんとうだと信じた。そして天才として、祖父から聞いた英雄の一人として、父を眺めていた。

ところがある晩、七時ごろ、彼は一人で家に残っていた。弟たちはジャン・ミシエルと散歩に出ていた。ルイザは河でシャツを洗っていた。扉が開いてメルキオルが突然はいつてきた。帽子もかぶらず、胸ははだけていた。一種の跳踊はねおどりをやつてはいつて来て、テーブルの前の椅子いすにどつかと腰を落とした。クリストフはまた例の茶番だと思つて笑い出した。そしてそばに寄つていった。しかし近寄つて眺めてみると、もう笑う気も起こらなかつた。メルキオルは腰掛けたまま、両腕をだらりと垂れ、眼を瞬またたきながら茫然ぼうぜんと前方を見つめていた。顔は真赤であつた。口は開いていた。時々馬鹿げた喉のどごえ声が口から洩もれていた。クリストフはびっくりした。初めは父がふざけてるのだと思つた。しかしじつと身動きもしないでいるのを見ると、急に恐しくなつた。

「お父さん、お父さん！」と彼は叫んだ。

メルキオルはなお牝めんどり鶏どりのように喉を鳴らしていた。クリストフは自棄やけに彼の腕をとら

え、力の限り揺つた。

「お父さん、ねえお父さん、返辞をして！ どうぞ。」

メルキオルの身体は、柔い物体のようにゆらゆらして、危く倒れかかった。頭はクリストフの頭の方へ傾いた。そして支離滅裂な腹だちまぎれの声をやたらにたてながら、クリストフを見つめた。その昏迷こんめいした眼に自分の眼を見合せると、クリストフは物狂おしい恐怖にとらえられた。彼は室の奥に逃げ出し、寝台の前に膝ひざを折って、夜具の中に顔を埋めた。二人は長い間そのままだった。メルキオルは嘲笑あざわらいながら、椅子の上に重々しく身を揺っていた。クリストフはそれを聞くまいとして耳をふさいで、震えていた。心のうちには名状しがたい感情が乱れた。あたかもだれかが死んだかのように、尊敬してゐる大事なだれかが死んだかのように、恐しい混乱、恐怖、苦悶くもん、であつた。

だれも帰つて来なかつた。二人きりであつた。夜になつていた。クリストフの恐怖は一刻ごとに増していった。彼は耳を傾けざるをえなかつたが、もう父の声とも覚えないその声を聞くと、全身の血が凍るかと思われた。一高一低の掛時計の音が、父の狂気じみた饒お舌しゃべりの調子をとっていた。彼はもうたまらなくなつて、逃げ出そうとした。しかし出て行くには、父の前を通らなければならなかつた。あの眼付をまた見るかと思うだけでも、

クリストフは震え上がった。見ただけで死ぬかも知れないような気がした。彼は四つ這いになって、室の扉のところまで忍んで行こうとした。息もつかず、あたりに目もくれず、メルキオルがちよつとでも動くと思つた。酔つ払いの両足がテーブルの下に見えていた。その片足は震えていた。クリストフは扉のところまでたどりついた。無器用な片手でそのハンドルにすがりついた。しかし狼^{ろうばい}狼^{ばい}のあまりまたそれを放した。ハンドルはがたりと締まった。メルキオルは見ようとしてふり向いた。すると彼がのつかつて身を揺つていた椅子^{いす}は平均を失つた。彼は大きな音をたてて下に転がった。クリストフはおびえてしまつて、逃げ出す力もなかった。彼は壁にしがみついて、足下に長々と横たわつてる父を眺めた。そして助けを呼んだ。

メルキオルは転げ落ちたので少し酔がさめた。そしてその悪^{いたずら}戯^ざを働いた椅子を、ののしつたり、侮辱したり、拳^{げんこ}固^こで殴りつけたりした後、いたずらに起き上がろうとつとめた後、ついにテーブルに背中中よりかかつて上半身をすえた。そしてあたりの様子が眼にはいった。彼は泣いてるクリストフを見た。そして彼を呼んだ。クリストフは逃げたかつたが、身動きもできなかった。メルキオルはまた呼んだ。それでも子供がやって来ないので、怒つてののしつた。クリストフは手足を震わせながら近づいてきた。メルキオルはそれを

自分の方へ引寄せて、膝ひざの上にすわらせた。そしてまず子供の耳を引張りながら、呂律ろれつの回らぬ早口で、子供が父にたいしていただくべき尊敬について説教を始めた。それから彼は突然気を変えて、子供を抱き上げながら訳の分らないことをしやべり出して、笑いこけた。がふいに鬱ふさぎ込んでしまった。子供や自分自身の身の上を悲しんだ。子供を喉のどがつまるほど抱きしめ、やたらに接吻し、涙をそそいだ。そしてしまいには、子供を揺ぶりながら、深き淵よりを歌い出した。クリストフはのがれるための身動きもしなかった。彼は恐怖のあまり氷のようになった。父の胸に息づまるほど抱きしめられ、酒臭い息や泥でいすい酔おくびの嘔お気を顔に感じ、気味悪い涙や接吻に濡ぬらされて、嫌けん悪おと恐怖とに悶もたえていた。声をたてたいとも思ったが、どんな叫び声も口から出なかつた。そういう恐ろしい状態のうちに彼はじつとしていた、一世紀ほども長く思われた間——とついに扉が開いて、手に洗せん濯たく物の籠かごを持ったルイザがはいつて来た。彼女は一声叫んで、籠を取り落し、クリストフの方へ駆けつけ、思いも寄らないほど荒々しく、メルキオルの腕から彼をもぎ取った。

「ああ、この惨みじめな酔よめっ払い！」と彼女は叫んだ。

彼女の眼は憤怒ふんぬの念に燃えていた。

クリストフは父が彼女を殺しはすまいかと思った。しかしメルキオルは、妻の恐ろしい

姿が突然現われたのにひどく驚いて、別に返答もしないで泣き出した。彼は床の上に転げ回った。そして家具に頭をぶつつけながら言った、彼女の方が道理だ、自分は酔っ払いだ、家族の者たちの不幸の種とばかりなっている、可憐な子供たちを台無しにしている、いっそ死んでしまいたい。ルイザは軽蔑して彼に背を向けていた。彼女はクリストフを隣りの室に連れて行って、やさしくいたわり、気を落付けさせようとした。子供はなお震えてばかりいた。母から種々尋ねられても返辞をしなかった。それからにわかになすすり泣きを始めた。ルイザは水で顔を洗ってやり、腕に抱きしめ、やさしく言葉をかけ、自分もいっしよに涙を流した。やがて彼らは二人とも心が静まった。彼女はひざまずき、彼をも自分のそばにひざまずかした。彼らは祈った、神様が父の厭な癖を癒してくださるようにと、メルキオルがふたたび昔のようによい人になるようにと。ルイザは子供を寝かした。子供は彼女に、寝床のそばについて手を握ってもらいたがった。ルイザはその晩長い間、クリストフの枕頭にすわっていた。クリストフは熱を出していた。酔漢は床の上にねそべって軀をかいていた。

それからしばらく後のことだった。クリストフは学校で、天井の蠅を眺めたり、隣りの生徒を拳固でつつついて腰掛から転がしたりして、その時間を過していたので、いつも身

体を動かし、いつも笑い声を出し、決して何一つ覚えなかったから、教師から反感をもち、
 れていたのだが、ある日、クリストフ自身腰掛から転げ落ちた時、教師はかなり不穩当な
 当て擦りこすをして、彼はきつとある名高い人物の範に習おうとしているのだろうと言った。生
 徒らは皆一度に放笑ふきだした。ある者はその当て擦りの本体を明らかにしようとして、明らさ
 まなまたひどい註釈をつけ加えた。クリストフは恥ずかしさのあまり真赤になって立上
 り、インキ壺つぼをひつつかみ、笑つてるのが眼についた第一の生徒の頭へ、勢い込めて投げ
 つけた。教師は彼に飛びかかって拳固げんこを食わした。彼は鞭打むちたれ、ひざまずかせられ、重
 い罰課に処せられた。

彼は蒼あおざめて、腹だちまぎれにむつつりしながら、家に帰って来た。もう学校へは行か
 ないと、冷然と言い放った。だれもその言葉を気に止めなかった。翌朝、出かける時間だ
 と母から注意されると、もう行かないと言っておいたんだと、落着き払って彼は答えた。
 ルイザがいくら頼んだり怒鳴ったりおどかしたりしても駄目だめだった。どんなにしても甲斐かい
 がなかった。彼は強情な顔をして、片隅にじつとすわっていた。メルキオルは彼を殴りつ
 けた。彼はわめき声をたてた。しかし懲戒のたびごとにいくら促されても、彼はますます
 猛りたつて「行かない！」と答えるきりだった。理由だけなりとも言うようにと尋ねられ

ても、彼は齒をくいしばって一言もいおうとしなかった。メルキオルは彼をひつつかんで、学校へ連れて行き、教師に引渡した。席につくと彼は、まず手の届くところにある物を皆片っぱしから壊し始めた。インキ壺やペンを壊し、帳面や書物を引裂いた——すべてを、挑戦的な様子で教師を眺めながらおっぴらでやってのけた。彼は真暗な室に押込まれた。——しばらくたって、教師が覗^{のぞ}いてみると、彼はハンケチを首に巻きつけて、その両端を力任せに引っ張っていた。みずから首を絞めようとしていたのである。

彼を家にもどすよりほか仕方がなかった。

クリストフは容易に病に侵されなかった。父や祖父から頑^{がんけん}健な体格を受け継いでいた。一家の者は弱虫でなかった。病気であろうとあるまいと、決して愚痴を言わなかった。どんなことがあっても、クラフト父子二人の習慣は少しも変わらなかった。いかなる天気であらうと、夏冬のかまいなしに、外へ出かけ、時とすると、不注意のせいがあるいは豪放を気取ってかからないが、帽子もかぶらず胸をはだけて、いく時間も雨や日の光にさらされ、あるいはまたいくら歩いても決して疲れる様子がなかった。そういう時あわれなルイザは、何も訴えなかったが、顔の色を失い、脚^{あし}はふくらみ、胸は張り裂けるほど動悸^{どうき}がし

て、もう歩けなくなつた。彼らはその様子を、憐れむような軽蔑の眼付で眺めた。クリストフも母親にたいする彼らの軽侮の念に多少感染してゐた。彼は病気になるということを理解できなかつた。彼は倒れても、物にぶつつかつても、怪我をしても、火傷をしても、泣いたことがなかつた。ただ自分を害する事物にたいして奮激した。父の乱暴な行ない、いつも彼が殴り合いをする街頭の悪童仲間の乱暴な行ない、それが彼に強く沁み込んでいた。彼は殴られることを恐れなかつた。鼻血を出し額に瘤をこしらえてもどつて来ることもしばしばだつた。ある日などは、いつもの激しい喧嘩の中から、ほとんど気絶しかかつてる彼を引き出してやらなければならなかつた。彼は相手に組み敷かれて、舗石の上にひどく頭を打ちつけられていた。それくらいのはあたりまえのことだと彼は思つていた。自分がされるとおりにまた他人にも仕返しをしてやるつもりだつたから。

けれども彼は、数多の事物を恐がつていた。そしてだれにも気づかれなかつたが——なぜならきわめて傲慢だつたから——しかし彼は少年時代のある期間中、それらのたえざる恐怖から最も苦しめられた。とくに二、三年の間は、それが一つの病気のように彼の内部をさいなんだ。

彼は影のうちに潜んでる神秘を恐れた、生命に狙い寄つてゐるやうに思われる邪悪な力を、

怪物らのうごめきを。それらの怪物を幼い頭脳は、恐怖に震えながら自分のうちに描き出し、眼に見るすべてのものと混同するのである。消え失せた獣類、虚無に近い最初の日の幻覚、母胎の中における恐ろしい眠り、物質の奥底にある妖鬼ようきの目覚め、そういうものの最後の名残りに違いない。

彼は屋根裏の室の扉を恐れた。それは階段の真上にあつて、いつもたいてい半開きになつていた。その前を通らなければならぬ時には、胸の動悸どうきを彼は感じた。元氣をつけながら見向きもしないで駆け通つた。扉の後ろには、だれかがまたは何かがいるような気がした。扉が閉まつてる時には、半開きの猫ねこ穴あなから、向うで何か動いてるのがはつきり聞こえた。そこには大きな鼠ねずみがいたので別に驚くにもあたらないことではあつたが、それでも彼は種々なものを想像した、恐ろしい怪物、ばらばらになつた骨、襤褸ぼろのような肉、馬の頭、人をにらめ殺すような眼、えたいの知れない物の形。彼はそんなもののことを考えなくなつたが、それでもやはり考えた。震える手先で、掛金がちゃんとさきさきつてゐるのを確めた。それでもなお、階段を降りゆきながら、十遍以上も振り向かざるをえなかつた。

彼は戸外の夜を恐れた。祖父の家に止まつていたり、あるいは何かの用事で夕方そこに使にやらされたりすることがあつた。老クラフトの住んでる家は、少し町の外になつてい

て、ケルン街道の最後の家だった。その家と町はずれの明るい窓との間は、二、三百歩の距離だったが、クリストフにはその三倍もあるように思われた。道が曲がっていて、しばらく何にも見えないところがあった。夕暮のころ、田野は寂しかった。地面は黒くなり、空は気味悪い青白きになっていた。街道の両側にある藪から出て、土堤によじ登ると、まだ地平線のほとりに黄色い輝きが見えていた。しかしその輝きは少しも物を照らさないうで、夜の闇よりもいつそう人の心をしめつけた。その輝きのために周囲の暗さがいつそう陰気になっていった。それは終焉の光だった。雲は地面とほとんどすれすれに降りていった。藪は大きくなってざわついていった。骸骨のような樹木は変な格好の老人に似ていた。道の標石は灰白い反映を返していた。影が動いていた。溝の中にはじつとすわってる一寸法師がおり、草の中には光があり、空中には恐ろしい羽音がし、虫の鋭い鳴声がどこからともなく聞えていた。自然界の何か異様な物凄いものが今にも現われて来はしないかと、クリストフはたえずびくびくしていた。彼は駆け出した。胸がひどく動悸していた。

祖父の室の中に燈火がついてるのを見ると、彼はほっと安心した。しかしいちばん悪いのは、老クラフトがしばしば不在であることだった。そういう時にはなおいつそう恐ろしかった。野の中に孤立してるその古い家は、真昼間でさえ子供をおびえさせた。年老いた祖

父がそこにいると、彼は恐ろしさを忘れてしまうのだった。しかし時とすると、老人は彼を一人置きざりにして、何も言わずに出かけてしまうことがあった。クリストフはそれに気をつけていかなかった。室の中は安らかだった。すべて見慣れたやさしい物ばかりだった。白木の大きな寝台があった。寝台の枕頭ちんとうには、棚たなの上に大きな聖書があり、暖炉の上に造花があつて、それといっしょに二人の妻と十一人の子供との写真が置いてあつた——老人はその下の方にそれぞれ、出生と死亡との日付を書いておいた。——壁には、枠わくのはまつた聖書の文句や、モーツアルトとベートーヴェンとの粗末な着色石版画が掛かつていた。片隅には小さなピアノがあり、他の隅にはチェロがある。書物がごたごた並べてある書棚、釘に掛かつてるパイプ、そして窓の上には、ゼラニウムの鉢はちが置かれていた。そこにいると、友だちらに取囲まれてるような気がした。隣りの室には、老人の足音が往つたり来たりしていた。鉋かんで削つたり釘を打つたりする音が聞えていた。老人は独り言ひとりごとをいったり、馬鹿野郎と自分をけなしてみたり、あるいは賛美歌の断片や感傷的な歌曲リードや戦いくさの行進曲や酒の唄うたなどをごつちやにないませて、太い声で歌っていた。隠れ場所にいるような気持が感ぜられた。クリストフは窓のそばに大きな脇掛椅子ひしかけいすにすわって、膝の上に書物をひらいていた。挿絵さしえの上に身をかがめて、うつとりと見とれていた。日は傾いていった。

眼がぼんやりしてきた。彼はしまいに挿絵を見るのをやめて、茫然と考え込んでしまった。荷馬車の音が遠く街道の上に響いていた。野には牝牛が鳴いていた。眠りかけてるようなものうい町の鐘が、夕の御告の袴りの時刻を知らしていた。おぼろな願望が、かすかな予感が、夢想到沈んでる子供の心に目覚めてきた。

突然クリストフは、なんとない不安にとらえられて我に返った。眼をあげると、夜。耳を澄ますと、静寂。祖父は出かけたのである。彼は身を震わした。祖父の姿を見ようとして窓から覗き出すと、街道はひっそりしていた。すべてのものが脅かすような様子になりだした。ああ、あいつがやって来でもしたら！ だれが？……クリストフはだれであるか知らなかった。ただ、恐ろしいものが……。方々の戸はよく閉まっていなかった。木の階段に、何かが上がつても来るような音が軋った。子供は飛び上がった。肱掛椅子と二つの椅子とテーブルとを、室のいちばん奥の隅に引きずって行って、それで防柵をこしらえた。肱掛椅子を壁によせかけ、左右に椅子を一つずつ置き、前方にテーブルをすえた。中央に二重梯子を備えつけた。そしてその頂上に身をおちつけ、包囲された場合の弾薬としては、今までもつた書物と他のいく冊かの書物とを手にして、ほっと息をつきながら、幼い想像をめぐらして、敵はいかなる場合にもこの防柵を越えることはできないものと一

人できめた。越えてはいけなかつたのだから。

しかし時とすると、書物から敵が出て来ることさえあった。——祖父がでたらめに買い求めた古本の中には、子供に深い印象を与える挿絵のついているのがあった。それらの挿絵は、子供を惹きつけるとともに恐れさせた。奇怪な幻影の絵があり、聖アントアンヌの誘惑の絵があつて、鳥の骸骨が水差の中に脱糞していたり、無数の卵が腹の裂けた蛙かえるの中で虫のようにうごめいていた、頭が足で立つて歩いていたり、尻しりがラツパを吹いていたり、あるいは世帯道具や獣の死骸などが、大きなラシャにくるまり、老婦人のような敬礼をしながら、しかつめらしく歩を運んでいた。クリストフはひどく厭いやな気がした。けれどそのためにかえつてまた惹きつけられた。彼はそれらの挿絵を長い間眺めた。そして時々、窓掛の襞ひだの中に動いてるものを見るために、ちらりとあたりを見回した。——解剖学の書物の中にある剥皮はくひたい体の図は、なおいつそう忌いまむらしいものだった。その絵がはいつてる場所に近づくと、ページをめくりながら震えた。その奇妙な形をした雑色は、彼にたいして異常な強さをもっていた。子供の頭脳に特有な創造力は、取扱い方の貧弱なのを補つてくれた。その粗雑な絵と現実との間の差異が、彼には少しも分らなかつた。夜になると、昼間見た生きてる物の姿よりもいつそう強く、それらのものが彼の夢に働きかけてきた。

彼は眠りを恐れた。いく年もの間、彼の安息は悪夢に害された。——穴倉の中を歩き回っていた。すると渋面した剥皮はくひたい体が風窓からはいつてくるのが見えた。——一人で室の中にいた。すると廊下に軽い足音が聞えた。彼は扉に飛びかかつてそれを閉めようとした。ちようどハンドルをつかむだけの隙すきがあった。しかしそれはもう外から引張られていた。彼は鍵かぎをかけることができなかつた。力が弱つてきた。助けを呼んだ。扉の向うからはいつて来ようとしているものがなんだか、彼はよく知っていた。——家の人たちの中に交つていた。すると突然、皆の顔色が変わった。彼らは変なことを始めた。——静かに書物を読んでいた。すると眼に見えない者が自分のまわりにいるのを感じた。彼は逃げようとしたが、縛られてるのが分つた。声をたてようとしたが、猿轡さるくつわをはめられていた。気味悪いものが抱きついてきて喉のどがしめつけられた。息がつまりそうになつて歯をがたがたさせながら、眼を覚した。目覚めた後もなお長い間震えつづけた。どうしても悩ましい気分を追い払うことができなかつた。

彼が眠る室は、窓も扉もない小部屋であつた。入口の上の棒に掛つてゐる古い垂幕だけが、両親の室との仕切になつていた。立ちこめた空気が息苦しかった。同じ寢室に寝てる弟たちから足で蹴けられた。彼は頭が燃えるようになり、半ば幻覚のうちにとらえられて、昼間

の種々なつまらない心配事が、はてしもなく大きくなつて浮かび上がってきた。悪夢に近いそういう極度の神経緊張の状態の中では、些細な刺激も苦悩となつた。床板の鳴る音も、彼に恐怖を与えた。父の寢息も、奇怪に高まつて聞こえた。もう人間の息とは思えなかつた。その馬鹿に大きな音が彼を脅かした。そこには獣が寝てるような気がした。彼は夜に圧倒されていた。夜はいつまでも終りそうになかつた。いつまでもそのままつづきそうだった。もう数か月も寝たままのような気がした。彼はけわしい息をつき、寢床の上に半身を起こし、そこにすわつて、シャツの袖で汗ばんだ顔を拭いた。時とすると彼は、弟の口ドルフを突つついて起こそうとした。しかし弟は何かぶつぶつ言いながら、夜具をすつかり自分の上に引きよせて、またぐつすり眠つてしまった。

彼はそういうふうにして、熱っぽい悩みのうちにとらえられていると、ついに蒼白い一条の光が垂幕の裾の床の上に現われた。はるかな黎明の弱々しい明るみは、にわかにならかな気を彼のうちにもたらした。だれもまだその明るみを闇と見分けることができないうころ、彼はすでにそれが室の中に忍び込んでくるのを感じた。するとただちに、あふれた河水がまた河床のうちに引いてゆくように、彼の熱はさめ、彼の血は静まつた。同じ温かさが身体じゆうをめぐり、不眠のため燃えるようになってる彼の眼は閉じていった。

晩になると、彼はまた眠る時がやって来るのを見て震え上がった。悪夢の恐ろしさのあまり、眠りに負けず夜通し起きていようときめた。けれどしまいにはいつも疲労にうち負かされた。そしていつも思いも寄らない時に怪物がまた現われてきた。

恐るべき夜！ 多くの子供にはいかにも楽しく、ある子供にはいかにも恐ろしい！……クリストフは眠るのを恐れた。また眠らないのを恐れた。眠っていても目覚めていても、奇怪な姿に、精神から出てくる妖怪ようかいに、悪鬼に、彼はとりかこまれた。それらのものは、病魔の気味悪い明暗の境におけると同じく、幼時の薄ら明るみの中に浮動しているものである。

しかしそれら想像上の恐れは、やがて大なる恐怖の前には消え失せなければならなかった、あらゆる人に食い込み、人知がいかにも忘れんとつとめ否定せんとなつとめても甲斐かいのない恐怖、すなわち死の前には。

ある日、彼は戸棚とだなの中をかき回しながら、見知らぬ物に手を触れた。子供の上着や縞しまの無縁帽があった。彼はそれらの物を得意になって母のところへもって行った。母は笑顔えがおを見せもしないで、不機嫌ふきげんな顔付をして、元のところへ置いて来るように言いつけた。彼が

その訳を尋ねながらぐずぐずしていると、母はなんとも答えないうで、彼の手から品物もぎ取って、彼の届かない棚の上に押し込んでしまった。彼はたいへん気にかかって、しきりに尋ねだした。母はついに言った、それらのものは彼が生まれて来ない前に死んだ小さな兄のものであると。彼はびつくりした。かつてそんなことを聞いたことがなかったのである。彼はちよつと黙っていたが、それからもつと詳しく知りたがった。母の心は他に向いてるらしかった。けれども、その兄もやはりクリストフという名だったが彼よりもつとおとなしかった、とだけ言ってきた。彼はなお種々のことを尋ねた。母は答えるのを好まなかつた。兄は天にいて皆のために祈っていてくれるとだけ言った。クリストフはそれ以上聞き出すことができなかつた。余計なことを言うのと仕事の邪魔になる、と母は言った。実際彼女は縫物に専心してゐるらしかつた。何か気がかりな様子をして、眼をあげなかつた。しかししばらくすると、彼が片隅かたすみに引込んでむつつりしてゐるのを眺め、笑顔を作りだして、外に遊びにおいでとやさしく言った。

その会話の断片は、深くクリストフの心を動かした。してみると、一人の子供がいたのである、自分の母親の小さな男の子が、自分と同じようで、同じ名前で、ほとんど同じ顔付をして、しかも死んでしまった子が——死、彼はそれがどんなことだかはつきり知ら

なかった。しかし何か恐ろしいことらしかった。——そしてだれも、そのも一人のクリストフのことをかつて話さなかった。もうすっかり忘れてしまっていた。もしこんどは自分が死んだら、やはり同じようになるのではあるまいか？——そういう考えは、晩になって、皆といっしょに食卓につき、皆がつまらないことを談笑してるのを見た時、なお彼に働きかけてきた。彼が死んでしまった後も皆は快活にしてるかもしれない！ おう、自分の小さな子供が死んだ後でも母親は身勝手に笑いうるものであるとは、彼はかつて思ってもみなかった。彼は家じゅうの者が厭いやになった。死なない先から、自分自身を、自分の死を、嘆き悲しみたくなつた。それとともに、種々なことを尋ねたかつた。しかしそれもできかねた。母親がどんな調子で黙ってくれと言つたかを、彼は思い起こした。——ついに彼はたえられなくなつた。そして床についた時、接吻しに来たルイザに尋ねた。

「お母さん、やはり私の寢床に寝ていたの？」

彼女は身を震わした。そして平気を装つた声で尋ねた。

「だれが？」

「あの子供、死んでしまったあの……。」とクリストフは声を低めて言った。

母の両手はにわかに彼を抱きしめた。

「そんなこと言うんじやありません、言うんじやありません。」と彼女は言った。

彼女の声は震えていた。彼女の胸に頭をもたしていたクリストフには、その胸の動悸どうきが聞こえた。

ちよつと沈黙が落ちてきた。それから彼女は言った。

「もう決してそのことを言つてはいけませんよ……。落ちついてお眠んなさい……。いいえこの寢床ではありません。」

彼女は彼を接吻した。彼女の頬ほおが濡れてると彼は思った。濡れてると信じたかった。彼はいくらか心が安らいだ。彼女は悲しんでたのだ！けれども、すぐその後で、彼女がいつものとおりの落付いた声で口をきくのが、隣りの室に聞えた時、彼はまた疑いだした。

今と先刻と、どちらがほんとうだろうか？——彼はその答えを見出さないで、長い間床の中で寝返りをうっていた。彼は母親に心を痛めていてもらいたかった。彼女が悲しんでると考えることはもちろん悲しかった。しかしやはり嬉うれしくもあった。それだけ一人ぼっちの感じが薄らぐのだった。——彼は眠つていった。そして翌日になると、もうそのことを考えなかった。

数週間後のことだったが、往来でいつしよに遊ぶ悪いたずら戯仲間の一人が、いつもの時刻に

やって来なかった。彼は病気だと仲間の一人が言った。それからもう、彼の姿が遊びの中に見えなかった。理由はわかっていた。なんでもないことだった。——ある晩、クリストフは寝ていた。時間はまだ早かった。彼の寝床のある小部屋から、両親の室の燈火が見えていた。だれかが扉をたたいた。隣の女が話に来たのだった。彼はいつものとおり勝手な物語をみずから自分に話しながら、ぼんやり耳を傾けていた。会話の言葉はすっきりは聞きとれなかった。ところがふいに、「あれは死にました」という女の言葉が聞えた。

彼の血はすっかり止まった。だれのことだかわかったのである。彼は息をこらして耳を澄ました。両親は大声をたてた。メルキオルの銅羅声どらが叫んだ。

「クリストフ、聞いたか。かわいそうにフリッツは死んだよ。」

クリストフはじつところらえて、落着いた調子で答えた。

「ええ、お父さん。」

彼は胸がしめつけられた。

メルキオルはなお言った。

「ええ、お父さん、だって。お前の言うことはそれだけなのか。お前はなんとも思わないのか。」

子供の心を知っていたルイザは言った。

「しッ、眠らしておきなさいよ！」

そして人々は声を低めて話した。けれどもクリストフは耳をそばだてて、仔細しさいのことを
偷ぬすみ聞いていた、腸チフス、冷水浴、精神錯乱、両親の悲痛。彼はもう息もつけなかった。
ある塊かたまりが呼吸をふさいで、首まで上つてきた。彼は慄ふるえ上がった。それらの恐ろしいこ
とが頭に刻み込まれた。とくに病気は伝染性のものであるということを耳に止めた、言い
換えれば、自分もまた同じようにして死ぬかもしれないということ。そして恐怖の念に
慄りつぜん然とした。最後に会った時フリッツと握手したことを、そして今日も彼の家の前を通
つたことを、思い出したからである。——けれども彼は、口をきかなければならないよう
な羽目に陥らないために、少しの音もたてなかった。隣りの女が帰っていった後、「クリ
ストフ、眠ってるのか、」と父に尋ねられた時、彼は返辞もしなかった。ルイザに言つて
るメルキオルの声が聞えた。

「あの子は心なしだ。」

ルイザはなんとも答え返さなかった。けれどもすぐその後で、彼女はやって来て、静か
に垂幕をあげ、子供の寢床を眺めた。クリストフはその隙すきに辛からうじて、眼をつぶることが

でき、弟どもが眠つてる時間き知ったその規則的な呼吸を真ま似ねることができた。ルイザは爪つまさき先で立去つた。彼はどんなにか彼女を引留めたかつた。いかに自分が恐こわがつてるかを話し、自分を救つてくれるように頼み、少なくとも自分を安心さしてくれるように頼むことを、どんなにか願つていたらう！ けれども、笑われはしないかを、卑ひき怯よう者と言われはしないかを、恐れていた。それにまた、口先で言われる言葉はすべてなんの役にも立たないということを、もうあまりに知りすぎていた。そしていく時間もの間、一人でじつと悶もたえながら、病気が自分のうちに忍び込んでくるのを感じるような気がし、頭痛や胸苦しさにとらえられてるような心地がして、おびえたまま考えていた、「もう駄だ目めだ、私は病気が、じきに死ぬんだ、じきに死ぬんだ！……」一度寢床の上に起き上がって、低い声で母を呼んでみた。しかし両親は眠っていた。それを呼び起こすだけの元気もなかった。

その時以来、彼の幼年時代は死の観念で毒された。彼は神経のために、胸苦しさを、激しい痛みや、突然の息づまりなど、原因もないさまざまの軽微な症状に襲われた。彼の想像はそれらの苦悩のために狂乱して、そのたびごとに、自分の生命を奪おうとしてる猛獣を眼に見るように思つた。母親の近く数歩のところにおいても、すぐそのそばにすわつていても、幾度か彼は死ぬような苦しみを感じた。しかも彼女は何にも察していなかつた。な

ぜなら、彼はそれほど臆病なくせに、恐怖を自分の胸にしまつとくだけの勇氣をももつていた。それは種々な感情の不思議な混合からであつた、他人に頼るまいとする高慢、恐がることの恥ずかしさ、心配をかけまいとする細やかな情愛など。しかし彼はたえず考へていた。「こんどはほんとうに病氣だ、重い病氣だ。ジフテリアの初めだ……。」彼はジフテリアという言葉聞きかじつていた。「ああ神様、こんどだけは許してください！……」

彼は宗教上の觀念をもつていた。彼は母が語つてきかせることを進んで信じていた。人の死後、魂は主のもとにのぼつてゆくことだの、信心深い魂は樂園にはいることだのを、信じていた。しかしそういう魂の旅に、彼は心惹かるといふよりもむしろ多く脅かされた。母の言葉によれば、いい子供たちはその褒美として、睡眠中に神様からさらわれてお側に呼び寄せられ、しかもなんの苦しみも受けないさうであつたが、彼はそういう子供を少しもうらやましいとは思わなかつた。眠る時になると、神様が自分にたいしてもさういう悪戯をしはすまいかと、うち震えていた。ふいに温かい寢床から引き出され、虚空に引きずつてゆかれ、神様の前に立たされるのは、思つても恐ろしいことに違ひなかつた。神というものを、雷のような声を出す非常に大きな太陽みたいに、彼は頭の中で想像して

いた。どんなにか大きな危害を受けるに違いなかった。眼をやき、耳をやき、魂をも焼きつくすに違いなかった！ それから、神は罰を下すかもしれないなかった。どうだかわかるものではない……。——そのうえ、他の種々な恐ろしいこともそのためになくなりはしなかった。それらの恐ろしいことを彼はよく知ってはいなかったが、しかし人々の話でおおよそは察せられた。身体を箱の中につめられ、穴の底に一人ぼっちにされ、多くの厭いやな墓の中にほうり出され、そこで祈らせられること……。ああ、ああ、なんとという悲しいことか！……

そうかといって、酔っ払いの父の姿を見、乱暴なことをされ、種々な苦しみを受け、他の子供たちからいじめられ、大人たちからは侮辱的な憐れみを受け、そしてだからも理解されず、母親からも理解されずに、生をつづけてゆくということは、決して楽しいことではなかった。万人から辱はずかしめられ、だれからも愛せられず、ただ一人で、一人ぼっちで、しかも非常に頼り少ないのだ！——正にそのとおりだった。しかしそのことがまた、彼に生きる欲望をも与えていた。彼は自分のうちに、憤激して沸きたつ力を感じていた。その力こそ実に不思議なものだ！ その力はまだ何をもなしえなかった。遠くにあつて、さるるぐ猿さるるぐをつわはめられ、手足を縛られ、痲痺まひしてようだった。その力が何を望んでいるのか、

やがて何になろうとするのか、彼には想像もつかなかった。しかしその力は彼自身の中にあつた。彼はそれを疑わなかつた。それは振り動いて、怒号していた。明日は、明日は、その力が復讐ふくしゅうしてくれるであろう！ あらゆる害悪を復讐し、あらゆる不正を復讐し、悪人を罰し、大事をなさんがために、彼は生きたいという激しい願望をいだいていた。

「おう、ただ生きてさえおれば……（彼はちよつと考え込んだ）……せめて十八歳まで！」——またある時は、二十一歳までと引延した。それが極限であつた。それだけで世界を支配するには十分だと彼は信じた。彼はなつかしい英雄らのことを考えていた、ナポレオンのことを、またそれより時代は遠いがいちばん好きであるアレキサンドル大王のことを。もう十二年……十年、生きてさえおれば、かならず彼らのようになるだろう。彼は三十歳で死ぬ者を気の毒だとは思わなかつた。三十歳といえどももう老人だつた。人生を十分に生きてしまったものだつた。もし生きなかつたとすれば、罪は当人にあるのだつた。しかし自分が今死ぬのは、なんとという絶望なことだろう！ まだ子供のままで消えてしまうのは、そして、だれにでも叱しかつてかまわないと思われるような小さな子供のままで、人々の頭の中に永久に残つてゐることは、あまりに不幸すぎることである！ 彼はそれを憤激しながら嘆いた、あたかもすでに自分が死んでしまつたかのように。

そういう死の懊惱おうのうが彼の幼年時代の数年間を苦しめた。——その懊惱はただ、生の嫌せいか悪んおによつてのみ和げられるのだった。

そういう重々しい闇やみの真中において、一刻ごとに濃くなってゆくように思われる息苦しい闇夜の中において、陰暗な空間に埋もれた星のごとくに輝き出したのである、彼の生涯を照らすべき光明が、聖なる音楽が……。

祖父は古いピアノを一つ子供たちに与えておいた。彼をひいきにしてゐる人々の一人が片づけてくれと頼んだ品で、氣長なくふうをこらしてどうか取り繕ったものだった。

その贈物は皆からあまり喜ばれなかった。そんな物を置かないでも室はもうかなり狭くなつてると、ルイザは思った。親父おやじのジャン・ミシエルは大して金を出して手に入れたのではないと、メルキオルは言った、焚たきつけ付つけ同様の代物しろものであると。ただ小さなクリストフだけは、なぜだか知らないがその新しい到来物が嬉うれしかった。ちやうど、祖父が時々いくページかを読んでくれて、いつも二人で夢中になつた、あのアラビア夜話の書物のように、驚くべき物語でいっぱいになつてゐる魔法箱のように思われた。父がその音色をためすために、小雨のような琶アルペジオ音をひき出した時、彼はそばで聞いていた。驟雨しゅううの後に暖かい

一陣の風が、濡れた樹木の枝から振り落す小雨にも似ていた。彼は手をたたいて叫んだ、「もつと！」しかしメルキオルは、くだらない品だと言いながら、軽蔑けいべつの様子でピアノの蓋ふたをしめてしまった。クリストフはそのうえせがまなかった。けれども彼はたえずその楽器のまわりをうろついた。そしてだれもこちらを見ていないと、蓋をもち上げて、鍵キーを押した、あたかも何か大きな虫の青い甲羅こうらを指先で動かすかのように。彼はその中にはいつてる動物をつつき出したかった。時とすると、気が急せくあまり、少し強すぎるくらいに鍵をたたくこともあった。すると母に叱られた。「静かにしておいでつたら。手を触れちゃいけません！」あるいはまた、蓋をしようとして手をはさまれた。彼は痛めた指先をしやぶりながら、悲しそうに顔をしかめていた……。

今や彼のいちばん大きな喜びは、母が一日雇われて出かけてゆく時か、町に用達ようたしに出かける時かであった。彼は階段を降りてゆく足音に耳を傾ける。足音は早くも表に出で、しだいに遠ざかってゆく。彼は一人きりである。ピアノを開き、椅子いすを近寄せ、その上にすわる。肩が鍵盤けんぱんの高さになる。それだけでもう十分だ。なぜ彼は一人になるのを待つのか？あまり大きな音さえたてなければ、だれもひくのをとがめはしないではないか。しかし彼は人前を恥ずかしがっている。思い切つてやれない。それにまた、皆が話をしたり

動き回ったりする。それが楽しみをそこなう。一人きりの時に限るのである！……クリストフは息をこらす、なおいつそうあたりを静かにするためである。そしてまた、大砲でも打とうとしてるかのように多少興奮してるからである。鍵キに指先をあてると、胸がどきどきする。時々、指を半ば埋めた後にまたはずして、他の鍵の上に置く。前のよりこんどのからどんなものが出て来るか、わかりはしない。突然音が高まる。深い音、鋭い音、響く音、唸うなる音。それらの音が一つ一つかすかになつて消えてゆくのを、彼は長く聴きとれる。それらは鐘の音のように揺いでいる、野の中にいる人の耳に、風がもたらしてはまた一つ一つ遠くへ吹き送る鐘の音のように。次に耳を傾けると、虫の羽音のような、入り交つて渦うずを巻いてる他の種々な声が、遠くに聞える。人を呼びかけるようである、遠くへ誘つてゆくようである……遠くへ……ますます遠くへ、神秘的な奥深いところへ。そして声はそこにはいり込んで、深くもぐり込む……もう消えてしまった！……いや、まだささやいている……小さな羽ばたき……。なんとという不思議なことであろう。精霊のようである。精霊がこのとおり素直にしてるとは、この古い箱の中に囚とらわれとなつてるとは、まったく訳がわからないことだ！

しかし最も面白いのは、同時に二本の指を二つの鍵キにのせる時である。どんなことが起

こるか前から決してわかりはしない。時とすると、二人の精霊が敵同士かたきのこともある。彼らは怒りたち、殴り合い、憎み合い、癩しやくにさわったように唸りうなだす。たがいの声が高まる。あるいは憤いつて、あるいはやさしく、叫びたてる。クリストフはそのやり方が大好きである。縛られた怪物が、鎖をかみ牢屋ろうやの壁にぶつつかつてるようである。怪物は今にも壁を破やぶつて外に飛び出そうとしてるかと思われる。物語の書物に書かれてる怪物のようである、ソロモンの印璽いんじの下にアラビアの手箱の中に閉じ込められてる悪鬼のようである。——またあるものは媚こびてくる。騙だまし賺すかそうとつとめる。しかし彼らはただ噛みつくことばかり望んでいる。熱があるのだ。クリストフは彼らがどういう考えだか知らない。彼らは彼を引きつけ、彼の心を乱させる。彼にほとんど顔を赤らめさせる。——またある時は、たがいに愛し合う音調がある。人が口づけする時腕で抱き合うように、その音はたがいにからみ合う。優美でやさしい。よい精霊なのである。皺しわのない微笑ほほえんだ顔をしている。彼らは小さなクリストフを愛し、小さなクリストフも彼らを愛する。彼は彼らの声を聞いて眼に涙をためる。幾度呼び出しても倦あきない。彼らは彼の友だちである、親しい友だち、やさしい友だちである……。

かくて子供は音響の森の中を逍遙しょうようする。自分のまわりに無数の知らない力を感じる。

それらの力は彼を待受け、彼を呼びかけ、そして彼を愛撫せんとし、あるいは彼を吞噬せんとする……。

ある日、そういう最中にメルキオルが突然やつて来た。クリストフは例の太い声をかけられたので恐ろしさに飛び上がった。彼は悪いことをしてたような気がして、両手で急いで耳をふさぎ、恐るべき怒鳴り声をきくまいとした。しかしメルキオルはいつになく叱りつけなかった。上機嫌じょうきげんで笑っていた。

「じゃあお前にも面白いんだな。」と彼はやさしくクリストフの頭をたたきながら尋ねた。「ひき方を教えてもらいたいのか。」

教えてもらいたいかつて……彼は夢中になつて「ええ」とつぶやいた。そして二人ともピアノの前にすわつた。クリストフはこんどは大きな書物をつみ重ねた上に身を落着けた。ごく熱心に最初の稽古けいこを受けた。彼はまず、それらの大きい声を出す精霊は、一綴りつづりかまたはただ一文字かの、支那にでもありそうな妙な名前をもつてるのを知つた。彼はびつくりした。彼はもつと違つた名前を想像していた。仙せん女物語にょに出てくる女王のような、やさしい美しい名前を想像していた。それらにたいする父のなれなれしい口のきき方が気に入らなかつた。そのうえ、メルキオルに呼び出される時には、もう同じ精霊ではなかつ

た。その指下から飛び出すと、冷淡なふうをしていた。それでもクリストフは、彼らの間にある関係を覚え、彼らの階級を覚え、一軍を率いる帝王に似ていたり一群の黒奴の並列に似ていたりする音階を覚えると、嬉しくな^{うれ}った。各兵士は、あるいは各黒奴は、めいめい帝王にもなれるし、同じような隊列の先頭にもなれるし、また鍵盤の先から端まで、全部の隊を展開させることもできるので、彼はそれを見てびっくりした。それらを行進させる筋道をたどってゆくと面白かった。しかしそういうことも、彼が最初見たものよりずっと幼稚になってしまった。不可思議な森はもう見出せなくなった。でも彼は熱心にとめた。なぜならつまらないことではなかったから。そして父の根気にも驚かされた。メルキオルは決して倦^あかなかつた。同じことを十遍もくり返さした。そんなに骨折ってくれる訳とだろう！ 子供は感謝の念で心がいっぱいになって、非常に努めた。

師の頭にどうという考えが浮かんだかを知っていたら、彼はそれほど嬉しがりはしなかつたろう。

その日以来、メルキオルは彼を隣家に連れていった。そこでは一週間に三回、室内音楽

会が催されていた。メルキオルは第一ヴァイオリンをひき、ジャン・ミシエルはチェロを弾いた。他の二人は、銀行員とシルレル街の老時計商とであった。時々、薬剤師もそれに加わつて、フルートをもつて来た。五時に集まつて、九時までかかるのだった。楽曲を一つ終えるごとにビールを飲んだ。近所の人々が室にはいりして、黙つて耳を傾け、壁にもたれて立ち、頭を振り、足で調子を取り、そしてたばこの煙を室いっぱいにした。楽譜のページからページへ、曲から曲へ移つても、演奏者らの根気は疲れることがなかった。彼らは口をきかず、注意をこらし、額に皺しわをよせ、時々愉快のあまりうなり声を出していたが、もとより、楽曲の美を表現することがまったくできないばかりでなく、それを感じることさえできなかったのである。ごく正確に演奏してもいかなかったし、拍子正しく演奏してもいかなかったが、しかし脱線することはなく、印しるされてるニュアンスを忠実にたどつていた。わずかなことで満足する音楽上の無造作さと、世界で最も音楽的だといわれる人種のうちに充満してる完成した凡庸ほんようさとを、彼らはそなえていた。量さえ多ければ質のいかにあまり気にしない趣味の貪欲どんよく性をもそなえていた。そういう健啖けんたんな食欲にとつては、実量が多ければ多いほどどんな音楽でも上等のものとなる。——そしてこの食欲は、ブラームスとベートーヴェンとの間に差別もつけないし、または、同じ楽匠の作品で

さえあれば、空虚な協奏曲コンセルトと感銘深い奏鳴曲ソナタとの間に差別も設けない、なぜなら二つとも同じ捏粉ねりこでできてるから。

クリストフは一同から離れて、ピアノの後ろの自分だけの片隅に隠れていた。そこではだれも彼を邪魔することはできなかつた。四つ這いはにならなければいれなかつたから。そこは薄暗かつた。そして子供には、身を縮めて床板の上に寝ておれるだけの場所があつた。たばこの煙が彼の眼や喉のどにはいつてきた。また埃ほこりもはいつた。羊の毛みたいに大きな総ふさをなした埃もあつた。しかし彼はそんなものに気を留めなかつた。トルコ風に膝頭ですわつて、きたない小さな指先でピアノの掛布の穴を広げながら、しかつめらしく耳を傾けていた。彼は演奏される曲をことごとく好きにはなれなかつた。けれども一つとして退屈になるものはなかつた。彼は決して批評がましい意見をたてようとはしなかつた。なぜなら、自分はまだまだ小さすぎると思つていたし、音楽のことは何にも知らないと思つていたから。ただそれを聞いていると、あるいはうとうとしたり、あるいは眼を覚ましたりした。いずれの場合にも不快な感じは受けなかつた。彼はみずから気づきはしなかつたが、彼を興奮させるのはたいいいつもいい音楽であつた。だれにも見られつこはないと安心していたので、顔じゆうで種々な渋面しかめつらをした。鼻に皺しわを寄せ、齒をくいしばり、舌を

出し、怒った眼付や悲しい眼付をし、喧嘩腰けんかの元気な様子で腕や足を動かし、また、歩き出したくなり、殴り回りたくなり、世界を粉微塵みじんにしてやりたくなくなった。そしてあまり暴れていたの、ついにピアノ越しに覗き込まれて、怒鳴りつけられた。「おい、お前気違のぞいか。ピアノからどけ、手を離せ。耳を引張るぞ！」——それで彼は当惑しやくした癪しゃくにさわった。なぜ自分の樂しみを邪魔するのか。何も悪いことをしたわけではない。いつもいいめつけられてばかりいなければならぬのか！ 父も小言の仲間にはいった。彼は騒がしい真似まねをするといつて叱しかられ、音楽を好かないのだといつて叱しかられた。しまいには彼自身も音楽を好かないのだと思ひ込んでしまった。——もし、そこにいる人たちのうちでほんとうに音楽を感じているのは、その小さな子供一人きりだと言われたら、協奏曲コンセルトをこね回して善良な人々はさぞ驚いたであろう。

もし彼に静かにしていてもらいたいのなら、なぜ人を歩かせるような曲を演奏してきかせたのか。それらのページのうちには、悍馬かんば、劍いっくさ、戦の叫び、勝利の驕きょうまん、慢、などが含まれていたのである。しかも彼らは、彼にも同じように、頭を振ったり足拍子を取ったりするだけでいてもらいたかったのである。それならばただ、のどかな夢幻の曲か、いくらしやべつてもなんの意味をも語らない饒舌じょうぜつなページかを、演奏してやりさえすればよかつ

たのだ。たとえば、ゴルトマルクの曲でもよかった。老時計商は先刻^{よろこ}歡ばしい笑顔をして、その樂曲のことを言った。「実にいい。荒つぽいところがない。どの角^{かど}も丸くなつてゐる……。」その時には子供はごく静かだった。うとうとしていた。何が彈奏されてるか知らなかつた。しまいにはもう何も聞えなくなつた。しかしいい氣持だった。手足がげだるくなつて、うつらうつら夢みていた。

彼の夢は筋の通つた話ではなかつた。頭も尾もなかつた。辛^{から}うじて時々はつきりした象^{すがた}を見るだけだった。菓子をしらえながら、指の間に残つてる捏^{ねりこ}粉を包丁で取つてる母親——前日河に泳いでるところを見かけた^{どぶねずみ}溝鼠——柳の枝でしらえたいと思つていた鞭^{むち}……。それらの記憶がどうして今彼に浮かんできたかは、神のみが知るところである。

——しかししたいは、まったく何も見えなかつた。それでもたくさんのものを感じていた。何かきわめて大切なものが山ほどあるかのようだった、いつも同じようにしてるので、またはつきり知れきつてるので、口にいうことができないうような、あるいは言つても無駄^{むだ}なような、きわめて大切なものが。その中には、悲しいのもあつた、死ぬほど悲しいのもあつた。けれどそれらは、人生において出会うのと違つて、なんら苦しいところをもたなかつた。父から殴られた時のように、あるいは恥ずかしきで胸をしぼりながら何かの屈辱

を考ふる時のように、醜くもなければ卑しくもなかつた。ただ憂鬱な静けさで頭がいっぱいになった。それからまた、喜びをどつとふりまいてくれる輝かしいものもあつた。クリストフは考へた。「そうだ、こんなに……こんなに、私もやがてしよう。」どうしてこんなにだか、なぜそんなことを言うのか、彼は自分で少しも知らなかつた。しかし、そう言わなければならぬ、それは白日のように明白なことだと、彼は感じていた。海の音が聞こえていた。海はすぐ近くにあつて、ただ砂丘の壁で隔てられてるだけだつた。その海がどういふものであるか、海が自分に何を望んでいるかは、少しもわからなかつた。しかし彼ははつきり意識していた、海はやがて障害をのり越えて高まつてくるだろうといふことを、そして、その時こそは……。その時こそは、素敵だろう、自分はまつたく幸福になるだろう。海の音を聞くだけでも、その大きな声の響きに揺られるだけでも、あらゆる屈辱や小さな悲痛などは、ことごとく鎮められてしまつた。それらはやはり悲しいものではあつたが、もはや恥ずかしいものでもなく、心を傷つけるものでもなかつた。すべてが自然らしく思われ、温和な氣にほとんど充ちてゐるらしく思われた。

多くは、凡庸な音楽がそういう陶醉を彼にもたらした。かかる音楽を書いたのは、憐れむべき賤しい人々であつて、彼らの考へていたことはただ、金を得んとすることばかり

であり、あるいは、一般に認められた形式に従って、または——独創家たらんがために——形式を無視して、とにかく音符をいつしよによせ集めながら、おのれの生活の空虚の上に幻をうち立てんとすることばかりであった。しかし音響の中には、愚人に取扱われたものの中にさえ、非常な生命の力が潜んでいて、無邪気な魂の中に感激を起こさせることができるものである。おそらくは、愚人の暗示する幻影も、強烈な思想に吹き起こされて人を無理に巻き込む幻影にくらぶれば、いつそう神秘であり自由であろう。なぜなら、いたずらな運動と空虚な饒舌じょうぜつとは、自己観照の精神を煩わすわづらことがないから……。

かくて子供は、皆に忘れられ、すべてを忘れて、ピアノの隅にじつとしていた。——しまいには、蟻が足に這はい上がってくるのを不意に感じた。すると、自分は真黒な爪つめをした小さな子供であることを思い出し、両手で足をかかえながら鼻を壁にすりつけてることに気づいた。

メルキオルが忍び足ではいつて来て、少し高すぎる鍵盤の前にすわってる子供のところへふいに現われたあの日、メルキオルは子供を観察したのだった。そしてある輝かしい思いが彼の頭に浮かんだのである。「神童だ！……どうして今まで気づかなかったんだろう。

……家にとつてはこの上もない仕合せだ！……こいつは母親のように百姓の子にすぎない
と思ひ込んでいたが、しかしためしてみたって別に損するわけじゃない。運が向いてきた
ぞ！ ドイツじゆうを連れ回り、外国へも連れ回つてやろう。面白いしかも高尚な世渡り
だ。」——メルキオルはいつも、自分のあらゆる行為のうちに、隠れた高尚な点を捜さな
いではおかなかつた。そしてたいていは高尚な点を見出すのだった。

右のような確信を強くいただいていたので、彼は夕食の最後の一口を食い終えると、すぐ
にまた子供をピアノの前に押しつけ、その日教えたところをくり返さして、子供の眼が疲
れに閉じてくるまでやらした。それから、翌日は三度稽古けいこをさした。翌々日も同じだった。
引きつづいて毎日そうした。クリストフはじきに倦あいてきた。次にはたまらないほど厭いや
なつた。ついにはもう辛抱ができなくて、逆らおうとした。やらせられることはまったく
無意味なことだった。親指をちよこちよこやりながら鍵キイの上をできるだけ早く飛び回ること
や、二本の隣りの指の間にぎごちなくこびりついている薬指をしなやかにすることだった。
やつてると神経がいらいらしてくるし、ちつとも面白くなかつた。魔法めいた共鳴音も、
魅惑するような怪物も、一時予感される夢の世界も……すべてなくなつてしまった。音階
と練習とがつづくばかりで、しかもそれは乾燥で、単調で、無味であつて、いつも食物の

ことに、きまりきつた食物のことに及んでゆく食事時の会話より、いつそう無味なものであった。子供はただぼんやりと父親の教えを聞くようになり始めた。きびしく叱りつけられると、厭いやいや々ながらやりつづけた。叱しつせき責はすぐにやってきた。彼は最も底意地悪い機き嫌げんをそれに対抗した。最もいけなかつたことには、ある晩、隣りの室でメルキオルが将来の計画を洩らすのを聞いてしまった。こういうふうに苦しめられるのも、毎日むり強じいに象牙ぞうげの片を動かさせられるのも、賢い動物として見世物にされるためであつたのか！

彼はもう親しい河を訪れに行くだけの隙すきももたなかつた。どういふ訳で自分はこういじめられてばかりいるのか。——彼は自尊心と自由とを傷つけられて憤慨した。もう決して音楽をやるまい、やるにしてもできるだけ下手へたにやってやろう、そして父を落胆らくたんさせてやろう、と彼は決心した。多少ひどすぎる考えかもしれないが、しかし彼は自分の独立を救い出さなければならなかつた。

その次の稽古の時から、彼は計画を実行しようと試みた。彼はわざと、違つた鍵キイをたたいて調子をはずそうとした。メルキオルは叫びたて、次には喚わめきたてた。やたらに殴りつけ始めた。彼は頑がんしやう丈な定規をもっていた。子供が音符を間違えるたびに、定規でその指を打ち、同時に、聾ろうにならせるほど耳もとで怒鳴りちらした。クリストフは苦痛に顔を

しかめた。泣くまいとして唇をかみしめ、打たれそうなので首を肩に引っこめながら、じつと我慢して、むちやくちやに音符をひきつづけた。しかしやり方がまずかった。長くたないうちに気づかれた。メルキオルは彼に劣らず意地張りだった。たとい二人で二日二晩やりつづけても、正確にひかれるまでは一つの音符の間違いも許さない、と彼は言い張った。クリストフの方では、正しくひくまいとあまりに念を入れすぎた。主調ごとに、明らかさまな悪意で小さな手が重々しくわきへそらされるのを見て、メルキオルはその狡猾な策略を勘づき始めた。定規がさらにひどく振りおろされた。クリストフはもう指の感じをも失った。黙つて、嗚咽や涙をすすり込み飲み込みながら、いじらしく泣いていた。そして、こんなふうにつづけてもなんの得にもならないし、捨てばちな道をとった方がいいとさとした。彼はひくのをやめて、これから起ころうとする嵐を思つては前もつて震え上がりがりながらも、大胆に言つてのけた。

「お父さん、僕はもうひきたくない。」

メルキオルは息をつめた。

「なに、なに！……」と彼は叫んだ。

彼はクリストフの腕を折れるほど揺ぶつた。クリストフはますます震え上がつて、殴ら

れるのを避けようと肱ひじを上げながら、言いつづけた。

「もう弾ひきたくない。第一、打たれたくないし、それから……。」

彼は言い終えることができなかった。ひどく頬ほお辺べたを打たれて息が止まった。メルキオルは喚きたてていた。

「うむ！ 打たれたくないんだって、打たれたく……。」

拳固げんこの霰あられが降った。クリストフはすすり泣きの間から絶叫していた。

「それから……音楽はいやだ！……音楽は嫌きらいだ！……。」

彼は席から滑り落ちた。メルキオルは手荒く彼をまたすわり直させ、手首を掴つかんで鍵盤にぶつつけた。彼は叫んでいた。

「ひくんだ！」

クリストフは叫んでいた。

「いや、いや、弾ひくもんか！」

メルキオルは諦あきらめなければならなかった。彼はクリストフを扉のところへ引張ってゆきながら、一か所も間違えずに練習をしてしまわないうちは、一日じゆう、一月じゆう、食物を与えないと言った。後ろから彼を蹴けり出して、ばたりと扉を閉めきった。

クリストフは階段の中途にたたずんだ。きたない薄暗い階段で、階段は虫に食われている。軒窓のガラスの壊れたところから、風が吹き込んでいた。湿気で壁がじめじめしていた。クリストフは脂じみた階段に腰を降ろした。胸の中は、憤怒と激情とで心臓がどきついていた。小声で彼は父をののしった。

「畜生、まったくそうだ！ 畜生！……下司野郎……人非人！ そうだ人非人だ！……おれは大嫌いだ。大嫌いだ。……死んじまうがいいや、死にやがれ！」

彼は胸がいつぱいになっていた。ねちねちした階段を、壊れた窓ガラスの上に風に揺られてる蜘蛛くもの巣を、絶望的に眺めていた。不幸の中に一人ぼっちで落ち込んだような気持だった。彼は手摺てすりの棒の間の空間を眺めた。……もし下に飛び降りたら？……あるいは窓からでも？……そうだ、懲らしめのために自殺してやったら？ 彼奴あいつらはどんなに後悔するだろう！ 自分が階段から落ちる音が耳に響いた！ 上の扉が急いで開かれた。悲痛な声が叫んでいた、「あれが落おっこつた！ 落こつた！」足音が階段をころび降りてきた。父が、母が、泣きながら彼の身体にとびついた。母はすすり上げていた、「あなたのせいです、あなたがこの子を殺したんです！」父は腕を振り動かし、ひざまずき、手摺に頭をぶつつけながら、叫んでいた、「おれが悪いんだ、おれが悪いんだ！」——そういう光景は、

彼の苦しみを和らげた。彼は嘆いてる人たちを憐れもうとしかけた。しかし、彼等にはこれがちょうどいい報いだと後から考えた。そして復讐の光景を味わった……。

自分で作り出した話を終えてしまった時、彼はまた暗い階段の上に乗っていた。彼はも一度下を覗いた^{のぞ}。するともう少しも飛び降りたい気がしなかった。ちよつと身震いさえして、落ちるかもしれないと思いつながらその端から遠のいた。その時彼は、まったく囚われ^{とら}の身なのを感じた。あわれな籠^{かご}の鳥のようで、永久に囚われの身であり、頭を割るか大我^が怪をするかよりほかに逃げ道はなかった。彼は泣きに泣いた。きたない手で眼をこすつていたので、すぐに顔じゆう真黒になつてしまった。そして泣きながらも、あたりのものを見つづけていた。それで気がまぎらされた。彼はちよつと泣声をやめて、動き出した蜘蛛^{くも}を眺めた^{なが}。それからまた泣きだしたが、前ほど本気ではなかった。自分の泣声に耳を澄していた。もうなぜだかよくわからずにただ機械的な泣声をつづけていた。やがて彼は立ち上がった。窓に引きつけられたのである。彼は窓の内側に腰掛け、用心深く身体を奥の方に引込ませて、面白くもあるがまた厭^{いや}な気もする蜘蛛を、じろじろ横目で見守つた。

下には家のすぐそばをライン河が流れていた。階段の窓から覗くと^{のぞ}、河の真上になつていて、揺らめく空中にいるがようだった。クリストフは一段一段と階段を降りてゆく時、

いつも欠かさずその河を眺めたのだった。しかしまだかつて、その日のように河を見たことはなかった。悲痛は感覚を鋭利にする。色褪あせた記憶の跡が涙に洗われた後には、すべてが眼の中によりよく刻み込まれるらしい。子供には河が生物のように見えた——不可解な生物、しかも彼が知ってる何よりもいく倍となく力強い生物！ クリストフはなおよく見るために身を乗り出した。窓ガラスの上に口をあて鼻を押しつけた。彼はどこへ行こうとしているのか？ 彼は何を望んでいるのか？ 彼は自分の道を信じきってるような様子である。……何物も彼を止めることはできない。昼も夜もいかなる時でも、雨が降ろうと日が照ろうと、家の中に喜びがあらうと悲しみがあらうと、彼は流れつづけている。すべて何事も彼にとつてはどうでもいいことらしい。彼はかつて苦しんだことがなく、常に自分の力を楽しんでいるらしい。彼のようだったら、どんなに愉快だろう！ 牧場や、柳の枝や、光ってる小石や、さらさらした砂や、そういうもの間を分けて走り、何物にも気をもまず、何物にも煩わされず、まったくの自由である、そうなったらどんなに愉快だろう！……。

子供は貪むさぼるように眺めまた聴いていた。河に運ばれてるような気がした……。眼をつぶると、青や緑や黄や赤などの色が見えてき、過ぎゆく大きな影や、一面に降り注ぐ日の光

が、見えてくる。……映像はしだいにはつきりとなる。それ、広い平野、葦あしの茂み、新鮮な草や薄荷はっかの匂いがする微風に波打っている畑の作物。至るところに花が咲いている、矢車草、罌粟けしすみれ、堇すみれ。なんと美しいことだろう！　なんと快い空気だろう！　密生した柔かな草の中に寝転んだら、さぞ気持がいいだろう！

……祝いの日に、ライン産の葡萄酒ぶどうしゅを少しばかり、大きな杯に父からついでもらった時のように、クリストフは心嬉うれしくて、少しぼーっとした心地になつてくる……。——河は流れてゆく……。景色が変わる……。こんどは、水の上に覗のぞき出た木立。歯形に切れる木の葉は、小さな手のような形をして、河の中に浸り動き裏返っている。木立の間には、一つの村落が河に映っている。流れに洗われてる白壁の上には、墓地の糸杉や十字架が見えている。……次には、種々な岩、立ち並んだ山、傾斜地の葡萄畑、小さな櫛もみの林、荒廃した城ブルク……。それからまた、平野、作物、小鳥、日の光……。

緑色の満々たる河水は、ただ一つの思想のように一体をなして、波も立てず、ほとんど皺しわも寄せず、脂あぶらぎつて光つてる水形模様を見せながら、流れつづける。クリストフはもうそれを眼には見ない。彼はその音をなおよく聞かためたために、眼をすっかり閉じている。たえず水音は彼の心を満たし、彼に眩暈めまいを与える。その覆おほいかぶさつてくる悠ゆうきゆう久な夢に

彼は吸い寄せられる。河水の騒々しい基調の上に、急調の律動が激しい愉悅をもつて飛び出してくる。そしてそれらの節奏のまにまに、柵に葡萄蔓がよじ上るように、種々の音楽が高まつてくる、銀音の鍵盤から出る白銀の琶音、悩ましいヴァイオリンの響き、円やかな音調のピロードのようなフルートの声……。景色は消えてしまった。河は消え失せてしまった。柔かな薄ら明るい大気が漂っている。クリストフの心は感動のあまり震えてくる。今や眼に見えるのは？ おう麗わしい種々の面影！——栗色の髪を縮らした小娘が彼を呼んでいる、なやかなまた抑揄うような様子で……。碧眼の幼い少年の蒼い顔が、憂わしげに彼を眺めている……。その他いろんな笑顔や眼付——見つめられると顔が真赤になるような、物珍らしげな挑みかかる眼——犬のやさしい眼付のような、愛を含んだ切ない眼——または厳めしい眼、または苦悶の眼……。それから、口元のしまった黒髪の蒼ざめた女の面影、その眼は顔の半ばを覆いつくすかと思われるほど大きく開かれて、苦しくなるほど激しく彼を見つめている……。それから、すべてのうちで最もなつかしいのは、澄みきった灰色の眼と、心もち開いた口と、光ってる細かな歯並とで、彼に微笑みかけてくれる面影……。ああ、その寛大な愛深い麗わしい微笑み！ それはやさしい愛情で人の心を溶かしてしまう。いかに人を喜ばすことか！ いかに人から好かれることか！

もつと！ もつと微笑みかけてくれ！ 消え去つてはいけない！——ああ、悲しくもそれは消え失せてしまう。しかし人の心に得もいえぬやさしみを残してくれる。もうつらいことは少しもない、悲しいことは少しもない、もう何もない……。ただ軽やかな夢ばかり、夏の麗わしい日に見られる聖母の糸（空中にかかつて浮んでる蜘蛛の糸——訳者）のように太陽の光線の中に漂つてる、朗らかな楽の音ばかり……。——では今しがた通り過ぎたのはなんだろう？ 胸騒がしい情熱を子供心にしみ込ませるあれらの姿はなんだろう？

かつて彼はまだそれらの姿を見たことがなかった。けれども彼はそれらを知っていた。見え見えがあつた。それらはどこから来るのか？ 「存在」のいかなる薄暗い深淵しんえんから来るのか？ すでにあつたものからなのか、……あるいはやがてあろうとするものからなのか？……

今や、すべては消え失せ、すべての形は溶け去つてしまふ……。最後にも一度、霧もやのヴェールを通して、あたかも高くを翔かけつてる時のように、しかも自分の上の方に、満々と湛たたえた河が、野を覆いながら、おごそかに流れながら、ゆるやかなほとんど不動の姿で、現われてくる。そしてはるか遠くには、地平のはての鋼鉄の光のようにして、水の平野が、震える水の一線がある——海が。河はその海へ奔はしつてゐる。また海は河へ奔はしつてゐるがよう

である。海は河を吸い寄せせる。河は海を慕う。河は海に隠れようとしている……。音楽は渦巻^{うず}き、舞踊の麗わしい節奏は狂わしいまでに揺り動く。その勝ち誇った旋風の中に、すべてが巻き込まれて一掃される……。自由な魂が宙をかすめて翔^{かけ}る、空気に酔いながら鋭い声を発して空を横ぎる、燕^{つばめ}の飛翔^{ひしょう}のように。……歓喜、歓喜！ もはや何物もない！
 おう、限りなき幸福！……

時間は過ぎていった。夕暮になつていた。階段は闇^{やみ}に包まれていた。雨のつぶが、河の平らな面^{おもて}に丸い輪を描くと、流れが踊りつつそれを運んでいった。時おりは、木の枝が、黒い樹皮が、音もなく通りかかつて、過ぎ去つていった。毒蜘蛛は、餌^{えさ}を食いあきて、いちばん暗い片隅^{すみ}に引込んでしまった。——そして小さなクリストフは、よごれた蒼白い顔を幸福の色に輝かしながら、いつまでも軒窓の縁にもたれていた。彼は眠っていた。

三

太陽は闇を被^かぎて現^あわれぬ……

——神曲、煉獄の巻、第三十章——

我意を折らなければならなかった。痛烈な反抗心を執^{しつ}拗^{よう}に押し通してはみたが、ついに彼の悪意は打^ち擲^{ようちやく}にうち負けてしまった。毎日朝と晩に三時間ずつ、クリストフは責道具の前に引据えられた。注意と不愉快とにたまらなくなり、頬^ほや鼻^おに大粒の涙を流しながら、彼は白や黒の鍵^{キイ}の上に小さな赤い手を動かした。音符を間違えることに打ちおろされる定規の下に、またその打擲^{ちようちやく}よりいっそう忌わしい師の喚^{わめ}き声の下に、彼の手は寒さに凍^こえてることがしばしばだった。音楽は嫌^{きら}いだと彼は考えていた。それでも熱心に努めていた。その熱心さは、メルキオルを恐^{こわ}がつてるといふせいばかりでもなかった。祖父のあの言葉が彼に深い印象を与えていた。祖父は孫が泣くのを見て、重々しい調子で言ってきた。

かした、人間の慰謝と光栄とのために与えられている最高最美の芸術のためなら、多少の苦しみは忍ぶに甲斐かひのあることだと。クリストフは祖父から大人並に話しかけられるのを感じていて、その質しつぽく朴な言葉に内心動かされた。彼の子供らしい堅忍と生まれながらの傲慢ごうまんとは、その言葉をよく受け入れた。

しかしいかなる議論よりも、ある音楽的な情緒についての深い記憶の方がより強く、彼がいたずらに反抗せんと試みていたその厭いやな芸術に、一生涯彼を知らず知らずのうちに結びつけ、彼を奉仕せしめた。

ドイツの風習として、この町にも一つの劇場があつて、歌劇オペラ、喜歌劇オペラコミック、

正劇ドラマ、喜劇コメディ、俗謡劇ヴオードヴィル、その他およそ上演できるものならいかなる種類のものもい

かなる体裁のものも皆演ぜられていた。開演は一週に三度で、晩の六時から九時までだった。ジャン・ミシエル老人は一度も見物を欠かしたことがなく、どの出物だしものにたいしても同じ興味を示していた。一度孫をいっしょに連れてつてやった。数日前から彼にその劇の内容を長々と語つてきかした。クリストフにはそれが少しも了解できなかつた。しかし恐ろしいことが起こるといふことを感じた。そして見たくてたまらなくなりながらも、たいへん恐こわがつていた。暴風雨が起こることを知つていて、雷に打たれはしないかを恐れてい

た。戦いくさがあることを知っていて、自分も殺されはすまいかとびくびくしていた。前日、寝床の中で、彼はほんとうに苦しんだ。開演の日になると、祖父が何かさしつかえで来られなくなればいいがと願いたいくらいだった。しかし時間が迫ってくるのに祖父がやって来ないと、非常に悲しくなりだして、たえず窓から覗のぞいた。ついに老人はやって来、二人はいっしょに出かけた。彼は胸がどきどきした。舌が乾ききって、一言も物をいうことができなかつた。

彼らは家でしばしば話の種になつてゐるその不思議な殿堂に到着した。入口でジャン・ミシエルはいく人もの知人に出会つた。子供は彼にはぐれるのを非常に恐れて、強くその手にすがりついてゐた。そしてこんな場合にどうして皆が平然と話したり笑つたりしていられるか、少しもわからなかつた。

祖父は管弦オーケストラ樂の後ろの第一列の定席についた。彼は手摺てすりによりかかつて、すぐにバスひきとのべつに話をやり出した。そこは彼の得意の壇だんじょう場じやうだった。彼は音樂の權威だから人々から謹聴された。彼はそれに乗じていた。凶に乗つてるともいえるほどだった。クリストフの方は何にも聞くことができなかつた。彼は芝居が待ち遠しくてたまらなかつたし、宮殿のように思われる広間の光景に威圧され、恐ろしいほど込み合つてゐる看客に威

圧されていた。皆の視線が自分に向けられてるように思つて、後ろをふり返るだけの勇氣もなかつた。小さな帽子を膝ひざの間にはさんでびくびくしながら、眼を丸くして不思議な幕を見つめていた。

ついに柝きの音が三つ響いた。祖父は鼻をかんで、ポケットから台リザレット本を取出した。彼はいつもその台本を丹念にたどることを欠かさないで、時としては舞台上で演ぜられてることを忘れるくらいだったのである。管弦樂オーケストラが始まった。最初の和音を聞くや否や、クリストフは心が落着くのを感じた。その音響の世界では、自分の家のような気がした。それから先はもう、舞台にどんな不思議なことが起ころうと、すべて自然であるように思われた。

幕が上がつて、厚紙の樹木やほんとうらしくない人物などが現われた。子供は感心して口をぼんやり開きながら眺めた。しかしびっくりしてはいなかつた。それでも劇は、彼が思いもつかない夢のような近東の事柄だった。劇詩の筋は荒唐無稽ことうむげいで、まったく訳がわからなかつた。クリストフは何にも見分けることができなかつた。彼はすべてを混同し、人物を取り違え、祖父の袖そでを引張つては、何も理解していかないことがわかるような馬鹿ばかげた質問をやたらにした。しかも彼は退屈してないばかりでなく、夢中になつて面白がつて

いた。つまらない台本リヴレットにもとづいて、みずから一つの小説を作り上げていたが、それは演ぜられてることとまったく無関係なものだった。舞台の出来事はたえずその小説と背馳いぢするので、また新たに筋を立て直さなければならなかった。しかし彼はそれに困らされはしなかった。舞台の上で種々な声を出して進展してゆく人物のうちから、自分の気に入る者を選んで、それに同情を寄せながら、その運命がどうなりゆくかと胸を震わして見守っていた。とくに彼の心を悩ましたのは、中年の美しい女であつて、輝いた長い金髪をもち、眼が馬鹿に大きくて、素足で歩いてゐた。演出の驚くべき不自然さも、彼の気を少しもそこなわなかつた。大きくでぶでぶ太つてゐる俳優らの醜怪な様子、二列に並んでゐるところから見ても無格好な合唱団、所作の幼稚さ、喚わめいて充血してゐる顔付、毛の乱れてゐる鬢かつら、テナー歌手の高い靴くつの踵かかと、種々な顔料で顔を彩色してゐるその恋女の粉飾、そういうものをも、子供の鋭い眼は見落としていた。彼はちやうど、情熱のために相手の真相が眼につかない恋人のような状態になつていた。子供に特有な驚くべき幻想の力は、不快な感覚を途中で引止めて、それを適宜に変形さしていった。

音楽がそういう奇跡を行なつていた。音楽はすべてのものを薄靄うすもやの大きに包み込んで、すべてを美しく気高く快くなした。人の心に激しい愛の欲求を伝えた。と同時に、そうい

う心の空虚を満さしてやるために、愛の幻をさしつけてくれた。小さなクリストフは激しい情緒に駆られていた。音楽の種々な言葉や身振や文句は、彼の心を落着かせなかった。彼はもう眼をあげる元気もなかった。よいのか悪いのかもわからなかった。赤くなったり蒼あおくなったりした。そして額には玉の汗が出てきた。まわりの人たちから自分の悩みが気づかれはすまいかとびくびくしていた。歌劇オペラの四幕目になって、テナー歌手と主役女優プリマドンナにその最も鋭い声を発揮させる機会を与えたために、免れがたい破局が恋人らの上に落ちかかってきた時、彼は息がつまるような気がした。風邪かぜをひいた時のように喉のどが痛くなった。両手で首をかかえて、唾つばのみ込むこともできなくなった。涙があふれてきた。幸いなことには、祖父も大して劣らないくらいに感動していた。彼は子供のような無邪気さで芝居に見とれていた。劇的場面になると、心の動揺を隠すために何気ない様子で咳せきをした。しかしクリストフにはよくわかった。彼はそれが嬉うれしかった。おそろしく暑かった。眠気がさしてきた。たいへんすわり心地が悪かった。しかし彼はこんなことばかり考えていた。「もつと長くつづくかしら。おしまいにならなければいいが！」

そして突然、すべてが片づいた。なぜだか彼にはわからなかった。幕が降りた。皆立ち上がった。感興は中断された。

二人の赤ん坊たる老人と子供とは、いっしょに夜のうちを帰途についた。なんとという麗わしい夜だろう！ なんとという静かな月の光だろう！ 二人とも頭の中にあることを味わいながら、黙っていた。ついに老人は言った。

「どうだ、面白かったかい。」

クリストフは返辞をすることができなかった。彼はまだ激しい情緒に打たれていたし、その魅惑を破ることを恐れて口をききたくなかった。ようやく元氣を出して、大きい溜^{ためい}息^きをつきながら低くつぶやいた。

「ええ、ええ！」

老人は微笑^{ほほえ}んだ。程へて彼はまた言った。

「音楽家の職業がどんなにりっぱなものであるかわかったかい。あんなりっぱな光景を創^{つく}り出すのは、この上もなく名譽なことではないか。それはこの世で神様になることだ。」

子供はびつくりした。まあ、あれを創り出したのは人間だったのか！ 彼は夢にもそうだと知らなかった。彼にはほとんど、ああいうものは独^{ひと}りでにできあがったかのように思われ、自然の手になったもののように思われるのだった。……それが、いつか自分がなりたいと思ってるような、一個の人間、音楽家の手で！ おう一日でも、ただ一日でもい

いから、そうなりたいもんだ！ そしたら……その後はどうなったってかまわない、死ぬなら死んでもいい！ 彼は尋ねた。

「お祖父さん、あれをこしらえたのはなんとという人なの？」

祖父はフランスア・マリー・ハスレルのことを話してきかした。ドイツの若い芸術家で、ベルリンに住んでいて、昔祖父と知り合いだった。クリストフは耳を澄してきいていた。突然彼は言った。

「そしてお祖父さんは？」

老人は身を震わした。

「なんだい？」と彼は尋ねた。

「お祖父さんもまた、あんなものをこしらえたことがあるの？」

「あるともさ。」と老人は気むずかしい声で言った。

そして彼は口をつぐんだ。五、六歩してから深い溜息ためいきをもらした。それこそ生涯の悲しみの一つだった。彼は常に芝居のために書きたいと望んでいたが、いつも霊感インスピレーションに裏切られたのだった。紙挟みかみばさみにはたえず、自己流的一幕物か二幕物がいっていた。しかしその価値についてはあまり自信がなくて、かつて判断に供するの勇気がなかった。

彼らはそのままもう一言も口をきかないで、家に帰りついた。二人とも眠れなかった。老人は悲しんでいた。みずから慰めるために聖書を取上げた。——クリストフは寢床の中で、その晩の出来事をくり返してみた。些細な^{ささい}ことまで思い出した。素足の娘がまた眼の前に現われた。うとうとしかけると、音楽の一節が耳に響いて、管弦楽がそこに奏されるかと思うほどはつきり聞えてきた。彼はぞつと身を震わした。頭が酔わされて、枕の上^{まくら}に起き上がった。そして考えた。

「僕もいつかああいうものを書いてやろう。ああ、いつになつたらそれができるかしら。」
その時以来、彼はもはや一つの願いしかもたなかつた。また芝居に行くことだつた。そして勉強の褒美^{ほうび}に芝居へ行かしてやると言われたので、いつそう熱心に勉強を始めた。彼はもう芝居のことしか考えていなかった。一週間の半分はこの前の芝居のことを考え、他の半分は次の芝居のことを考えた。病氣になつて芝居へ行けなくなりはずまいかとびくびくしていた。心配のあまり三、四の病氣の徴候を感じることもしばしばだつた。その日になると、食事もろくろくできず、心配ごとでもあるかのよういらして、何十遍となぐ時計を見に行き、いつまでも日が暮れそうにないような気がし、ついには、もう我慢がしきれなくなり、席がなくなるかもしれないと氣遣^{きづか}つて、開場の一時間も前から出かけて

いった。そしてがらんとしてる広間へ一番にはいつて行ったので、気が揉めだした。観客が十分はいらないので、役者たちは芝居をよして席料を返すことにしたことも、二、三度あつたと、彼は祖父から聞いていた。彼は客がやつて来るのを待受けて、その数を数え、一人で考えていた。「二十三、二十四、二十五……ああ、まだ十分でない……いつまでも十分そろわないのではないかしら？」そして棧敷さしきや奏楽席にある著名な人がいつて来るのを見ると、心がいくらか軽くなつた。彼は考えた。「あんな人なら追い返しはすまい。きつとあの人のために芝居をやるだろう。」——しかしそれが確かかどうかはわからなかつた。ようやくほつと安心するのは、楽手たちが席についてからであつた。それでもまだ彼は、幕が上がつて、ある晩のように、出物だしものを変えると述べられはすまいかと、最後の瞬間まで心配していた。小さな眼をきよろつかして、バスひきの譜面台を覗きのぞき込んで、楽譜の表題が待ち受けてる曲のそれであるかどうか見ようとしたり。よく見た後でも、一、二分たつとまた、見違いをしたのではないか確かめるために覗いた……。楽長がまだ席についていなかつた。きつと病気かもしれなかつた……。幕の向うで人々が動き回つていた。話声や忙しい足音が聞えていた。何か起こつたのではないかしら、思わぬ不幸がわいてきたのではないかしら……。また静かになつた。楽長が自分の位置についた。すっかり準備

が整つたらしかつた……。でもまだ始まらない！ いったいどうしたんだろう。——彼は待遠しくてじりじりしていた。——ついに合図の柝きの音が響いた。彼は胸がどきどきした。管弦樂は序曲を奏しだした。そしてクリストフは数時間の間、深い幸福のうちに浸つた。その幸福を煩わすものはただ、もうおしまいになりはすまいかという考えばかりだった。

それからしばらくして、音楽上の一事件がクリストフの考えを刺激した。彼を驚嘆せしめた最初の歌劇オペラの作者たるフランソア・マリー・ハスレルが、やって来ることになった。そして自作の音楽会を指揮することになった。町じゅうの者が興奮した。この若い樂匠は、ドイツで激しい議論の種となつていた。そして半月ほどの間は、町じゅう彼の噂うわさでもちぎつた。いよいよ彼が到着するとまた特別だった。メルキオルの友人やジャン・ミシエル老人の友人らは、たえず消息をもたらしてきた。この音楽家の習慣や風変わりの点について、彼らは種々な馬鹿げた噂を伝えていった。子供は熱心な注意を傾けてそれらの話を一々聞いていた。えらい人がやって来ている、この町にいる、自分と同じ空気を呼吸している。同じ舗石を踏んでいる、とそういう考えが、彼を無言の感激のうちに投げ込んでしまった。彼はもはや、その人に会いたいという希望ばかりに生きていた。

ハスレルは大公爵から歓待を申出られて、その宮邸に足を止めていた。彼は稽古の指図をするために劇場へ行くほか、ほとんど外出しなかった。クリストフはその劇場へはいることを許されなかった。またハスレルはごく無精だったので、いつも大公爵の馬車で往来していた。でクリストフには、彼をよくみる機会がなかなかなかった。ただ一度通り道で、馬車の奥にその毛皮の外がいとう套を見かけることができたばかりだった。しかしそれだけのことも、街路を待ち受けていて野次馬の中の第一列を占め、そこから押し出されないようにと、左右に激しく拳固げんこを振り回しながら、数時間費したのだった。また彼は、楽匠の室だと教えられた宮邸の窓を窺うかがいながら半日を過ごして、ようやく自分を慰めていた。たいはいは雨戸ばかりしか見えなかった。ハスレルは朝寝坊で、窓はたいい午前中閉められたままだった。そのために、ハスレルは日の光にたえられないで常に暗闇の中で生活してゐるのだと、物知り顔の人々は言っていた。

ついにクリストフは、その偉人に近づくことができた。それは公演の日だった。町じゅうの人が集まっていた。大公爵と廷臣らは、大きな貴賓席を占めていた。その棧敷さしきの上には、豊ほうぎよう類の天使が二人、足を踊らして、王冠を宙にささげていた。劇場のありさまはあたかも祭典のようだった。舞台は檜かの枝や花咲いた月桂樹げっけいじゆで飾られていた。多少手腕

のある音楽家は皆、管弦楽団に加わるのを名誉としてた。メルキオルは自分の位置につき、ジャン・ミシエルは合唱団コーラスを指揮していた。

ハスレルが現われると、四方から喝かつさい采が起こつた。婦人たちは彼の姿をよく見るために立上がった。クリストフはじつと見つめた。ハスレルは若いすつきりした顔をしていたが、それもすでに多少ふくれて疲れていた。顛こめかみ顛のあたりは毛が薄くなっていた。縮れた金髪の間から、頭の頂上に早老の禿はげが見えていた。青い眼は眼まなこ差がぼんやりしていた。小さな赤い口髯くちひげの下に、皮肉そうな口が、眼に止まらないくらいの種類な動きにひきつって、じつとすることは滅多になかった。背は高かった。そして、窮屈な気持のせいではないが、疲労のせいがあるいは退屈のせいかで、姿勢がすっかりしてはいなかった。ふらふらした大きな身体を、あるいはしとやかなあるいは荒っぽい身振りとともに、ちょうどその音楽のように波動させながら、自由気ままな軽快さで指揮していた。非常な神経質であることが見てもわかった。そしてその音楽は、彼自身の反映であった。躍りたった急激な彼の生命が、通例は無味平靜な管弦楽の中にまではいり込んでいた。クリストフは息をはずませた。人の注目を受けはすまいかと恐れながらも、席にじつとすることができなかつた。身体を動かしたり、立上がつたりした。音楽からいかにも激しいまた意外な振

動を受けて、彼は頭や腕や足を動かすのを押えることができなかつた。近くの人々は非常に迷惑して、できるだけ彼の乱暴な態度を避けようとした。それにまた全聴衆は、作品そのものよりもむしろその成功の方により多く魅せられて、感激しきつていた。終りに、拍手喝采かつさいの嵐あらしが起こつて、それとともにトロンペットは、ドイツの習慣として、勝利者に敬意を表するためその揚々たる響きをたてた。クリストフはそれらの名譽が自分に向けられたかのように、得意の念に躍り上おどがつた。ハスレルの顔が子供らしい満足の色に輝いているのを、彼は見て楽しんだ。女は花を投げ、男は帽子を振つた。聴衆は群り立つて舞台の方へ押し寄せた。皆樂匠と握手をしたがつていた。感激した一人の婦人が彼の手を唇にもつてゆくのを、また他の婦人が樂譜台の隅すみに置かれてる彼のハンケチを盗んでるのを、クリストフは眼に止めた。クリストフ自身もまた、樂壇に上つてゆきたかつた。しかしそれがなぜであるかはまったくわからなかつた。というのは、もしその時ハスレルのそばにいたら、彼は感動のあまりすぐに逃げ出したであろうから。でも彼は自分とハスレルとを隔てる人々の着物や足の間に、自分の頭を梃てこのようにつき込んでいた。——彼はあまり小さすぎた。舞台まで行くことができなかつた。

幸いにも、音樂会がすむと、ハスレルのために催される夜セレナード曲へ連れてゆくために、

祖父が彼を探しに来てくれた。夜になっていた。炬火たいまつがつけられていた。管弦楽団の人々はみなそこに集まっていた。話は先刻聴いた靈妙な作品のことばかりだった。宮邸の前に着くと、人々は楽匠の窓下で静かに準備をした。ハスレルも他の人々も皆、これからやろうとすることをよく承知していたくせに、妙に取り澄ました様子を装っていた。夜の麗わしい沈黙のうちに、ハスレルのある名高い曲が奏し出された。ハスレルは大公爵とともに窓に現われた。人々は彼らの名誉のために歓声を揚げた。彼らは二人とも敬礼を返した。大公爵から遣つかわされた一人の従僕がやって来て、楽員たちを宮邸の中へ案内した。彼らはいくつかの広間を通っていった。広間には壁画が描かれていて、兜かぶとをかぶった裸体の男が現わしてあった。皆赤い色をして、挑戦的な身振りをしていた。空は海綿に似た大きな雲で覆われていた。また、鉄板の腰衣をまとった男女の大理石像もあった。人々は足音も聞えないほど柔かな絨じゅうたん緞じゆたんの上を歩いていった。そしてある一つの広間にはいると、そこは真昼間のように明るくて、りっぱな飲食物ののっている食卓が並んでいた。

大公爵はそこにいた。しかしクリストフには見えなかった。ハスレルしか彼の眼にははいらなかった。ハスレルは楽員たちの方へ進んで、彼らに礼を述べた。彼は適当な言葉を考え、ある文句につまり、滑稽な機知でそれを切りぬけて、皆の者を笑わした。人々は

食事を始めた。ハスレルは四、五人の音楽家をわきに呼んだ。彼クリストフの祖父を見て、少しお世辞を言った。ジャン・ミシエルは彼の作品を実演してくれた最初の人々の一人だったことを、彼は覚えていたのである。そして、祖父の弟子であつた一人の友人から、技倆のほどはしばしば聞いていたと、彼は言った。祖父は感謝の言葉を夢中に述べたてていた。あまりおおげさな賛辞で応答しているので、クリストフはいくらハスレルを崇拜しているとはいえ、そばで聞いていると恥ずかしくなるくらいだった。しかしハスレルは、そういう賛辞をごく快いまた自然なことだと思つてゐるらしかった。ついに祖父は、めちゃくちゃな言葉に迷い込んでしまつて、クリストフの手を引張つて、ハスレルに紹介した。ハスレルはクリストフに微笑みかけ、何気なく彼の頭をなでてやつた。それから、この子供が彼の音楽を好いてることを知り、彼に会うのを待ち焦れて数日来一晩も眠らなかつたことを知ると、彼は子供を両腕にかかえて、やさしく種々なことを尋ねた。クリストフは嬉しさのあまり真赤になり、感動のあまり口がきけなくて、彼の顔を見上げるだけの勇氣もなかつた。ハスレルはその頤をつかまえて、無理に顔を上げさせた。クリストフは思いきつて眺めた。ハスレルの眼はやさしくて笑つていた。で彼も笑い出した。それから彼は、慕しい偉人の腕に抱かれてる身を非常に幸福に感じて、この上もなく幸福に感じて、

はらはらと涙をこぼした。ハスレルはその率直な愛情に心を打たれた。彼はなお情深い様子をし、子供を抱きしめ、母親のようなやさしきで話しかけた。とともにまた、おかしな言葉をいったり、笑わせようとしてくすぐったりした。そしてクリストフは、涙を流しながらも笑わずにはおられなかった。間もなく彼はすっかり慣れきって、遠慮なくハスレルに答えた。自分から進んで、年来の友人同士であるかのように、あらゆるかわいい抱負を彼の耳にささやきだした。どんなにかハスレルのように音楽家になりたいこと、ハスレルのようにりっぱなものを作りたいこと、偉い人になりたいこと。平素恥ずかしがりやだった彼も、今は心からうち解けて話した。しかも何を言ってるのか自分でもわからないで、ただ恍惚こうこつとしていた。ハスレルはその饒舌じょうぜつを笑っていた。彼は言った。

「大きくなったら、りっぱな音楽家になったら、ベルリンへ私を訪ねておいでよ。力になつてあげるから。」

クリストフはあまり嬉うれしくて答えができなかった。ハスレルは彼をからかった。

「いやなの？」

クリストフは厭いやじやないとうなずくために、五、六度強く頭を動かした。

「では約束したね？」

クリストフはまた無言の首肯うなずきを始めた。

「せめて私に抱きついておくれ。」

クリストフはハスレルの首のまわりに両腕を投げかけ、力いっぱいにしめつけた。

「やあ、着物が濡ぬれるじゃないか。もう放してくれ。鼻をかんだらどうだね。」

ハスレルは笑っていた。そして手ずから、恥ずかしがりながらも嬉しがつてる子供の鼻をかんでやった。彼は子供を下に降ろし、それから手を取って、食卓のところへ連れてゆき、そのポケットにいっぱい菓子をつめ込んでやり、放しながら言った。

「さよなら！ 約束を覚えておいでよ。」

クリストフは幸福の中に浸っていた。もはや他の世界は存在しなかった。彼はハスレルのあらゆる顔付や身振りをなつかしげに見守っていた。そして彼の一言に胸を打たれた。ハスレルは杯を手にして、何か口をきいていたが、その顔がにわかひきつった、そして言った。

「今日のような愉快な日の喜びにも、われわれは敵を忘れてはいけません。人は決しておのれの敵を忘れてはいけません。われわれが蹂躪じゅうりんされなかつたとしても、それは敵のせいではなかつたのです。敵が蹂躪じゅうりんされないとしても、それはわれわれのせいではな

いでしよう。それゆえに今私は、乾杯の辞として、われわれが……その健康を祝したくない人々も世にはあるということを申したいのです。」

人々は皆、その独特な乾杯の辞を喝采し興がった。ハスレルも皆といっしよに笑い出して、上機嫌な様子に返った。しかしクリストフは当惑していた。自分の偉人の行動を論議することをみずから肯じなかつたとはいえ、その晩、晴れやかな顔付と輝かしい考えしか存すべからざる時に、氏がそういう厭なことに思いを走せたのは、彼の氣に入らなかつた。けれども彼の印象は雑然たるものであつた。極度の喜びと、祖父の杯で飲んだわずかなシャンパンのために、その印象はすぐに追い払われてしまった。

帰る途中、祖父は独語をやめなかつた。ハスレルから受けた贅辞に有頂天になつていた。ハスレルこそは一世紀に一人くらいしか見られないほどの天才だと叫んでいた。クリストフは黙り込んで、なつかしい陶酔の情を心に秘めていた。彼が自分を接吻してくれた。彼が自分を両腕に抱いてくれた、彼はなんといい人だろう！ 彼はなんといい偉人だろう！

「ああ！」と彼は小さな寢床の中で、ひしと枕をかき抱きながら考えた、「私は死んでもいい、あの人のためになら死んでもいい！」

一夜、その小都会の空を過ぎていった輝いた流星は、クリストフの精神に決定的な影響を与えたのであった。幼年時代の間、それは生きた手本となって、その上に彼は眼を据えていた。わずか六歳の少年が、自分もまた音楽を書いてみようと決心したのは、この手本に基づいてであった。ほんとうのことをいえば、彼はすでに久しい以前から、みずから知らないで作曲していた。彼は作曲するためには、作曲するとみずから知るまで待つていなかった。

音楽家の心にとっては、すべてが音楽である。震え揺ぎはためくすべてのもの、照りわたった夏の日、風の吹く夜、流れる光、星の閃めき、暴風雨、小鳥の歌、虫の羽音、樹々の戦ぎ、好ましいあるいは厭らしい声、平素聞きなれてる、炉の音、戸の軋る音、夜の静寂の中に動脈をふくらす血液の音——すべて存在するものは皆音楽である。問題はそれを聞くということのみに存する。存在するもののかかる音楽は、ことごとくクリストフのうちに鳴り響いていた。彼が見るものはすべて、彼が感ずるものはすべて、音楽に変わっていた。彼はあたかも騒々しい蜂の巣のようであった。しかしだれもそれに気づかなかつた。彼自身も気づかなかつた。

あらゆる子供のように、彼もたえず小声に歌っていた。いかなる時でも、いかなることをしていられる時でも——片足で飛びながら、往來を歩き回っている時でも——祖父の家の床板ゆかいの上に転がり、両手で頭をかかえて、書物の挿絵に見入っている時でも——台所のいちばん薄暗い片隅で、自分の小さな椅子いすにすわりながら、夜になりかかっているのに、何を考へるともなくぼんやり夢想している時でも——常に、口を閉じ、頬ほおをふくらし、唇を震わして、始終つぶやいてる単調な音が、聞こえていた。いく時間たっても彼は倦あきなかった。母はそれを気にも止めなかった。けれどやがて、彼女はたまらなくなつて突然怒鳴りつけるのだった。

彼はその半ば夢心地の状態に倦あきてくると、動き出して音をたてたい欲求に駆かられた。すると、音楽を作り出して、それをあらんかぎりの声で歌った。彼はおのが生活のいかなる場合のための音楽をも皆こしらえ出していた。朝、家鴨あひるの子のように、盥たらいの中をかき回す時のためにも、音楽をもっていた。厭あなピアノの前の腰掛こしに上る時のためにも、音楽をもっていた——そしてとくにそれから降りる時のためにも（この方の音楽はいつそう精彩あるものだった）。また、母親が食卓にスープを運ぶ時のためにも、音楽をもっていた——その時彼は、ファンファーレを鳴らして急せきたてた。——食堂から寢室おごそへ厳おごかにやつて

行くためには、揚々たる行進曲マイチをみずから奏した。その場合時には、二人の弟とともに行列を組立てた。三人とも順々に並んで、堂々とねって歩き、各自に自分の行進曲をもっていた。しかしクリストフは、最もりっぱな曲を当然自分のものとしていた。右の多くの音楽のおのおのは、厳密にそれぞれの場合にあてはめられていた。クリストフは決してそれらをたがいに混同しようとはしなかった。他の者ならだれでもそれを取違えるかもしれない。しかし彼は明確にその音色を区別していた。

ある日彼は、祖父の家で、頭をそり返し腹を前につき出して、踵かかとで調子をとりながら、室の中をぐるぐる回っていた。自作の曲の一つをやってみながら、心持が悪くなるほどいつまでもぐるぐる回っていた。——老人は髻ひげを剃そっていたが、その手を止めて、石鹼せっけんだらけな顔をつき出し、彼の方を眺めて言った。

「何を歌ってるんだい。」

クリストフは知らないと答えた。

「も一度やってごらん。」とジャン・ミシエルは言った。

クリストフはやってみた。どうしても先刻の節ふしが思い出せなかった。でも祖父から注意されてるのに得意になって、自分の美しい声をほめてもらいたく思いながら、歌劇オペラのむず

かしい歌を自己流に歌った。しかし老人が求めてるのはそんなものではなかった。ジャン・ミシエルは口をつぐんで、もう彼に取り合わない様子をした。それでも、子供が隣の室で一人で遊んでる間、室の扉を半ば開け放したままにしておいた。

数日後、クリストフは自分のまわりに椅子いすを丸く並べて、芝居の断片的な記憶でこしらえ上げた音楽劇を演じていた。真面目まじめくさった様子で、芝居で見たとおりにメヌエツトの節ふしに合して、テーブルの上に掛かつてるベートーヴェンの肖像へ向い、足取りや敬礼をやっていた。そして足先で回転をしてふり向くと、こちらを眺めてる祖父の頭が、半開きの扉から見えた。彼は祖父に笑われてると思った。たいへん極り悪くなって、ぴたりとよし。そして窓のところへ走って行き、窓ガラスに顔を押しつけて、何か夢中に眺めてるようなふうを装った。しかし老人はなんとも言わなかった。彼の方へやって来て抱擁ほうようしてくれた。クリストフは老人が満足しているのをよく見てとった。彼の小さな自尊心は、そういう好意を受けると動かないではおれなかった。彼はかなり機敏だったので、自分がほめられたのをさとった。しかし、祖父は自分のうちの何をいちばんほめたのか、それがよくわからなかった。戯曲家としての才か、音楽家としての才か、歌手としての才か、あるいは舞踏者としての才か。彼は最後のものと思いたかった、なぜならそれを尊重していた

から。

それから一週間たって、彼がすっかり忘れてしまった時になって、祖父は彼に見せるものがあると言った。そして机をあけて、中から一冊の楽譜を取出し、それをピアノの譜面台にのせ、弾^ひいてごらんと子供に言った。クリストフはたいへん困ったが、どうかこうか読み解いた。その帳面は、老人の太い字体でとくに注意して書かれたものだった。冒頭は輪や花形で飾ってあった。——やがて、クリストフのそばにすわってページをめくってやってた祖父は、それがなんの音楽であるか尋ねた。クリストフは演奏にあまり夢中になっていて、何をひいてるやらわからなかったので、知らないと答えた。

「気をつけてごらん。それがわからないかね。」

そうだ、確かに知っていると彼は思った。しかしどこで聞いたのかわからなかった。……祖父は笑っていた。

「考えてごらん。」

クリストフは頭を振った。

「わからないよ。」

ほんとうをいえば思い当たることがあった。どうもその節^{ふし}は……という気がした。だが

躊躇ちゆうちゆうされた……そうだとはいいたくなかった。

「お祖父じいさん、わからないよ。」

彼は顔を赤くしていた。

「馬鹿な子だね。自分のだということがわからないのかい。」

彼は確かにそうだとは思っていた。しかしそうはつきり言われるのを聞くとはっとした。

「ああ、お祖父じいさん！……」

老人は顔を輝かしながら、彼にその音譜を説明してやった。

「それは詠唱アリア曲だ。火曜日にお前が床の上に転ころがって歌っていたものだ。——行進マーチ曲。先

週、も一度やっごらんと言ってもお前が思い出せなかったものだ。——メヌエツト。肱ひ

掛椅子じかけいすの前で踊っていたものだ。……ご覧。」

表紙には、みごとなゴジック字体で書いてあった。

少年の快樂——詠唱アリア曲、メヌエツト、円舞ワルツ曲、および、行進マーチ曲。——ジャン・クリ

ストフ・クラフト作品I。

クリストフは眩まぶしかった。自分の名、そのりっぱな表題、その大きな帳面、自分の作品、今それを見ようとは！……彼はまだ口ごもっていた。

「ああ、お祖父さん！ お祖父さん！……」

老人は彼を引寄せた。クリストフはその膝ひざの上に身を投げ、その胸の中に顔を隠した。彼は嬉うれしさに真赤になつていた。老人は、彼よりもなおいつそう嬉しかつたが、わざと平気を装つた調子で——感動しかかつてることにみずから気づいていたから——言つた。

「もちろん私が伴奏を加えたいし、また歌のキャラクテルに和ハーモニー声を入れておいた。それから……（彼は咳せきをした）……それから、メヌエットにトリオを加えた。なぜなら……なぜなら、それが習慣だから……それに……とにかく、悪くなつたとは思わないよ。」

彼はその曲をひいた。——クリストフは祖父と共作したことがたいへん得意だった。

「では、お祖父さん、あなたの名前も入れなけりやいけないよ。」

「それには及ばないさ。お前より他の人ほかに知らせる必要はない。ただ……（ここで彼の声は震えた）……ただ、後になつて、私わしがもういなくなつた時、お前はこれを見て、お前の年取つたお祖父さんを思い出してくれるだろう、ねえ！ お祖父さんを忘れやしないね。」

あわれな老人はすっかり言いきれなかつた。彼は自分より長い生命があるに違いないと感じた孫の作品中に、自分の拙つたない一節ひとふしを挿入するという、きわめて罪ない楽しみを、制することができなかつたのである。けれども、今から想像してゐるその光榮あざかに与りたいとい

う彼の願望は、いたって謙讓な哀れ深いものだった。なぜなら、彼はまったく死滅してしまわないために、おのれの思想の一片を無名で残しておけば、それで満足していたから。——クリストフはいたく感動して、彼の顔にやたらに接吻した。老人はますます心を動かされて、彼の頭を抱きしめた。

「ねえ、思い出してくれるだろうね。今後、お前が立派な音楽家となり、偉い芸術家となつて、一家の光栄となり、芸術の光栄となり、祖国の光栄となった時に、有名になった時に、お前を最初に見現わし、お前の将来を予言したのは、この年とつたお祖父さんだったということ、思い出してくれるだろうね。」

彼は自分の言葉を聞きながら、眼に涙をたたえていた。しかし彼はそういう気弱い様子を見せたくなかつた。激しく咳払いをし、氣むずかしい様子を、原稿を大事そうにしまいながら、子供を帰した。

クリストフは嬉しさに我を忘れて家へ帰っていった。小石は彼のまわりに踊っていた。ところが家の者から受けた待遇は、彼の酔を少しさましてしまった。彼がすっかり得意になつて、自然に急ぎこんで音楽上の手柄話を始めると、頭から両親に怒鳴りつけられた。

母は彼をひやかした。メルキオルは、あの老人は氣違いで、子供のことにおせっかいを出すより自分の身に注意する方がいい、と言いつ放つた。またクリストフの方では、そんな兎戯に類したことは取合わずに、すぐさまピアノに向かつて、四時間の練習をし、父親を喜ばすのがほんとうだそうだった。まず第一に、早く弾き方を覚ゆることに努むべきであつて、作曲などということは、もうこれ以上することがないという時になつて、それから取りかかつて遅くはないそうだった。

それらの賢い言葉から考えると、メルキオルは、子供のうちに早熟な高慢心が増長するの危険を、あらかじめ防いでやるつもりでいるらしくも思われるのだったが、実はそうではなかつた。むしろその反対であるのをすぐに示すことになつた。しかし彼は、音楽に表現すべきなんらの觀念をもかつてみずからもつたことがなかつたし、また表現しようという少しの欲求をもつたことがなかつたので、演奏の技倆に自惚れたあまりついには、作曲は第二義的のものであると考え、演奏者の手腕のみが作曲にすべての価値を与えるものだと思ふようになった。もちろん彼とて、ハスレルのような大作曲家によつて惹起ひきおここされる感激に、無感覺ではなかつた。世人の歡迎にたいしては、いつも成功ということにたいして感ずる尊敬の念をいだいた——人知れず多少の嫉妬しつとを交えた尊敬の念を。なぜ

なら、それらの喝采^{かつさい}を横取りされたような気がしていたから。しかしまた、偉い名手の成功も、それに劣らずはなばなしのものであって、快い媚惑^{びわく}的な結果からいえば、さらに個人的なさらに豊かなものであるということを、経験上知っていた。彼は楽匠らの才能に深い敬意を表するふうを装っていたが、しかし彼らの知力と品行とに悪評を与えるようなおかしな逸話は、いつも喜んでしゃべり回っていた。彼は演奏技倆を芸術の最高点にしていた。なぜなら、彼自身の言によると、舌は人体の最も高尚な部分であるということは明らかで、言葉を伴わない思想はなんの役にもたたないし、演奏を伴わない音楽はなんの役にもたたないということも、知れわたった事実であった。

がとにかく、彼がクリストフに与えた訓戒の理由はどうであったにせよ、その訓戒は、祖父の賛辞に危く失いかけていた平衡を、子供に取りもどさせるのに無益ではなかった。否それでも足りないくらいだった。クリストフはやはり、祖父の方が父よりもはるかに知力がすぐれてると判断していた。そして厭^{いや}な顔をせずにピアノに向かうのも、父の言葉に従うためであるというよりむしろ、機械的に指を鍵盤の上に走らせながら、いつものとおり勝手に夢想に耽^{ふけ}らんがためであった。いつまでも終ることのない練習をしながら、彼は高慢な声が自分のうちでくり返すのを聞いていた。「おれは作曲家だ、偉い作曲家だ。」

その日以来彼は、作曲家であつたから、作曲にとりかかった。字を書くこともろくに知らないうちから、家計簿の紙をもぎ取り、四分音符や八分音符を一生懸命に書きちらした。しかし、自分の考へてゐることを知るために、またそれをはつきり書き現わすために、非常に骨折つていたので、ついには、何かを考えようとする時以外には、もう何も考えなくなつてしまつた。それでも彼はやはり楽句を組立てようと力んでいた。そして彼はもとより音楽家だつたから、まだなんの意味をもなさないものではあつたがともかくも楽句をこしらへ出した。すると彼は揚々としてそれを祖父のもとへもつて行つた。祖父は嬉し涙を流した——彼はもう年を取つたので涙もろかつた——そして素敵なものだと言つてくれた。

彼はまったく甘やかされて駄目だめになるところだつた。しかし幸いにも、生まれつき聡明な性質は、ある一人の男の影響に助けられて、彼を救い上げた。その男の方では、だれかに影響を与えようなどとはみずから思つてもいなかつたし、だれの眼から見ても着実の見本にしかすぎないのであつた。——それはルイザの兄であつた。

彼はルイザと同じく小柄で、痩せて、ひ弱で、少し猫背ねこせだつた。年齢はよくわからなかつた。四十歳を越してゐるはずはなかつたが、見たところでは五十歳かその上にも思われた。皺寄しわつた赤味がかつた小さな顔をして、人のよさそうな青い眼は、やや色褪あせた瑠璃草るりそうの

ようにごく蒼白あおしろかつた。隙間風すきまが当たるのを恐れてどこでも寒そうに帽子をかぶっていたが、その帽子をぬぐと、円錐形えんすいの赤い小さな禿頭はげあたまが現われた。クリストフと弟たちはそれを面白がった。髪の毛をどうしたかと尋ねたり、メルキオルの露骨な戯言ざれごとに乗せられて禿はげをたたくぞとのおどかしりながら、彼らはいつもそのことで彼をからかって倦あきなかつた。すると彼はまっ先に笑い出して、されるままになって少しも怒らなかつた。彼は小さな行商人であつた。村から村へと渡り歩いてゐた。背にかついでる大きな梱こりの中には、あらゆる物がはいつていた、香料品、紙類、糖菓類、ハンケチ、襟卷えりまき、履はきも物、罐詰かんづめ、曆こよみ、小唄集こうた、薬品など。家の人たちは幾度も、ちよつとした店の株を、雑貨屋や小間物屋を買い与えて、そこに落着くように勧めたことがあつた。しかし彼は腰を据えることができなかつた。夜中に起き上がつて、戸の下に鍵を置き、梱こりをかついで出かけてしまった。いく月もつづいて姿を見せなかつた。それからまたもどつて来た。夕方、だれかが戸にさわる音がした。扉が少し開いた。そして、丁寧ていねいに帽子をぬいだ小さな禿頭はげあたまが、人のいい眼付とおずおずした微笑といつしよに、そこに現われた。

「皆さん今晚は、」と彼は言つた。はいる前によく靴くつを拭ふき、皆に一人一人年長順あひさに挨拶をし、室のいちばん末席に行つてすわつた。そこで彼はパイプに火をつけ、背をか

めて、例の悪洒落の嵐が過ぎ去るのを静かに待った。二人のクラブト、祖父と父とは、
 彼にたいして嘲弄的な軽蔑をいだいていた。その矮小な男が彼らにはおかしく
 思われた、そして行商人という賤しい身分に自尊心を傷つけられていた。彼らはそのこと
 をあからさまに見せつけていた。しかし彼は気づかないらしかった。彼らに深い敬意を示
 していた。そのために彼らはいくらか和らげられた。とくに老人の方は、他人が示してく
 れる尊敬にいたく感じやすく、気分を和げられた。彼らはルイザがそばで顔を真赤にす
 るほどひどい戯言を浴せかけて、それで満足していた。ルイザはクラブト家の人たちの
 すぐれてることを議論なしにいつも承認していたから、夫と舅の方が不当だとは夢にも
 思っていないかった。しかし彼女は兄をやさしく愛していたし、兄も彼女に無言の敬愛をい
 だいていた。彼らは二人きりで他に身寄りの者もなく、二人とも生活に虐げられさいなま
 れて惨めな姿になっていた。人知れず忍んできた同じ辛苦とたがいの憐憫との絆が、悲
 しいやさしみをもつて二人をいっしょに結びつけていた。生きるために、愉快に生きるた
 めに堅固にできあがってる、頑丈な騒々しい荒っぽいクラブト家の人たちの間にあつ
 て、いわば人生の外部か傍かに捨てられたこの弱い善良な二人は、かつて一言も口には出
 さなかつたが、たがいに理解したがいに憐れみ合っていた。

クリストフは幼年の残酷なけいちよう軽佻へんてうさで、父と祖父とに倣ならつてこの小商人を輕蔑けいべつしていた。おかしな玩具おもちゃかなんぞのように彼を面白がっていた。馬鹿げた意地悪さで彼をからかっていた。それを彼は泰然と落着き払って我慢していた。けれどもクリストフは、みずから知らず知らずに彼を好んでいた。まず第一に、思うままになる柔順な玩具として彼を好きだった。それからまた、菓子か絵か面白い新案物か、待ち甲斐がのある何かいいことがいつもあつたので、彼を好きだった。その小男がもどつて来るのは子供たちの喜びだった、いつも思いがけない余得があつたから。彼はいかにも貧乏ではあつたが、どうにか工面をして一人一人に土産物みやげをもつてきてくれた。そして家の人々の祝い日をそれぞれ忘れたことがなかつた。祝日にはきまつて姿を見せた。そしてポケットから、心をこめて選んだかわい贈物を取り出した。だれも礼をいうことさえ忘れるほどそれに慣れきっていた。そして彼は贈物をするという楽しみで十分報むくわれてるらしかった。しかしクリストフは、いつもよく眠れなかつたし、夜の間に昼間の出来事を頭の中で反覆させるのが常だったので、時々、叔父はたいへん親切だと考えることがあつた。そしてその憐あわれな男にたいして感謝の念がこみ上げてきた。しかし昼になると、もう愚弄ぐろうすることしか考えないで、少しもその様子を示さなかつた。その上クリストフはまだあまり小さかつたので、善良さの価値が

十分にわからなかつた。子供の言葉においては、善良と馬鹿とはほとんど同意義語である。叔父おじゴットフリートはその生きた証拠しやうこらしかつた。

ある晩、メルキオルが夕食をしに町に出かけた時、ゴットフリートは下の広間に一人残つていたが、ルイザが二人の子供を寝かしてゐる間に、外に出て、数歩先の河岸に行き、そこにすわつた。クリストフはひまだったのでその後について行つた。そしていつものとおり、子犬のようにじやれついで彼をいじめたあげく、ついに息を切らして、彼の足下の草の上に身を転がした。腹はら這はらいになつて顔を芝生しばふに埋めた。息切れが止まると、また何か悪口を言つてやろうと考へた。そして悪口が見つかつたので、やはり顔を地面に埋めたまま、笑いこけながらそれを大声に言つてやつた。なんの返辞もなかつた。その沈黙にびつくりして、彼は頭をあげ、その面白い戯ざれい言ごとをふたたび言つてやろうとした。すると彼の眼はゴットフリートの顔に出会つた。その顔は、金色の霧もやの中に消えてゆく太陽の名残なごりの光りに照らされてゐた。クリストフの言葉は喉元のどにつかえた。ゴットフリートは眼を半ば閉じ、口を少し開いて、ぼんやり微笑ほほえんでゐた。彼の痛ましい顔はなんともいへぬ誠実さを帯びてゐた。クリストフは頬杖ほおづえをついて彼を見守り始めた。夜になりかかつてゐた。ゴットフリートの顔は少しずつ消えていつた。あたりはひっそりとしてゐた。ゴットフリー

トの顔に反映してゐる神秘的な印象に、クリストフも巻きこまれていった。地面は影に包まれ、空は明るかった。星が見えだしていた。河の小波さざなみが岸にひたひたと音をたてていた。子供は気がぼんやりしてきた。眼にも見ないで草の小さな茎を噛かんでいた。蟋蟀こわろぎが一匹そばで鳴いていた。彼は眠りかかるような気持になった。……と突然暗い中で、ゴットフリートが歌いだした。胸の中で響くような臃おぼろな弱い声で歌った。少し離れると聞こえないくらいの声だった。しかしそれには心惹ひかるる誠がこもっていた。声高に考えてるともいえるほどだった。あたかも透明な水を通してのように、その音楽を通して、彼の心の奥底まで読み取られる、ともいえるほどだった。クリストフはかつてそんなふうに歌われるのを聞いたことがなかった。またかつてそんな歌を聞いたことがなかった。ゆるやかな簡単な幼稚な歌であつて、重々しい寂しい多少単調な足どりで、決して急ぐことなく進んでいった——長い沈黙を伴つて——それからまた行方ゆくえもかまわず進みだし、夜のうちに消えていった。ごく遠くからやつて来るようで、どこへ行くのかわからなかった。その朗らかなさの中には惑乱が満ちていた。平和な表面の下には、長い年月の苦悶くもんが眠っていた。クリストフはもう息もつかず、身を動かすこともできないで、感動のあまり冷たくなっていた。歌が終ると、ゴットフリートの方へはい寄つた。そして喉のどをかすらして尋ねた。

「叔父さん！……」

ゴットフリートは答えなかった。

「叔父さん！」と子供はくり返して、彼の膝に両手と頤あごとをのせた。

ゴットフリートのやさしい声が言った。

「坊や……。」

「それはなんなの、叔父さん！ 教えておくれよ。叔父さんが歌ったのはなんなの？」

「知らないよ。」

「なんだか言っておくれよ。」

「知らないよ。歌だよ。」

「叔父さんの歌かい。」

「おれんなもんか、馬鹿な！……古い歌だよ。」

「だれが作ったの？」

「わからないね……。」

「いつできたの？」

「わからないよ……。」

「叔父おじさんが小さい時分にかい？」

「おれが生まれる前だ、おれのお父さんが生まれる前、お父さんのお父さんのお父さんが生まれる前……。この歌はいつでもあつたんだ。」

「変だね！ だれもそんなことを言ってくれなかつたよ。」
彼はちよつと考えた。

「叔父さん、まだ他のを知つてるかい？」

「ああ。」

「も一つ歌つてくれない？」

「なぜも一つ歌うんだ？ 一つでたくさんだよ。歌いたい時に、歌わなけりやならない時に、歌うものだ。面白半分に歌つちやいけない。」

「だって、音楽をこしらえる時には？」

「これは音楽じゃないよ。」

子供は考えこんだ。よくわからなかつた。でも彼は説明を求めはしなかつた。なるほどそれは、音楽では、他の歌みたいに音楽ではなかつた。彼は言った。

「叔父おじさん、叔父さんはこしらえたことがあるかい？」

「何をさ?」

「歌を。」

「歌? なあにどうしておれにできるもんか。それはこしらえられるもんじやないよ。」
 子供はいつもの論法で言い張った。

「でも、叔父さん、一度はこしらえたに違いないよ。」

ゴットフリートは頑がんとして頭を振った。

「いつでもあつたんだ。」

子供は言い進んだ。

「だって、叔父さん、他ほかのを、新しいのを、こしらえることはできないのかい?」

「なぜこしらえるんだ? もうどんなんでもあるんだ。悲しい時うれのつみびともあれば、嬉しい時つみびともある。疲れた時つみびとのつみびともあれば、遠い家つみびとのことを思う時つみびともある。自分が賤いやしい罪人つみびとだったから、虫けらつみびとみたいになつまらない者つみびとだったからといって、自分の身つみびとが厭いやになつた時つみびとのものもある。他人が親切つみびとにしてくれなかつたからといって、泣きたくなつたときつみびとのものもある。天気つみびとがいいからといって、そしていつも親切つみびとで笑いかけてくださるような神様つみびとのつみびと大空つみびとが見えるからといって、心が楽しくなつた時つみびとのものもある。……どんなんでも、どんなんでもあるんだ

よ。なんで他のをこしらえる必要があるもんか。」

「偉い人になるためにさ！」と子供は言った。彼は祖父の教訓とあどけない夢想とに頭が満されていた。

ゴットフリートは穏かな笑いをちよつと見せた。クリストフは少しむつとして尋ねた。

「なぜ笑うんだい！」

ゴットフリートは言った。

「ああおれは、おれはつまらない者さ。」

そして子供の頭をやさしくなでながら尋ねた。

「じゃあお前は偉い人になりたいんだな。」

「そうだよ。」とクリストフは得意げに答えた。

彼はゴットフリートからほめられることと信じていた。しかしゴットフリートはこう答え返した。

「なんのために？」

クリストフはまごついた。考えてから言った。

「りっぱな歌をこしらえるためだよ！」

ゴットフリートはまた笑った。そして言った。

「偉い人になるために歌をこしらえたいんだね、そして歌をこしらえるために偉い人になりたいんだね。お前は、尻尾しっぽを追っかけてぐるぐる回ってる犬みたいだ。」

クリストフはひどく癩しやくにさわった。他の時なら、いつも嘲ちやうろう弄ろうしている叔父おじからあべこべに嘲弄しやくされるのに、我慢ができなかったかもしれない。そしてまた同時に、理屈で自分を困らすほどゴットフリートが利口であろうとは、かつて思いも寄らないことだった。彼はやり返してやるべき議論か悪口かを考えたが、何も見当たらなかった。ゴットフリートはつづけて言った。

「おまえがもし、ここからコブレンツまでもあるほど偉大な人になったにしろ、たった一つの歌もとうていできやすまい。」

クリストフはむっとした。

「もしこしらえたいと思ったら……！」

「思えば思うほどできないもんだ。歌をこしらえるには、あのとおりでなけりやいけない。お聴ききよ……。」

月は、野の向うに、丸く輝いてのぼっていた。銀色の靄もやが、地面に低く、また鏡のよう

な水の上に、漂つていた。蛙が語り合つていた。牧場の中には、蟪の鳴く笛の音の旋律が聞こえていた。蟋蟀の鋭い顫音は、星の閃きに答えてるかと思われた。風は静かに、榛の木の枝を戦がしていた。河の上方の丘から、鶯のか弱い歌がおりてきた。

「何を歌う必要があるのか？」とゴットフリートは長い沈黙の後にほっと息をして言った——（自分自身に向かつて言つてるのかクリストフに向かつて言つてるのかわからなかった）——「お前がどんなものをこしらえようと、あれらの方がいつそうりっぱに歌つてるじゃないか。」

クリストフは幾度もそれら夜の音を聞いていた。しかしかつてこんなふう聞いたことはなかった。ほんとうだ、何を人は歌う必要があるのか？……彼は心がやさしみと悲しみとでいっぱいになってくるのを感じた。牧場を、河を、空を、親しい星を、胸にかき抱きたかった。そして彼は叔父ゴットフリートにたいする愛情に浸された。今は皆のうちで、ゴットフリートがいちばんよく、いちばん賢く、いちばんりっぱに思われた。いかに彼を見誤つていたかを考えた。自分に見誤られたために叔父は悲しんでいると考えた。彼は後悔の念でいっぱいになった。こう叫びたい気がした。「叔父さん、もう悲しんではいやだ！もう意地悪はしないよ。許しておくれよ。僕は叔父さんが大好きだ！」しかし彼はあ

えて言い得なかつた。——そしていきなり、彼はゴットフリートの腕に身を投げた。しかし文句が出なかつた。彼はただくり返した。「ぼくは叔父さんが大好きだ！」そして心こめてひしと抱きしめた。ゴットフリートは驚きまた感動して、「なんだ？　なんだ？」とくり返し、同じく彼を抱きしめた。——それから、彼は立ち上がり、子供の手を取り、そして言った、「帰らなけりやならない。」クリストフは叔父から理解されなかつたのではないかしらと、また悲しい気持になつた。しかし二人が家に着いた時、ゴットフリートは彼に言った。「もしよかつたら、また晩に、神様の音楽をききにいっしょに行こう。また他の歌も歌つてあげよう。」そしてクリストフは、感謝の念にいっぱいになって、別れの挨拶あいさつをしながら彼を抱擁した時、叔父が理解してくれてることをよく見てとつた。

それ以来、二人は夕方、しばしばいっしょに散歩に出かけた。彼らは河に沿つたり野を横切つたりして、黙つて歩いた。ゴットフリートはゆるやかにパイプをくゆらしていた。クリストフは少し影におびえて、彼に手を引かれていた。彼らは草の中にすわつた。しばらく沈黙の後、ゴットフリートは星や雲のことを話してくれた。土や空気や水の息吹いぶき、また飛んだり這はつたり跳ねたり泳いだりしてる、暗闇の中でうよめく小世界の生物の、歌や叫びや音、また雨や天気の前兆、また夜の交響曲シンフォニーの無数の楽器、それらのものを一々

聞き分けることを教えてくれた。時とすると、悲しい節ふしや楽しい節を歌ってくれた。しかしそれはいつも同じ種類のものであった。クリストフはそれをきいていつも同じ切なさを感じた。ゴットフリートは決して一晩に一つの歌きり歌わなかった。頼まれても快く歌わないことを、クリストフは知っていた。歌いたい時自然に出てくるのでなければならなかった。黙って長い間待っていなければならないことが多かった。そして「もう今晚は歌わないんだろう……」とクリストフが考へてる時に、ゴットフリートは歌い出すのだった。

ある晩、ゴットフリートが確かに歌ってくれそうもない時、クリストフは自作の小曲を一つ彼に示そうと思いついた。作るのにたいへん骨折ったものであり、得意になつてゐるのであった。自分がいかに芸術家であるかを見せつけたかった。ゴットフリートは静かに耳を傾けた。それから言った。

「実にまずいね、氣の毒だが。」

クリストフは面目を失つて、答うべき言葉も見出さなかつた。ゴットフリートは憐れむように言った。

「どうしてそんなものをこしらえたんだい。いかにもまずい。だれもそんなものをこしらえろとは言わなかつたらうにね。」

クリストフは憤りのあまり真赤になって言い逆った。

「お祖父じいさんはぼくの音楽をたいへんいいと思ってるよ。」と彼は叫んだ。

「ああ！」とゴットフリートは平気で言った、「そりや道もつとも理に違いない。あの人はたいへん学者だ。音楽に通じてる。ところがおれは音楽をよく知らないんだ。」

そしてちよつと間をおいて言った。

「だがおれは、たいへんまずいと思う。」

彼は穏かにクリストフを眺め、その不機嫌ふきげんな顔を見、微笑ほほえんで言った。

「他ほかにもこしらえた節ふしがあるかい。今のより他のものの方がおれには気に入るかもしれない。」

クリストフは他の節が最初のもの印象を實際消してくれるかもしれないと考えた。そしてあるだけ歌った。ゴットフリートはなんとも言わなかった。彼はおしまいになるのを待っていた。それから、頭を振って、深い自信ある調子で言った。

「なおまずい。」

クリストフは唇くちびるをくいしめた。頤あごが震えていた。泣き出したくなっていた。ゴットフリートは自分でもまごついてるように言い張った。

「実にまずい！」

クリストフは涙声で叫んだ。

「では、どうしてまずいというんだい？」

ゴットフリートは正直な眼付で彼を眺めた。

「どうしてって？……おれにはわからない……お待ちよ……実際まずい……第一、馬鹿げてるから……そうだ、そのとおりだ……馬鹿げてる、なんの意味もなさない……そこだ。

それを書いた時、お前は何もいうべきことをもっていなかったんだ。なぜそんなものを書いたんだい？」

「知らないよ。」とクリストフは悲しい声で言った。「美しい楽曲を書きたかったんだよ。」

「それだ。お前は書くために書いたんだ。偉い音楽家になるために、人からほめられたいために、書いたんだ。お前は高慢だった、お前は嘘をついた、それで罰を受けたんだ……そこだ！ 音楽では、高慢になって嘘をつけば、いつでも罰を受ける。音楽は謙遜で誠実であることを望む。もしそうでなかったら、音楽はなんだろう？ 神様にたいする不信だ、冒涇だ、正直な真実なことをいうために美しい歌をわれわれに贈ってくださいました神

様にたいしてね。」

彼は子供の悲しみに気がついて、抱擁してやろうとした。しかしクリストフは怒って横を向いた。そしていく日も不機嫌ふきげんな顔を見せた。彼はゴットフリートを憎んでいた。——しかし、「あいつは馬鹿だ、何を知るもんか！ ずっと賢いお祖父じいさんが、僕の音楽を素敵だと言ってるんだ」といくらみずからくり返しても甲斐かひがなかった。——心の底では、叔父の方が道理だと彼は知っていた。そしてゴットフリートの言葉は彼のうちに刻み込まれていた。彼は嘘をついたのが恥ずかしかった。

それで、彼はしつこく恨みを含んでいたものの、音楽を書く時には、今やいつでも叔父のことを考えていた。そしてしばしば、ゴットフリートにどう思われるだろうかと考える。と恥ずかしくなって、書いてしまったものを引裂くこともあった。そういう気持を押しきって、全然誠実ではないとわかってある節を書く時には、注意深く叔父に隠していた。彼は叔父の判断をびくびくしていた。そしてゴットフリートが、「さほどまずくはない……気に入った……」と、ただそれだけ楽曲の一つについて言ってくれると、彼は嬉うれしくてたまらなかった。

また時には、意趣返しに、大音楽家の曲調を自分のだと偽って、たちの悪い悪戯いたずらをや

ることもあった。そしてゴットフリートがたまたまそれをけなすと、彼は小躍りして喜んだ。しかしゴットフリートはまごつかなかった。クリストフが手をたたいてまわりを喜んではね回るのを見ながら、彼は人のよさそうに笑っていた。そしていつも例の持論に立ちもどった。「それはよく書いてあるかもしれない、しかしなんの意味ももってはいない。」——かつて彼は家で催される小演奏会に臨席するのを好まなかつた。楽曲がいかほどりつぱであらうと、彼は欠伸^{あくび}をやりだして、退屈でぼんやりしたふうをしていた。やがて辛抱できないで、こつそり逃げ出した。彼はいつも言っていた。

「ねえ、坊や、お前が家の中で書くものは、みんな音楽じゃない。家の中の音楽は、室内の太陽と同じだ。音楽は家の外にあるのだ、神様のさわやかな貴い空気を少しお前が呼吸する時にね。」

彼はいつも神様のことを口にのぼせていた。彼は二人のクラフトと違って、きわめて信仰深かつた。二人のクラフト、父と子とは、金曜日さいじつの齋日に肉食することを注意して避けながらも、神を恐れない者だと自任していたのである。

突然メルキオルは、なぜだかわからないが、意見を変えた。祖父がクリストフの逸品を

集めてることに賛成したばかりでなく、クリストフが非常にびっくりしたことには、その原稿から二、三の写しをいく晩もかかってこしらえ上げた。それについて人から尋ねられると、彼は勿もつたい体たいぶつた様子をして、「今にわかるよ」と答えるきりだった。あるいはまた、笑いながら手をこすつたり、戯れらしいふうで子供の頭を強くなでたり、彼の尻しりをたたいたりした。クリストフはそういうなれなれしさを非常に嫌きらった。しかし父が満足してゐることはわかっていた。そしてその理由はわからなかった。

それから、メルキオルと祖父との間に秘密な相談が行なわれた。そしてある晩クリストフは、クリストフみずから少年の快楽を大公爵レオポルト殿下にささげたということを聞いて、非常に驚いた。メルキオルは、その敬意を嘉納かのうせられる思おぼしめ召めしが大公爵にあると、いうことを、前から匂におわしていた。そこで、得意然たるメルキオルは、一刻も猶ゆう予よなく次のことをしなければならぬと宣言した。第一、大公爵おおやけに公の申請おんしんをすること——第二、作品を発表すること——第三、その作品を聞かせるために音楽会を催すこと。

メルキオルとジャン・ミシエルとは、なお長い相談をし合った。二晩三晩の間、彼らは勢い込んで論じ合った。だれも邪魔しに来ることを止められた。メルキオルは書いたり削つたり、削つたり書いたりしていた。老人は詩でも読むかのように、大声で話していた。

時には二人で怒り出したり、言葉が見つからないでテーブルをたたいたりしていた。

それから、クリストフが呼ばれた。右には父が控え、左には祖父が控えて、彼をテーブルの前にすわらし、指にペンを握らした。祖父は彼に文句を書き取らせ始めた。彼は少しも理解できなかつた。一語一語を書くのに非常に骨が折れたし、メルキオルが耳もとで怒鳴っていたし、また、祖父があまり強い調子で朗読するので、言葉の響きに驚かされて、その意味に耳を傾けることを考えもしなかつたのである。老人の方も劣らず興奮していた。じつとすわっておれなかつた。原文の意味を身振であらわしながら、室の中を歩き回っていた。しかし絶えず、子供の書いてる紙面を見にやって来た。クリストフは背中から覗き込んで二つの大きな頭におびえて、長く舌を出し、もうペンを持つこともできず、眼が曇つてき、あまり字画を引張りすぎたり、あるいはごちやごちやに書きちらしたりした——メルキオルは喚きたて、ジャン・ミシエルは猛りたっていた——そして彼は書き直し、またさらに書き直さなければならなかつた。ついに紙の終りまで書いたかと思うと、無瑕な紙面に大きなインキの雫が落ちかかった。——すると彼は耳を引張られた。わつと泣き出した。しかし紙に汚点がつくので泣くことも許されなかつた。——そして、第一行から書取をやり直させられた。一生涯そんなことがつづくのかと思われた。

ついにはおしまいになった。ジャン・ミシエルは暖炉によりかかって、喜びのあまり震え声で、でき上がったものを読み返した。その間メルキオルは、椅子の上に反り返り、天井を眺めて、頤をゆすぶりながら、物知り顔に次の捧呈文の文体を吟味していた。

いと畏かしこき、いと崇けだか高き殿下！

四歳のころからして、音楽は私の幼い仕事の第一のものとなり始めました。私の魂を純なる和ハーモニー声へ鼓舞してくださる貴いミュージズの神と、いったん交わりを結びますと、すぐさま私はミュージズの神を愛するようになりました。そしてミュージズの神も、私の愛情に報いてくださったように思われます。今私は六歳に達しております。そして先ごろから私のミュージズの神は、靈感のさなかに幾度となく、私の耳へささやいてくださった。 「あえてせよ、あえてせよ！ 汝の魂の和ハーモニー声を書けよ！」
——私は考えました。「六歳で、どうして私はあえてなされよう！ 芸術の識者たちになんと言われるであろう？」——私はためらいました。私は震えました。けれども私のミュージズの神は望んでいられます。……私は従いました。私は書きました。

そして今私は、

いと崇高けだかき殿下よ！

玉座の階きざはし段におこがましくも、私の幼い仕事の処女作を、ささげたいのであります。畏かしこき御推賛の情け深き御瞳おひとみを、この処女作の上にくだしたまわらんことを、厚かましくも希こいねがいたのであります。

それと申しますのも、学問と芸術は常に、賢明なるメセーナとして、寛大なる擁護者として、殿下を御仰ぎ奉つたのでありますから。そして才能は、聖きよき御保護たての楯の下に、花を咲かせるのでありますから。

右の深く確かな信念をいだけております私は、この幼き試作をささげましてあえてお側そばへ進みます。なにとぞ私の尊敬の念の清い捧ささげもの物としてお受けくださりませ。そしてお恵みをもちまして、

いと崇高けだかき殿下よ！

この作品の上に御眼を垂れたまい、また恭うやうやしく御足下に伏し奉る幼き作者の上に、御眼を垂れてくださりませ！

いと畏きいと崇高き殿下の

全き謙讓忠実柔順なる僕しもべ

ジャン・クリストフ・クラフト

クリストフの耳には何にもはいらなかった。彼はなし終えたので夢中に喜んでいた。そしてまた書き直させられはすまいかと恐れて、野の中へ逃げ出した。何を書いたのか少しもわからなかったし、またちつとも気にしてはいなかった。しかし老人は、読み終わった後、なおよく玩味がんみするためにも一度読み直した。それが済むと、メルキオルも老人もともに、まったくりっぱな出来だと断言した。楽譜の写本といっしょにその手紙をささげられた大公爵も、同じ意見であった。彼は両方ともみごとに技功だと言ってくれた。彼は音楽会を許可し、音楽院の広間をメルキオルの勝手に使用させるよう命じ、またみずから演奏に臨む日には、その少年音楽家に会ってやると約束した。

でメルキオルは、音楽会をできるだけ早く催すことに取りかかった。彼は宮廷音楽団の協力を確かめた。そして第一策の成功のためにますます増長していたので、少年の快樂の豪奢ごうしゃな出版を同時に企てた。ピアノについてるクリストフとヴァイオリンを手にしてそ

のそばに立つてる自分メルキオルとの肖像を、本の表紙に刷り込みたかった。しかしこれは諦めなければならなかった。費用のためではないが——メルキオルは入費なんかには辟易する男ではなかった——それだけの時日がなかったからである。彼は比喩的な絵に取代えた。揺籃、ラツパ、太鼓、木馬などが、光線のほとぼしり出てる豎琴を取巻いてる絵だった。表題には、大公爵の名前が太い字で浮出してる長い捧呈文が添えてあつて、「ジャン・クリストフ・クラフト氏は六歳なりき」という説明もついていた。（実をいえば彼は七歳半だった。）楽譜の版刻にたいそう金がかかった。それを払うためには、模様彫刻のある十八世紀の古い戸棚を祖父が売らなければならなかった。道具屋のウォルムゼルが再三申込んでも決して手離そうとしなかった品である。しかしメルキオルは、書物の売高でその償いは取れてあまりあるものだ、少しも疑わなかった。

なおも一つの問題が彼の気にかかつていた。演奏会当日のクリストフの服装問題だった。それについて家族の会議が開かれた。四歳くらいの子供みたいに、短い上着をつけ脛を露わにして舞台に出ることを、メルキオルは望んでいた。しかしクリストフは年齢のわりにはごく頑丈だった。だれもそれを知っていた。ごまかすことができようとは思ひもよらなかつた。するとメルキオルはうまい考えを思いついた。燕尾服をきせて白い襟飾をつ

けさせようときめた。やさしいルイザは、かわいい子供を人の笑い草にするつもりかと言
 い逆らったが、なんの役にもたたなかつた。そういう意外な姿で出ると、そのために面白
 みが増して成功するに違いないと、メルキオルはあらかじめ嬉しがっていた。そうきまる
 と、この小さな大人の服装のために仕立屋が寸法を取りに来た。また上等のシャツや塗
 靴も必要だった。それらのものもまた眼の玉が飛び出るほど高価だった。クリストフは
 その新しい衣裳をつけるとたいへんぎごちなかつた。それに慣らすために、何度も衣裳を
 つけて楽曲を稽古させられた。一月も前から、彼はもうピアノの腰掛を離れなかつた。ま
 た挨拶のしかたも教えられた。自由になる時は一瞬もなかつた。彼は苛ら立っていたが、
 しかしあえて逆らひはしなかつた。晴れの業をやるんだと考えていたから。そして得意で
 もあつたが心配でもあつた。そのうえ、皆から大事にされていた。風邪をひきはしないか
 と気遣われた。絹ハンカチで首を巻いてもらった。湿らないように靴をあたたためてもらつ
 た。食卓ではいちばんいい物を食べさせられた。

ついに晴れの日がやってきた。理髪師は身支度の指図にやって来て、クリストフの硬い
 髪を縮らしてくれた。羊のような巻毛をこしらえないうちは彼を放さなかつた。家じゅう
 の者がクリストフの前に並んで、りっぱになつたと言つた。メルキオルは彼の顔を見調べ、

方々から眺めた後、額をたたいて、大きな花を捜しに行き、それを彼のボタンの穴にさしてくれた。しかしルイザは、彼の姿を見ながら、両腕を天の方へ差上げて、猿さるのようだと悲しげに叫んだ。その言葉はひどく彼をがっかりさせた。彼自身もその服装を誇っていた。彼にとってはそういう屈辱の感が、この記念すべき一日のおもな感情であることになった。

音楽会はこれから始まるころであった。坐席の半ばは空あいていた。大公爵はまだ来ていなかった。こういう場合にはいつもあるとおり、一人の親切な物知りの友人がやはりいて、宮邸には評議会があるので大公爵は来られまいという消息をもたらしてきた。確かな筋から出た消息だそうだった。メルキオルは落胆し、気をもみ、行ったり来たりし、窓のぞから覗き出した。ジャン・ミシエル老人の方も心痛していた。しかしそれは孫のことについてであった。彼はやたらに世話をやいていた。クリストフは家の者たちの熱心さにかぶれていた。自分の楽曲についてはなんらの不安も感じなかった。ただ公衆に向かつてなすべあいきつき挨拶のことを考えては、心を乱していた。そしてあまり考えてばかりいたので、それ

が苦悶くもんの種とまでなつた。

そのうちに、いよいよ始めなければならなくなつた。聴衆は待ちかねていた。宮廷音楽団オーケストラの管弦樂は、コリオランの序曲を奏し出した。子供はコリオランもベートーヴェンも知らなかつた。彼はベートーヴェンの曲をしばしば聞いたことがあつたが、それと知らないで聞いていたのだつた。かつて彼は聞いてる作品の名前を気にかけてことがなかつた。自分で勝手な名前をこしらえ出してそれに名づけ、その主題に、小さな物語やあるいは小さな景色をあてはめていた。彼は作品を普通三種に分類していた。火と土と水とであつた。そしてそのおのおのにまた無数のいろんな細かい差異があつた。モーツァルトは水に属していた。川端の牧場や、河上に漂う透きわたつた靄もやや、春の小雨や、あるいは虹にじであつた。ベートーヴェンは火であつた。ある時は、巨大な炎と広大な煙とをたてる烈火であつた。ある時は、燃えてる森であり、電光のほとぼしり出る恐ろしい重い雲であつた。ある時は、燦爛さんらんたる光に満ちた大空であつて、九月の麗わしい夜に、一つ離れて滑り落ち静かに消えてゆく、見ても胸踊るばかりの星が一つ、そこに見えていた。この音楽会の時もまた、その勇ましい魂の熱火がクリストフを焼いた。彼は炎の急湍きゅうたんに巻き込まれた。その他はすべて消え去つた。その他はすべて彼にたいしてなんであつたか？ 狼狽ろうばいしてるメル

キオル、心痛してるジャン・ミシエル、忙しそうな皆の者、聴衆、大公爵、小さなクリストフ自身、それらのものに彼はなんの用があつたか？ 彼は自分をさらってゆく恐ろしい意力の手中にあつた。彼はその後に従つてゆきながら、息をあえぎ、眼に涙を浮べ、足をすくめ、たなごころあしうら掌から蹠にいたるまでぞつとしていた。血潮は襲撃の譜を鳴らしていた。そして彼は震えていた。……かくて、飾り框かまちの後ろに隠れ、耳をそばだて、じつと聴いているうちに、彼は心の底ではつとした。管弦樂はある小節の真中でびたりと止つていた。そしてちよつと休んだ後、銅鑼どらやティムパニの大きな音で、公の威勢をもつて軍歌を奏し出した。その二つの音楽の移り変わりがあまりに粗暴だったので、クリストフは憤つて、齒をきしらせ足を踏み鳴らして、壁に拳固げんこをつきつけた。しかしメルキオルは雀躍こおどりしていた。大公爵がはいつて来て、管弦樂団が国歌を奏して敬意を表したのだった。ジャン・ミシエルは震え声で、孫に最後の世話をやいていた。

序曲がまた始まつて、こんどは終りまでやられた。いよいよクリストフの番となつた。メルキオルは巧妙にプログラム曲目を立てて、息子の妙技と父の妙技とを同時に發揮されるようにしておいた。ピアノとヴァイオリンのための、モーツアルトの奏鳴曲ソナタを、二人で合奏することになつていた。効果を増すために、まずクリストフが一人で舞台へ出ることにきま

つていた。人々は彼を舞台の入口に連れてゆき、楽壇の前方にあるピアノを指し示し、なすべきことを最後にも一度言つてきかせ、そして袖道具そでの外へ押し出した。

彼は長い前から芝居の広間へは来つけていたから、たいしてびくついてはいなかった。

しかし幾百人の眼の前で、舞台の上ただ一人立った時、にわかきわくに気後れがして、本能的に後へ退さがろうとした。袖道具の方へふり向いてそこへはいろいろとまでした。けれども、そこには父の姿が控えていて、怒った身振りや眼付をしていた。彼はつづけて進み出なければならなかった。そのうえ、もう聴衆から姿を見られていた。彼が進み出るにしたがつて、好奇の叫びが起こり、ついで笑い声が起こり、それが次に広まっていった。メルキオルの見当はずれな色を見た。子供の服装は望むとおりの効果を現わした。長い髪をし、ジプシこまたの少年のような色をし、りっぱな紳士のような夜会裳をして、小跨こまたにおずおず歩いてる小僧が出て来たのを見て、聴衆席では大騒ぎだった。人々はなおよく見るために立上たてあがった。やがて満堂の歓喜となった。それには少しも悪意はこもってはいなかったけれど、ごく気丈な名手をも惘ぼうぜん然たらしむるほどのものだった。クリストフは、騒音や眼や自分に向けられてる双眼鏡ググラスなどにおびえきつて、できるだけ早くピアノのところへ行こうという考えきりもたなかつた。そのピアノは海中の小島のように彼には思われた。頭を下くだげ、側わ

目もふらず、脚燈フットライトに沿うて、急ぎ込んだ足取りで歩いていった。舞台の真中まで行くと、約束どおり聴衆に挨拶あいさつすることもしないで、かえつて背中を向け、ピアノに向かつてまっすぐに進んでいった。椅子いすがあまり高すぎたので、それにすわるには父の助けを待たなければならなかった。しかし彼は狼狽ろうばいのあまり父を待たないで、膝ひざをかけて椅子によじ上った。そのために聴衆の歓びよろこはさらに増した。しかしもうクリストフは大丈夫だった。楽器の前に向えば、もはやだれも恐るべきものはなかった。

メルキオルがついに出て来た。彼は聴衆の上機嫌きげんに得をして、かなり熱烈な喝采かつさいで迎えられた。奏鳴曲ソナタが始まった。少年は一心になつて口をきつと結び、鍵キーの上に眼を据え、小さな足を椅子いすから垂れて、一糸乱れない確実さをもつて演奏した。楽曲が展開してゆくとつれて、彼はますます落着いてきた。あたかもよく知つてる友人らの間にいるような気がした。賞賛のささやきが一つ彼のところまで聞えてきた。すべての人々が黙つて聞きとれ感心してると考えながら、高慢な満足の念がむらむらと頭に上つてきた。しかし演奏を終えるや否や、また不安の念にとらえられた。喝采をもつて迎えられると、嬉うれしいよりもむしろ恥しかった。メルキオルから手を取られて、脚燈フットライトの縁までいっしょに進んでゆき、聴衆に挨拶あいさつをさせられた時に、その恥ずかしさはさらに大きくなった。彼はメルキ

オルの言葉に従つて、おかしいほど無格好にごく低くお辞儀をした。しかし彼は屈辱を感じていた。何か滑稽こっけいな卑しいことでもしてるかのように、自分から真赤になつていた。

彼はまたピアノの前にすわらせられた。そして少年の快樂をひいた。すると狂うがような歡喜が起こつた。各楽曲の後に、聴衆は感激の叫びをあげた。も一度彼にやらせたがつた。そして彼は成功に得意になり、また同時に、命令に等しいそれらの賞賛にほとんど氣を悪くした。最後に、場内総立になつて喝采した。大公爵は拍手喝采の合図をくだしていた。しかしこんどは、クリストフは舞台に一人きりだったので、もう椅子から身を動かす勇氣もなかつた。喝采はさらに激しくなつた。彼は顔を真赤にして当惑の様子で、ますます低く頭を垂れ、聴衆席と反対の方ばかり見つめていた。メルキオルが彼をとらえに出て来た。彼を両腕に抱き取り、接吻を送れと言つて、大公爵の座席をさし示した。クリストフは聞えないふうをした。メルキオルはその腕をとらえ、低い声でおどした。すると彼は厭々いやいやながら言われたとおりの身振りをした。しかしだれの方をも見ず、眼を伏せ、やはり顔をそむけていた。彼は悲しかった。苦しんでいた。何を苦しんでるかはわからなかつたが、自尊心が傷つけられていた。そこにいる人々が少しも好ましくなかつた。いくら喝采つかいされても駄目だめだつた。彼らが笑つたのが、自分の屈辱を面白がつたのが、許せなかつ

た。宙にぶら下つて接吻を送つておかしな姿勢を見られたのが、許せなかつた。喝采されたのがかえつて恨めしいほどだつた。そして、ついにメルキオルが腕から降ろしてくれ、彼は袖道具の方へ逃げていつた。一人の婦人が藁すみれの小さな花束をその通り道に投げた。それが彼の顔をかすめた。彼はすっかり狼狽ろうばいしきつて、道にある一つの椅子を引つくり返しながら、足に任して駆け出した。走れば走るほど人々は笑つた。人々が笑えば笑うほど彼はなお走つた。

ついに舞台の出口まで行くと、そこは彼の姿を見ようとする人でいっぱいになつていた。彼は頭で突き進んで、その間に道を開く、楽屋の奥に駆け込んで隠れた。祖父は大喜びをして盛んにいたわつてくれた。管弦樂オーケストラの樂員たちはどつと笑い出し、また彼を祝つてくれた。しかし彼はそちらを向くことも握手することも承知しなかつた。メルキオルは耳を澄して、まだやまないでいる喝采を値踏みしていた。そしてクリストフをも一度舞台に連れ出そうとした。しかし子供は猛然とそれを拒み、祖父の上着にしがみついて、近寄る者を足で蹴け飛ばした。しまいには涙にむせんだ。彼をそのままにしておかなければならなかつた。

ちようどその時、一人の官員がやつて来て、大公爵が音樂家らを棧敷さじきに呼んでいられる

と告げた。子供をこんなありさまでどうしてお目にかけれよう？　メルキオルは憤つてののしつた。そして彼の怒りは、ますますクリストフを泣かせるばかりだった。その涙を止めさせるために祖父は、泣きやんだらチョコレートを一斤やろうと約束した。食いしんぼうのクリストフはびたりと泣きやんで、涙をのみ込み、連れてゆかれるままになった。しかし不意に舞台へ連れ出しはしないということを、まず堅く誓つてやらなければならなかった。

貴賓席にはいると、クリストフは短上衣を着た人の前にすわらせられた。それは、子犬のような顔をし、逆立った口髯くちひげを生やし、とがった短い頤髯あごひげを生やし、背の低い、赤ら顔の、小太りの人であつたが、横柄ななれなれしきでクリストフに呼びかけ、脂ぎつたあぶら両手で彼の頬をたたき、「モーツアルトの再生」と彼を呼んだ。それが大公爵であつた――それから彼は、大公爵夫人、その令嬢、随員などの手に、順々に渡された。しかし彼は眼をあげて見ることもできなかつたので、その光り輝いた一座のうちから心に止め得た唯一の記憶は、帯から足先までを見た長衣や盛装の一群であつた。若い令嬢の膝の上にするると、身動きをすることも息をつくこともできなかつた。彼女は種々尋ねた。するとメルキオルが、媚こびへつらいの声で、平身低頭した敬語を使いながら答えた。しかし彼女は

メルキオルの言葉に耳をかさないで、子供をからかかってばかりいた。彼はますます真赤になつてくるのを感じた。そして自分の真赤なのがだれの眼にもついていることと考え、その理由を説明したくなつて、太い溜息ためいきをつきながら言った。

「私は真赤になつていますが、熱いんです。」

それを聞いて若い令嬢は放笑ふきだした。しかしクリストフは、先刻聴衆が笑つたのを恨んだようには、その笑いを恨まなかつた。その笑いは快かつたから。それに彼女は彼を抱擁してくれた。それは少しも彼の気を悪くはしなかつた。

その時彼は、棧敷さしきの入口の廊下に、祖父が立つてゐるのを見つけた。祖父は嬉しいような恥ずかしいような様子をしていた。自分もそこにはいつて来て何か言いたかつたのだろうが、だれも言葉をかけてくれる者がないので、あえてなしかねていた。そしてただ遠くから、孫の光栄を眺めて喜んでいた。クリストフはにわか燃え立つてくる愛情を感じた。皆にあわれな老人を正當に判断してもらいたかつたし、皆にその価値を知られてもらいたかつた。彼の舌はほどけてきた。彼は新しい友となつた令嬢の耳もとに伸び上がつてささやいた。

「内密ないしよのことをきかしてあげましょう。」

彼女は笑つて尋ねた。

「なんなの？」

「ご存じでしょう、」と彼はつづけた、「私のメヌエツトの中、私のひいたメヌエツトの中に、りっぱなトリオがありましたのを。……ご存じでしょう。……（彼はごく低い声でそれを歌った）……あれはね、お祖父^{じい}さんがこしらえたんですよ、私じやないんです。ほかの節^{ふし}は皆私のです。けれどあれは、いちばんいいんですよ。お祖父^{じい}さんです。お祖父^{じい}さんはそれを人に言われたがついていません。だれにもおつしやらないでください。……（そして老人の方を指しながら）……そら、あすこにお祖父^{じい}さんが。私は大好きです。私にたいへんやさしいんです。」

そこで、若い令嬢はまます笑つて、かわいい子だと言い、やたらに接吻してくれた。ところが彼女はそのことを皆に話してしまったので、クリストフと祖父とはすっかりまごついた。皆が令嬢といつしよに笑い出した。大公爵は老人にお祝いを言った。老人はまったく当惑して、申しわけをしようとしても言葉が出ないで、あたかも罪人のように口ごもっていた。クリストフはもう若い令嬢に一言も口をきかなかつた。種々からかわれても、黙り込んで堅くなっていた。約束を破つたので彼女を軽蔑していた。高貴の人々にたいす

る彼の考えは、この不信実によつて深く害された。彼は非常に憤慨していたので、人々の言うことも、また大公爵が笑いながら彼を、常任ピアノリストに、宮廷音楽員に任命したことも、もう少しも耳にはいらなかつた。

彼は家の者といつしよに出て行つた。そして劇場の歩廊や、また街路でまで、人々に取囲まれて、お祝いを言われたり、抱擁されて困つたりした。なぜなら彼は、抱擁されることが嫌いだつたし、許しも求めないで人を勝手に取扱うことが容認できなかつたのである。ついに彼らは家に着いた。戸を締めるやいなや、メルキオルは彼を「馬鹿小僧」と呼びだした。トリオは自分のでないと話したからであつた。子供は、それを話したのは賞賛にこそ価すれ、非難をされるいわれのないりつばな行ないであると、みずからよく知つていたので、むつとして粗暴な言葉を言い返した。メルキオルは腹をたてて、あれらの楽曲が相当によく演奏されてなかつたら殴りつけるべきだが、しかしそのよくできた音楽会の効果も彼の馬鹿な一言のために台なしになつたと言つた。クリストフは正義にたいする深い感じをもつていた。彼は隅に引込んでふくれ顔をした。父も大公爵令嬢もすべての人を、軽蔑の中に一くるめにした。また近所の人たちがやって来て、家の者にお祝いを言いいつしよに談笑したのも、癩にさわつた。あたかも、楽曲を弾奏したのは家の者たちであり、

彼自身は彼ら皆の玩具おもちゃのような調子だった。

そのうちに、宮廷から一人の使いが来て、大公爵からの美しい金の時計と、若い令嬢からの上等なボンボン一箱とを、もって来た。どちらの贈物も、クリストフをたいへん喜ばした。どちらが余計嬉うれしいかもわからなかった。しかし彼は嬉しさを自認したくなかったほどひどく機嫌きげんを損じていた。横目でボンボンの方をにらみながら、やはりふくれ顔をしていた。自分の信任を裏切った人から進物を受けていかどうか迷っていた。そしてついに我がを折りかけた時、父は即座に彼を机につかして、口移しにお札の手紙を書き取らせようとした。それまでするとはあまりのことだった。その一日の興奮のせいか、あるいはまた、メルキオルの望みどおりに、「殿下の小さき僕クネヒトにして音楽家ミュージクス……」という語で手紙を始めることを、本能的に恥しく思ったせいか、彼はぼろぼろ涙を流して、どうにも仕方がなかった。使の者はぶつぶつ言いながら待っていた。メルキオルが手紙を書かなければならなかった。しかしクリストフを勘弁してやったわけではなかった。さらに悪いことには、子供は時計を落して壊こわした。小言の嵐あらしが降りかかった。メルキオルは彼に食後の菓子をやらないと叫んだ。クリストフは腹だちまぎれに、それは望むところだと言った。彼を罰するためにルイザは、まずボンボンを取上げてしまおうと言い出した。クリストフは猛たけり

たつて、彼女にその権利はないと言い、その箱は自分一人のものでだれのものでもないと言い、取上げさせるものかと言った。彼は平手で打たれ、かっとなつて、母の手から箱をもぎ取り、それを床にたたきつけ、上から踏みにじつた。彼は鞭打たれ、寢室に連れ込まれ、着物をぬがせられ、寢床に寝かされてしまった。

その晩彼は、家の者が友人らといつしよにりつぱな晩餐ばんさんをしてる音を聞いた。それは音楽会のために一週間も前から用意されたものだった。彼は枕まくらの上で、そういう不正な仕打にたいして腹だたしくてたまらなかつた。他の人たちは声高こわだかに談笑して、杯を突き合っていた。子供は疲れてるのだと客には披露されたので、だれも彼のことを気にかけてくれる者はなかつた。ただ、食事の後に、客が散りかけた時、引きずるような足音が彼の室に忍び込んできた。そしてジャン・ミシエル老人が、彼の寢床を覗のぞき込み、彼を感じわまつて抱擁しながら、「かわいいクリストフ!……」と言つてくれた。それから彼は、ポケットに忍ばしておいたいくつかの菓子をもつとくれた後、恥ずかしい思いをしたかのように、もう一言もいわないでひそかに逃げていった。

それがクリストフには嬉うれしかつた。しかし彼は一日の種々な激情にがっかりしていたので、祖父からもらったうまい物に手をつけるだけの元気もなかつた。彼はすっかり疲れぬ

いていた。ほとんどすぐに眠ってしまった。

彼の眠りは不整だった。電気を放つように神経がにわかによるんで、身体が震えた。荒々しい音楽が夢の中までつきまどってきた。夜中に眼をさました。音楽会で聞いたベートーヴェンの序楽が、耳に鳴り響いていた。序曲のあえぐような息使いで、室の中がいつぱいになってきた。彼は寢床の上に取り上がり、眼をこすりながら、自分はまだ眠ってるのかどうか考えた。……いや、眠ってるのではなかった。彼はその序曲をはつきり聞き分けた。憤怒の喚わめきを、猛りたつた吠ほえこえ声を、はつきり聞き分けた。胸の中に躍りたつ心臓の鼓動を、騒がしい血液の音を、耳に聞いた。荒れ狂う風の打撃を、顔に感じた。その狂風は、あるいは吹きつのもつて吠えたて、あるいは強大な意力にくじかれて突然やんだ。その巨大な魂は、彼のうちにはいり込み、彼の四肢しや魂を伸長させて、非常な大ききにした。彼は世界の上を歩いていた。彼は大きな山であつて、身内には暴風が荒れていた。憤激の嵐！ 苦悩の嵐！……ああなんとという苦悩ぞ！ しかしそれはなんでもなかった。彼はいかに強い心地がしていた。……苦しめ！ もっと苦しめ！……ああ、強いことはなんともいいことだろう！ 強くて苦しむことは、なんといいことだろう！……

彼は笑った。その笑声は夜の静寂のうちに響きわたった。父は眼をさまして叫んだ。

「だれだ？」

母はささやいた。

「しッ！ 子供が夢を見てるんです。」

三人とも黙った。彼らの周囲のすべても黙った。音楽は消えた。そして聞こえるものは、室の中に眠ってる人々の平らかな寢息ばかりだった。それは皆、眩むばかりの力で「闇夜」の中を運ばれてゆく脆い小舟の上に、相並んで結びつけられてる悲惨の仲間であった。

いかなる日もクリストフの顔を眺めよ、

その日汝は悪しき死を死せざるべし。

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（一）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年6月16日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

2008年9月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第一巻 曙

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>